

*本冊子に掲載している内容は、一部変更となる場合があります。

内容解説資料
世探-703

「教科書発行者行動規範」
に則っております。

文部科学省検定済教科書 高等学校地理歴史科用

46 帝国 世探-703

新詳世界史探究

A World History

通史と同時代史をバランスよく記述！

現代世界の成り立ちが
わかりやすい教科書

- 特色1 因果関係を丁寧に記した、理解しやすい「本文記述」…………… 6
- 特色2 文化と社会のつながりがわかる「文化から見る当時の社会」…………… 10
- 特色3 世界全体のつながりがわかる「結びつく世界」…………… 14
- 特色4 探究する力が身につく「探究TRY」「読み解き」…………… 18
- 特色5 理解がさらに深まる「紙面の三段構成」…………… 22

通史と同時代史を 現代世界の成り立ちが

バランスよく記述！ わかりやすい教科書



新詳 世界史探究

令和5(2023)年度発刊
世探-703
B5判 366ページ

■QRコンテンツ

著者執筆の用語解説や、学校法人河合塾と共同作成した演習問題、教科書準拠の問一答、動画などのデジタルコンテンツが充実。

*詳細は本冊子p.68-69および帝国書院ウェブサイトをご覧ください。

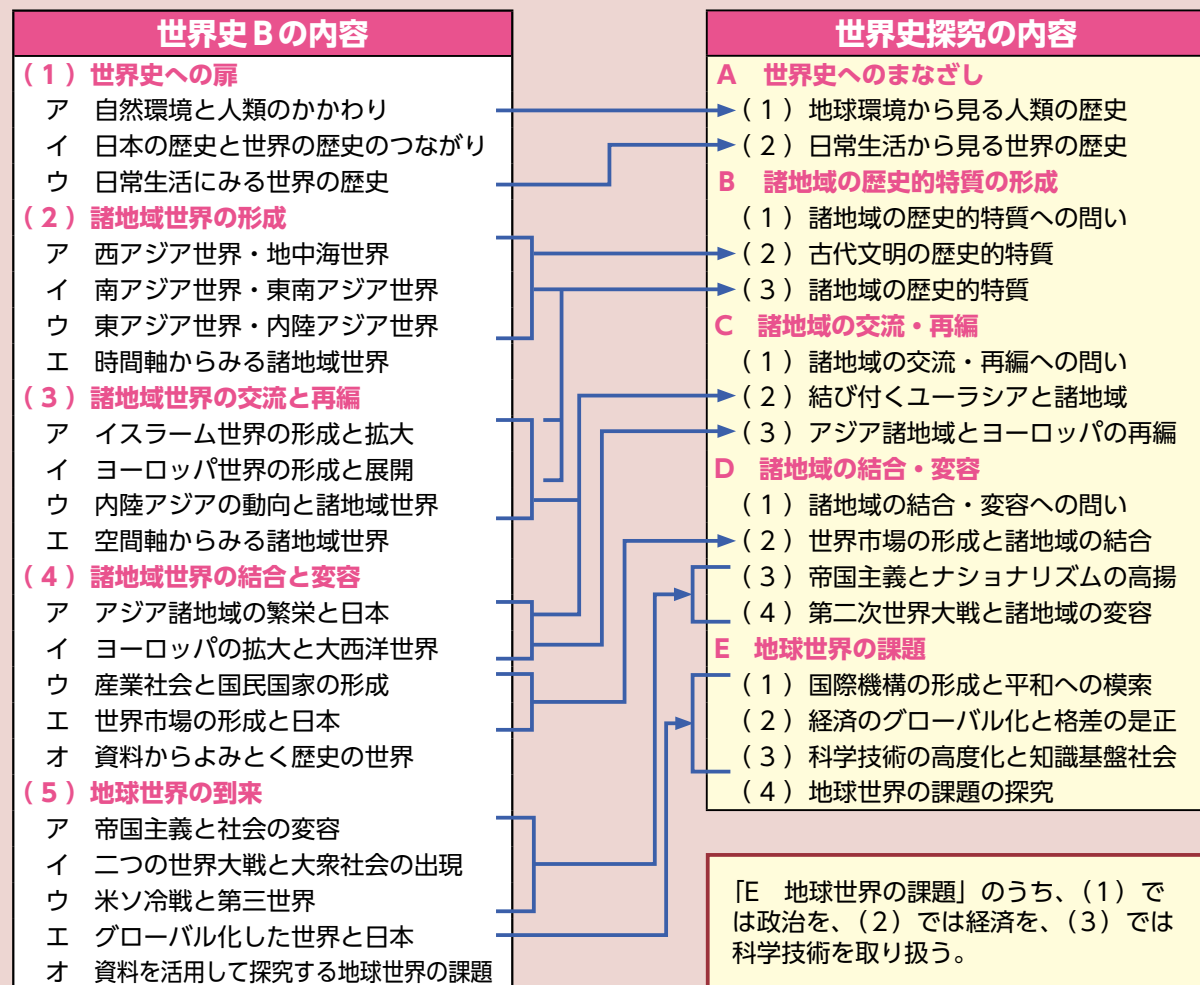
■関連教材

指導資料や準拠ノートなどの関連教材が充実。

*詳細は本冊子p.70-71および帝国書院ウェブサイトをご覧ください。

●新科目「世界史探究」とは

◎「世界史B」を発展的に継承する科目。諸地域を「歴史的特質の形成」「交流・再編」「結合・変容」の3区分で学んだ後、地球世界の課題を探究する。歴史の理解に加えて、「歴史総合」でつちかった「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を働かせ、主題・問いの設定や資料を活用しつつ多面的・多角的に考察する学習活動が求められる。



特色 1

因果関係を丁寧に記した、理解しやすい「本文記述」

- 歴史の流れや社会構造が理解しやすい本文記述
- 世界史の大きな流れがわかる本文記述

● 本冊子
● p.6-9

特色 2

文化と社会のつながりがわかる「文化から見る当時の社会」

- 文化を生んだ社会背景まで丁寧に記した本文記述
- 本文と関連づけることで、文化と社会についての理解がさらに深まる資料群

● 本冊子
● p.10-13

特色 3

世界全体のつながりがわかる「結びつく世界」

- ネットワーク論をベースに展開。地域間の結びつきがわかる前近代史
- 世界システム論をベースに展開。世界のつながりを構造化して理解できる近現代史

● 本冊子
● p.14-17

特色 4

探究する力が身につく「探究TRY」「読み解き」

- 資料読解を通じて思考力・判断力・表現力を養う特設「探究 TRY」
- 各種資料から、資料読解の技能を養う「読み解き」の問い

● 本冊子
● p.18-21

特色 5

理解がさらに深まる「紙面の三段構成」

- 歴史の流れがつかみやすい要約文・本文・側注の三段構成
- 学習場面に応じてさまざまな活用ができる要約文と側注

● 本冊子
● p.22-25

その他の特色・本文執筆者紹介

● 本冊子
● p.26-30

本文試し読み

● 本冊子
● p.31-67

●諸地域の通史と同時代史「結びつく世界」をバランスよく配置



同時代の視点から各時代における諸地域のつながりを記述した特設ページ。全12箇所設置。→本冊子p.14-17で解説

もくじ

世界地図(世界の自然環境), 世界史の舞台	巻頭 1
もくじ・本書の使い方	巻頭 3
はじめに	4

1部
探究学習の導入となる部。地球史から先史時代までと、自身と世界史のつながりについて学習する。

2部
歴史時代の始まりから、10世紀ごろまでを扱う部。諸地域の歴史的特質と、世界のゆるやかなつながりを学習する。

3部
10世紀ごろから、18世紀ごろまでを扱う部。諸地域の交流・再編により、世界全体がつながっていく流れを学習する。

1部 世界史へのまなざし 5

1章 地球環境からみる人類の歴史 6

2章 日常生活からみる世界の歴史 10

家族の形態の変化と歴史 10

感染症への対応の歴史 12

2部 諸地域の歴史的特質の形成 14

複数の資料を読み解いて問いを表現しよう 15

序章 古代文明の歴史的特質 16

1章 東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質 21

1節 中華文明の形成 21

2節 秦漢帝国と東アジア 26

3節 中央ユーラシアと遊牧国家 30

結びつく世界 1～2世紀 34

諸地域を結ぶ「陸の道」と「海の道」 34

4節 遊牧帝国の興亡と移動 35

5節 ユーラシアの変動と東アジア 38

探究TRY ユーラシア東部の国際関係 46

2章 南アジアと東南アジアの歴史的特質 48

1節 南アジアの文明と国家形成 48

2節 東南アジアの社会と国家形成 54

3章 西アジアと地中海周辺の歴史的特質 57

1節 オリент文明の興亡 57

2節 地中海周辺の国家形成 64

3節 地中海周辺と西アジアの帝国 72

探究TRY 古代ローマと世界帝国 82

結びつく世界 3～5世紀 84

ユーラシアの再編と交易ネットワーク 84

4節 ヨーロッパへ広がるキリスト教 85

5節 イスラームの誕生 93

結びつく世界 8～9世紀 99

イスラーム=ネットワークの形成

3部 諸地域の交流・再編 100

複数の資料を読み解いて問いを表現しよう 101

1章 ユーラシア大交流圏の成立 102

1節 イスラーム世界の拡大 102

2節 ヨーロッパ封建社会の展開 110

3節 東アジア諸地域の成長と自立 122

結びつく世界 10～12世紀 128

「海の道」の活性化 128

4節 ユーラシア大帝国の出現 129

結びつく世界 13～14世紀 134

ユーラシア大交流圏の成立と危機 134

2章 アジア諸地域の成熟とヨーロッパの進出 135

1節 明の国際秩序と東・東南アジア 135

2節 世界帝国清とアジア諸国の成熟 144

3節 スペインとポルトガルの進出 151

結びつく世界 16世紀 155

「世界の一体化」の始まり 155

探究TRY 銀にみる世界の一体化 156

4節 イスラーム世界の成熟 158

3章 主権国家体制の成立と交易の拡大 165

1節 ルネサンスと宗教改革 165

2節 主権国家の形成と「17世紀の危機」 171

3節 東欧諸国の台頭とヨーロッパ文化の成熟 181

4節 イギリスとフランスの覇権争いと大西洋三角貿易 187

結びつく世界 17～18世紀 190

「17世紀の危機」とその後の諸地域の発展

民族	9	市民(ギリシア・ローマ)	65	国民国家	204	民族自決	273
文化と文明	16	共和政と民主政	72	ナショナリズム	204	大衆社会	286
中華	25	主権国家	171	自由主義思想	206	債務国・債権国・借款	286
皇帝(中国)	26	重商主義	171	社会主義	216	中間層	290
冊封と朝貢	29	立憲君主政(制)	180	直轄領と保護領・保護国	234	ファシズム	291
遊牧国家	31	資本・資本家	196	帝国主義	246	全体主義	293
世界帝国	63	ブルジョワジー	199	列強	246	グローバル化	339

- 本文ページでは諸地域の通史を、「結びつく世界」では同時代史を学べる構成。
- 資料読解の特設として「探究TRY」を設置。→本冊子p.18-19で解説
- 「文化から見る当時の社会」、「SDGsを考える世界史」など、各種コーナーが充実。→本冊子p.10-13やp.28-29で解説

4部 諸地域の結合・変容 192

複数の資料を読み解いて問いを表現しよう 193

1章 環大西洋革命～工業文明と国民国家の誕生 194

1節 世界で最初の工業化 194

2節 アメリカの独立 197

3節 フランス革命と国民国家の誕生 199

4節 ラテンアメリカへの革命の波及 205

2章 イギリスの覇権と欧米の国民国家建設 206

1節 イギリスの覇権と自由主義 206

探究TRY 工業化による世界の変化 209

結びつく世界 19世紀 211

イギリスの覇権と世界システム 211

2節 ヨーロッパに広がる国民国家 213

3節 アメリカ合衆国の拡大と国家統合 222

3章 世界の一体化の進展とアジアの変容 225

1節 イスラーム王朝の解体と変容 225

2節 南・東南アジアの変容 231

3節 東アジア諸国の模索と変容 236

4章 世界の一体化の完成とその影響 243

1節 帝国主義と世界分割競争 243

結びつく世界 19世紀後半～20世紀初頭 257

世界大戦前夜の世界システム 257

2節 アジア知識人による体制改革の試み 258

探究TRY 国民と国民国家の誕生 266

5章 世界大戦の時代 268

1節 第一次世界大戦と社会主義革命 268

2節 第一次世界大戦とアジアのナショナリズムの展開 277

3節 大衆社会の到来とファシズムの出現 286

4節 第二次世界大戦とその惨禍 294

探究TRY 「普通の人々」とナチズム 302

結びつく世界 20世紀前半 304

二つの世界大戦と資本主義の変容 304

6章 戦後の国際秩序と冷戦 305

**SDGsを
考える世界史**

気候変動と自然災害	7	今なお続く黒人差別問題	320
古代の森林破壊	61	紛争による難民の増加	326
奴隷貿易と荒廃するアフリカ	189	イスラーム過激派による抑圧と奴隷貿易の廃止	207
女性が教育を受ける権利	326	リソにおける国営化と集団化の欠陥	328
赤十字の誕生	219	南北問題は正の取り組み	329
ビスマルクの社会保険制度	249	オリンピック・万博とインフラ整備	334
女性の社会進出と選挙権運動	287	気候変動・自然災害に対する取り組み	346
ヴァイマル憲法と福祉国家の原点	288	基本的人権としての	
国境を越える取り組み	305	ジェンダー(社会的性差)平等	348

5部 地球世界の課題 312

1章 冷戦の展開と平和の模索 313

1節 集団安全保障と冷戦の展開 313

2節 多極化の始まり 316

3節 新しい国際秩序を求めて 323

2章 グローバル化する国際経済とその課題 328

1節 冷戦下の経済秩序と格差 328

結びつく世界 20世紀後半 338

アメリカの覇権とその変容 338

2節 グローバル経済の光と影 339

3章 情報と科学技術によって結びつく世界 343

結びつく世界 現代 349

世界システムの変容とグローバル化の行方 349

4章 地球世界の課題の探究 350

さくいん 352

世界地図(世界の国々), SDGsを考える世界史 巻末 2

ケーススタディ
現代の諸課題を考える

アフリカの民族アイデンティティに介入する外国勢力 317

冷戦後に起こった紛争①～クリム(クリミア)半島を事例に 324

冷戦後に起こった紛争②～アフガニスタンを事例に 325

ポスト植民地時代における二つの経験 337

国際的な影響力を強める中国 341

移民と地域社会の関わり 342

サブカルチャー作品にみる「冷戦と核エネルギー」 344

サブカルチャー作品にみる「AI・VRと人間の関わり」 345

**文化から見る
当時の社会**

儒家の思想と後世への影響	24
法家の思想と秦の統治	25
国際色豊かな唐の文化	42
アジア各地に広がる文化	43
古代オリンピックにみるギリシア社会	70
ヘレニズム哲学と芸術	71
ローマの都市文化の広がり	76-77
イスラーム世界の都市文化と交易	108
イスラーム世界で発達した学問	109
中世ヨーロッパとキリスト教	115
教会建築と信仰	116
絵巻・挿絵から読み解く明代の社会	140
イエズス会宣教師が明に伝えた世界	141
ヒューマニズムとルネサンス	165
キリスト教とルネサンス	166-167
華麗な宮廷文化の隆盛と市民文化の芽生え	184-185
さまざまな思想と社会への影響	186
自由主義とナショナリズムに影響を与えたロマン主義	215
科学だけではなく社会に影響を与えた進化論	244
二つのジャンルの絵画に描かれたフランス社会	245
チャップリンとその作品からみる大量生産・消費社会	289

4部
18世紀後半から、20世紀半ばまでを扱う部。歴史総合「近代化と私たち」「国際秩序の変化や大衆化と私たち」の範囲にあたる時代をさらに深める。工業化、国民国家形成、帝国主義などにより諸地域がより深く結合・変容し、第二次世界大戦で一定の帰結を見るまでを学習する。

5部
20世紀半ばから、現代までを扱う部。歴史総合「グローバル化と私たち」の範囲にあたる時代をさらに深める。政治・経済・科学技術の3つの視点から、これまでの歴史の帰結やそれらが生んださまざまな課題などについて学習する。

●歴史の流れや社会構造が理解しやすい本文記述

●歴史事象の因果関係を丁寧に記述しているので、歴史の流れや社会構造がよくわかる。

例) 3部3章4節 イギリスとフランスの覇権争いと大西洋三角貿易

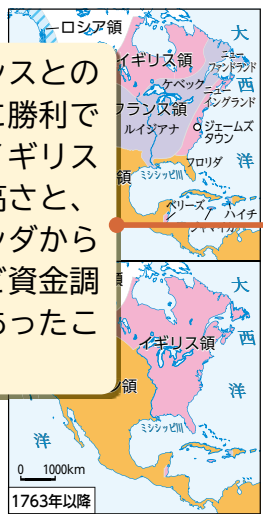
↓教科書 p.188-189

財政軍事国家と国債

イギリスでは財政革命によって税収を確実にし、財政への信頼が高まったことを背景に、公債を金利の安定した国債に統一した。この国債による資金調達が18世紀におけるイギリスの戦争遂行を可能にし、人口規模や経済力において勝るフランスとの戦争に勝利した。その反面、税収のほとんどが軍事費や国債の償還にあてられ、民事にあてる予算が大幅に縮減された。さらに19世紀初頭には過大な累積債務のために、破綻寸前となったが、産業革命(→p.194)の本格化による経済成長によって危機を脱した。

100万ポンド
*「国債費」とは、国債利子および元金償還費のこと

↑18世紀のイギリスの歳出・歳入と軍事費 読み解き 軍事費が増大している時期に生じた戦争は何であったか、p.187と照らし合わせて考えてみよう。



イギリスがフランスとの植民地獲得競争に勝利できた背景には、イギリス国債の信用度の高さと、それによるオランダからの資金の流入など資金調達能力の高さがあったことがわかる。

↑2 北米での勢力争い パリ条約により、北米のフランス領がいったん消滅した。ミシシッピ川以西のルイジアナはスペインに譲渡されたが、1800年にフランスに返還された。

七年戦争の結果として各国は財政危機に直面し、その負担を植民地や国内に押しつけたことが、アメリカの独立戦争やフランス革命につながっていったことがわかる。

イギリスの勝利と各国への影響

イギリスは財政改革を成し遂げて、対仏抗争で優位に立った。一方、英仏の抗争はヨーロッパ各国に財政問題を引き起こした。

イギリスでは名誉革命の後、1694年にイングランド銀行が創設され、議会の承認を得て政府が発行する借用証書(国債)を発行し、これが金融市場で取り引きされるようになった(財政革命)。

議会政治が確立し、徴税の権利をもつ議会在元利を保証していたイギリス国債の信用は高かった。そのため、17世紀の最富裕国であったオランダでは、豊かな資金をもっていた人々がイギリスの国債を購入したため、オランダの資金がイギリスに流れることになった。

イギリスが、相次ぐフランスとの戦争に勝利したのは、この財政革命によって、フランスより戦争の費用を集める能力が高まったためであった。大量の国債を発行したイギリス政府は、国民には重い税を課すことにもなった。それでもフランスとの戦争に次々と勝利し、植民地を拡大していったため、議会在承認した税に対しては、国民の不満は爆発しなかった。

第2次英仏百年戦争のなかの七年戦争は、当時としては大戦争であった。このため、戦勝国のイギリスを含めて、参戦国はいずれも深刻な財政危機に見舞われることになった。植民地に負担を分担させようとしたイギリスやスペインでは、白人の定住者による独立運動が起こり(アメリカ独立戦争・ラテンアメリカの独立)、帝国の再編をせざるをえなくなった。また多くの植民地を失ったフランスでは、本国の財政が危機的な状況となり、フランス革命の引き金となった。

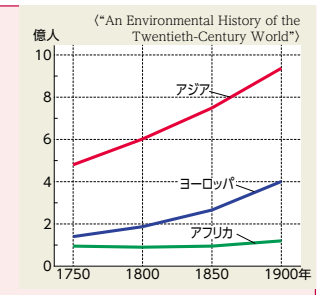
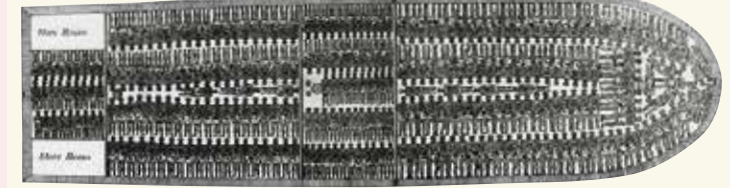
大西洋三角貿易の展開

アメリカの作物、ヨーロッパの軽工業品、アフリカの黒人奴隷を取り扱う大西洋三角貿易は、イギリス産業革命の準備をする一方で、アフリカを荒廃させた。スペインはラテンアメリカに広大な植民地を保有しながら、奴隷供給地のアフリカ西海岸に拠点がなく、植民地で使役する奴隷を購入するた

SDGsを 考える世界史 **奴隷貿易と荒廃するアフリカ**

ポルトガル人・イギリス人・フランス人などが熱心に行った大西洋奴隷貿易は、全体で数千万人のアフリカ人を、大量の労働力を求めていたアメリカやカリブ海の植民地に奴隷として送り込んだ。それは、ヨーロッパ人の商人やプランテーション経営者にとっては、大きな利益の源であった。しかし、奴隷とされた本人やその家族にとっては悲劇であり、働き盛りの人々を連れ去られたアフリカ社会にも、深刻な打撃となった。そればかりか、アフリカ西海岸にはヨーロッパ人から手に入れた武器を用いて、奥地で奴隷狩りを行い、ヨーロッパ人に売り渡すことを仕事とするダホメーやベニンなどの黒人国家も現れた。こうしたゆがんだ発展は、アフリカの成長を妨げる原因となった。

奴隷が導入されたアメリカなどでは、奴隷解放(→p.224)、公民権運動(→p.320)の後、いまだに黒人への差別的な対応が残る。貧困率は白人より高く、教育水準も低いのが現状である。



めに、外国商人に奴隷供給の特権を認めていた。利益が大きかったこの特権は、18世紀の諸戦争の原因の一つにもなっていた。

一方、奴隷貿易を盛んに行ったのは、西アフリカに拠点をもったポルトガル・イギリス・フランスであった。イギリスのリヴァプール、フランスのナントなどから、火器や綿織物を積んだ船が、ベニン王国など西アフリカの黒人国家に向かい、そこで積み荷と奴隷が交換された。連行されたアフリカ人の奴隷は数千万人に上り、アフリカ社会は深刻な打撃を受けた。

アフリカからカリブ海やアメリカ大陸へ向かう航海は、「中間航路」とよばれたが、この航海は無理に奴隷を詰め込んだり、水不足や感染症が生じたりしたため、死亡率がかなり高かった。運ばれた奴隷は、カリブ海やアメリカ大陸で砂糖やたばこで交換され、ヨーロッパへそれらの世界商品が送られた。大西洋三角貿易として知られるこの一連の貿易で、ヨーロッパ各国は大きな利益を得た。特にイギリスは、この奴隷貿易を基盤として、カリブ海と北アメリカ大陸を核とする広大な世界帝国を完成したため、膨大な貿易の利益を得ることができた。またカリブ海と北アメリカ大陸はイギリス製品の市場となり、一方で綿花のような原料の供給地ともなった。こうした国際的なつながりは、イギリスで世界最初の産業革命が起こる要因の一つとなった。人道的な立場から奴隷制度への批判が高まると、イギリスでは19世紀初頭に奴隷貿易が禁止され、その後、各国の植民地は奴隷制度の廃止に向かった。

① アジア人やアフリカ人へのまなざし ヨーロッパ人は、奴隷貿易を行って、奴隷を物のように扱った。しかし一方で、ヨーロッパの知識人の間には、ヨーロッパの近代文明への批判として、アフリカ人やアメリカ先住民、アジア人こそが、けがれない「高貴な未開人」だとする見方も生まれた。

② イギリスの帝国 重商主義政策は、原料の供給源や製品の市場などの獲得に役立ち、産業革命の前提となる。そのためこのころ、国とその植民地は、国ともよばれる。

大西洋三角貿易で得た膨大な利益は、イギリスで産業革命が起こる一因になったことがわかる。

4節のまとめ

イギリスがヨーロッパの抗争に勝利した最も大きな理由は何か、あなたの考えを説明しよう。

3章の振り返り 17～18世紀のヨーロッパの社会構造の変化に大きな影響を与えたものは何か、あなたの考えを説明しよう。

因果関係を丁寧に記した、理解しやすい「本文記述」

●世界史の大きな流れがわかる本文記述

●地域を超えた歴史事象のつながりがわかり、世界史の大きな流れが理解できる。

⇒ 本冊子p.45-53 (試し読みページ) に、原寸で掲載しています。

例) 3部2章1節 明の国際秩序と東・東南アジア

➡ 明・日本・琉球・東南アジア・満洲の歴史を、相互に関連づけて理解できる。



14 世紀の東・東南アジア

明は、倭寇を抑えるために対外関係を国家間に限定する海禁=朝貢体制をしいたことがわかる。その結果、日本は朝貢・冊封を受け入れて勘合貿易に踏み切らざるを得なかったことがわかる。

↓ 教科書 p.136-137 より

宋・元代に海上貿易が発展していた東シナ海では、「14世紀の危機」のなかで日本で鎌倉幕府が倒れ南北朝の動乱が広がると、海商や武士団などの勢力が自立的な活動を強め、朝鮮半島・中国沿海部で襲撃・略奪行為を働くようになった。彼らは倭寇(前期倭寇)とよばれ、高麗・元の沿岸住民や武装勢力も合流して、諸国の政府を苦しめた。

明が成立すると、洪武帝は倭寇を力で抑え込む方針をとり、沿海部の治安維持のために民間の海上貿易を禁止し(海禁)、対外関係を国家間の朝貢・冊封関係に限定するという、厳しい対外関係管理体制をしいた(海禁=朝貢体制)。これにより、明と貿易するには朝貢・冊封を受け入れなければならないため、長い間朝貢を避けていた日本も、室町

幕府の足利義満が朝貢貿易に踏み切った(勘合貿易)。
任 1368~94 日本

15 世紀~16 世紀の東・東南アジア

海禁=朝貢体制のなかで、王国が繁栄したことがわか内経済の回復や国際商業の見られたことがわかる。

↓ 教科書 p.137-138 より

明への朝貢には、国ごとに間隔が定められるなど、制限が多かったが、15世紀には、アジア海域の各地で、朝貢貿易のしくみを利用する動きが広がった。琉球は、明の冊封を受けたいうえにほぼ無制限の朝貢貿易を許され、福建商人などのネットワークを利用しながら、東南アジア・日本などの商品を集めて明に朝貢し、手に入れた中国商品を各国に運んだ。併せて、東南アジアと朝鮮・日本などを結ぶ中継貿易も行った。

一方、東南アジアでは15世紀に、マラッカ王国が急成長した。マラッカは、鄭和の船団の寄港地を提供するほか、国王みずから明に赴くことで、明の優遇を勝ちとり、マラッカ海峡を中心とするインド洋・東南アジア海域の交易ネットワークと、明や琉球を結びつける役割を果たした。

↓ 教科書 p.139 より

15世紀末ごろから世界の気候が温暖化に向かうと、明においても農業生産の向上と手工業・商業の発展がみられ、さらに「大航海時代」の国際的な商業の活発化と結びついて、経済が著しい伸びをみせた。

16 世紀~17 世紀半ばの東・東南アジア

国際貿易の発展が、南北で貿易統制への対抗(北虜南倭)につながったことがわかる。1570年前後に明の統制が緩和された結果、周縁部で軍事-商業勢力が台頭したことがわかる。

↓ 教科書 p.141-142 より

16世紀に国際貿易が盛になると、明の周縁部では、規制を破って貿易の利益を得ようとする動きが活発化した。北方からはモンゴルのアルタンが侵入を繰り返し、南方では海禁を破って海上での私貿易や海賊活動が再び激化し(後期倭寇)、南北からの圧力は1550年代に頂点に達した。これらは単なる略奪行動ではなく、明の海禁=朝貢体制に対抗して貿易を求める南北共通の動きであり、国際貿易の主導権をめぐる抗争であった。対応を迫られた明は、1570年前後について政策を転換し、南方では海禁を緩めて日本以外との民間貿易(互市)を認め、北方でもアルタンと講和して国境貿易に応じた。

このような貿易の活発化によって政府の統制が崩れると、利益を求めて競争も激化し、そのなかから軍事と商業が結びついた強力な新興勢力が台頭した。北方では、アルタン王家に加えて東北の女真人の間でも統合が進み、また東シナ海でも海上勢力が再編されていった。日本では、強固な家臣団を編制し領域支配を広げた戦国大名が登場し、織田信長・豊臣秀吉が鉄砲をとり入れて貿易港・銀山を掌握し全国制覇を進めた。

●文化を生んだ社会背景まで丁寧に記した 本文記述

- 本文で、文化を生んだ社会背景まで丁寧に解説。
- なぜそのような文化が生まれたのかがわかり、文化史の理解が深まる。

⇒ 本冊子p.38-39(試し読みページ)に、原寸で掲載しています。

↓教科書 p.42-43

文化から見る 当時の社会

国際色豊かな唐の文化

唐の時代には、南北の統合と西域文化の流入により、国際色豊かな文化が形づくられた。さまざまな資料から、唐の文化の国際性を見てみよう。



↑1 外出する宮廷の人々 女性たちの間では、胡服とよばれる、高袖で体にぴったり沿う西方趣味の服装が流行した。胡とは、当時ソグドを指した。

↑2 発掘された小麦粉食品 小麦の製粉技術は西方由来である。小麦粉を使った食品は漢代に現れ、「胡餅」「胡食」とよばれた。唐代には民衆にとっても日常的な食物となっていた。

↑3 唐三彩 前面の人物が持つ弦楽器は琵琶とよばれ、日本にも伝わった。

↑4 唐の詩人白居易が、長安から地方へ左遷され、廬山のふもとに草庵を建てたときによんだ詩。

↑5 『枕草子』 日本の平安時代の作品。藤原道隆の娘、中宮定子に仕える清少納言が、宮廷生活を記した随筆。

↑6 唐文化

アジア各地に広まる文化

晋唐文化は、漢文化圏共通の文化的土壌となった。資料から、日本でのように唐の文化が受容されていたのを見てみよう。

↑1 小倉屋 ② 布匠 ③ 山崎のこし ④ 後藤名

↑2 求法僧の取经の旅 東晋の僧法顕は、仏典を求めて陸路でインドまで赴き、海路で帰国して『法苑珠林』を著した。また、唐代には玄奘が陸路、義浄が海路でインドを訪れ、経典を持ち帰った(→p.40)。

↑3 顔真卿の書 東アジア各地で広く模範として重んじられた。

↑4 求法僧の取经の旅 東晋の僧法顕は、仏典を求めて陸路でインドまで赴き、海路で帰国して『法苑珠林』を著した。また、唐代には玄奘が陸路、義浄が海路でインドを訪れ、経典を持ち帰った(→p.40)。

↑5 問い 晋唐文化について、魏・晋代から唐代までの文化の流れを要約しよう。

魏晋南北朝時代	
詩文	田園詩人・陶潜(陶淵明)(東晋)『菊去來辞』 西六朝詩集(4字・6字の対句・韻を用いた華麗な文章)が流行…昭明太子(梁)『文選』を編集
書画	王羲之(東晋)…書聖 楷書・行書・草書を芸術化 顧恺之(東晋)…画聖『女史箴图』
宗教	漢来僧 仏図澄(ブドテンガ)…亀茲(クチャ)出身 鳩摩羅什(クマラジーヴァ)…仏典漢訳 達磨(ダルマ)…インド僧、禪宗の始祖 渡印僧…法顕(東晋)『法苑珠林』 石燈寺院…敦煌(莫高窟)・雲崗・龍門
思想	清談が流行…『竹林の七賢』
隋唐時代	
詩文	唐詩…李白・杜甫・王維・白居易 古文(漢代の文体)の復興…韓愈・柳宗元
書画	顔真卿…楷書 張旭…草書 吳道玄…山水
宗教	宮廷・貴族の保護で隆盛 天台宗・禪宗・浄土宗など宗派が成立 渡印僧…玄奘『大唐西域記』、義浄『南海寄帰内法伝』 歴代皇帝の保護により発展 マニ教・ゾロアスター教(祆教)・ネストリウス派キリスト教(景教)・イスラーム
その他	唐三彩…緑・褐色・白などの彩色をした陶器

本文と関連づける形で、文化史の資料を配置。「読み解き」の問いに取り組むことで、文化への理解がさらに深まる。(資料については本冊子p.12-13で解説)

魏晋から隋唐にかけて、他文化にも寛容な遊牧民が一貫して主導権を握っていたために、当時は多様な宗教・思想が展開したことがわかる。

仏教が普及した結果、在来の思想が刺激され、道教の成立や儒教の体系化が起こり、中国で三つの宗教が共存する形が生まれたことがわかる。

世界宗教の伝播

この時期、特定の民族や地域を超えて信仰される世界宗教が広まった。仏教に加え、新たに西方からマニ教・ゾロアスター教(祆教、→p.63)・ネストリウス派キリスト教(景教、→p.79)・イスラーム(後に回教とよばれる、→p.93)が伝来した。

南北文化の融合 晋唐文化

魏・晋以来、江南の優雅な文化と華北の質実な文化の二つの流れが成長し、隋・唐で融合した。仏教をはじめ西域文化も流入し、唐代には国際色豊かな文化が栄えた。魏・晋代に始まり、南朝・北朝で発展し隋・唐に至る文化の流れを晋唐文化という。この一連の文化は、朝貢使節や僧侶・商人の往来を通して各地に広がっていき、日本を含む東アジア共通の文化的土壌となった。

魏・晋以降、中央ユーラシアに連なる華北では、質実剛健な遊牧系政權のもとで、仏教をはじめとする外来文化が漢代までの文化と融合した。また、緑豊かな江南では貴族中心の優雅な六朝文化が栄え、世俗を離れた趣味や幅広い教養が貴族たちに好まれ、清談とよばれる哲学的談議が流行した。東晋の陶潜(陶淵明)の詩や王羲之の書、顧恺之の絵画は、当時にとどまらず後世まで広く愛された。

この二つの流れが南北の統合と大運河によって結びつき、さらにソグド文化やインド系・イラン系文化などの入り混じった西域文化が流入・融合したのが、隋唐の文化である。主に華北で発展した漢訳仏教や仏

像、江南で発達した詩文や書・画は、遊牧民と漢人、華北と江南といった違いを超えて広く受け入れられ、さらに時代や地域をも超えて後世まで重んじられた。李白や杜甫、白居易(白楽天)らの唐詩は、中国にとどまらず日本をはじめ漢字文化圏共通の教養として広く親しまれた。

多様な文化に寛容な遊牧民が主導権を握っていたこの時代は、さまざまな宗教・思想も活発に展開した。なかでも紀元前後に伝来した仏教は、4世紀以降、中央アジア出身の僧侶法顕・鳩摩羅什によって華北の諸国で盛んになり、江南でも貴族たちに広まった。北朝から唐にかけて、巨大な石窟寺院が作られるなど仏教は国家的保護を受けて栄え、仏典の伝来・翻訳が進んで天台宗・禪宗・浄土宗などの諸宗派が成立した。一方、外来の仏教の普及は在来の民間信仰や儒教を刺激し、老荘思想や神仙思想などを取り入れた道教が成立して、唐代には王朝の保護を受けた。儒教でも経典の整理・研究が進み、唐代に太宗の命で注釈書『五経正義』がつくられ、科挙試験のための公式解釈となった。

やがて唐代後半になると、このような国際色豊かで普遍性の高い文化から、古文の復興を主張した韓愈・柳宗元のように、中国内地の風土に根ざし、漢代に模範を求める動きが盛んになった。

42 | 魏晋以来の民族(北・南)の融合を背景に、新しい文化が生まれたことがわかる。また、隋唐が成立した結果、西域文化が流入し、文化の融合がさらに進んだことがわかる。

●本文と関連づけることで、文化と社会についての理解がさらに深まる資料群

- 本文と関連づける形で、ページ上部に文化史の資料を配置。
- 「読み解き」の問いに取り組むことで、文化に表れている当時の社会の様相まで理解できる。

↓教科書 p.244-245

文化から見る当時の社会

科学だけではなく社会に影響を与えた進化論

19世紀後半に科学的見地から「種の起源」が書かれ、当時の社会とそれ以降の人々の考え方に大きな影響を与えた。「種の起源」とそれに対する当時の批判や、進化論に影響を受けた社会進化論を読み解き、当時の社会の様相を見てみよう。

史観 **ダーウィン『種の起源』**(進化論 1859年)
 …たとえわずかなものであれ、他の個体よりも有利な変異を備えた個体は、生き延びて同じ性質の子どもを残す可能性が大きいと考えられないだろうか。その一方で、少しでも不利な変異は確実に排除されることもまた、確かなような気がする。
 このように、有利な変異は保存され、不利な変異は排除される過程を、私は自然淘汰と呼んでいる。(渡辺政隆訳)

史観 **『社会進化論』**(キッド著 1894年)
 …差異は、ヨーロッパの進歩的諸民族と非ヨーロッパ諸民族とを比較した場合にいっそう顕著である。合衆国や西インドにおける不精で不用心で容気な黒人の存在を、その黒人が住む場を支配する民族の存在と比較する時、その差異はいっそう明瞭となる。(松永友有訳)

読み解き 当時、進化論が批判されたのはなぜか、図1や本文をもとに考えよう。また、後に社会進化論は進化論を用いてどのような主張をしたのだろうか。

↑1 **ダーウィンの進化論を風刺する絵**(1874年)

文学	スタンダール(仏)『赤と黒』 パルザック(仏)『人間劇』 フロベール(仏)『ボヴァリー夫人』 ティケンズ(英)『二都物語』 トゥルゲーネフ(露)『父と子』 ドストエフスキー(露)『罪と罰』 トルストイ(露)『戦争と平和』 ソラ(仏)『居酒屋』 モーパッサン(仏)『女の一生』 イブセン(ノルウェー)『人形の家』	
学	象徴主義	ボードレー(仏)『悪の華』
	象徴主義	ヴェルレーヌ(仏)『秋の歌』
	S F	ヴェルヌ(仏)『海底二万里』 ウェルズ(英)『タイムマシン』
音楽	国民楽派	ドヴォルザーク(チェコ)『新世界より』
	印象派・象徴派	ドビュッシー(仏)『海』
	写実主義	フルベ(仏)『オルナンの埋葬』
	自然主義	ミレー(仏)『落ち穂拾い』
美術	印象派	モネ(仏)『印象・日の出』 ルノワール(仏)『ムーラン=ド=ラ=ギャレット』
	ポスト	セザンヌ(仏)『サント=ディクトワール山』
	印象派	ゴッホ(仏)『タヒチの女』 ゴッホ(露)『ひまわり』
	その他	マネ(仏)『草上の昼食』 彫刻) ロダン(仏)『考える人』
学	ニーチェ(独) 哲学者	『ツァラトゥストラはかく語りき』
	マルクス(独) 哲学・経済学者	『共産党宣言』『資本論』
	ミル(英) 哲学・経済学者	功利主義・自由主義を擁護
	ランケ(独) 歴史家	近代歴史学の基礎をつくる
術	ダーウィン(英) 博物学者	進化論『種の起源』

↑2 19世紀後半の文化

二つのジャンルの絵画に描かれたフランス社会

19世紀後半のヨーロッパ美術を牽引したのはフランスだった。写実主義・自然主義と印象派をそれぞれ代表する絵画を通して、当時のフランス民衆社会の様相を見てみよう。

↑4 **ミレー作『落ち穂拾い』** 第二帝政下(→p.217)の農村社会を描いている。聖書では、農地所有者に対して、穀物収穫時に生じる落ち穂は貧者のために捨て置くように記されていた。(オルセー美術館蔵 1857年ごろ 83cm×110cm)

↑5 **ルノワール作『ムーラン=ド=ラ=ギャレット』** 普仏戦争敗北(→p.221)から5年後、パリ市内のダンスホールは、職人・労働者・商店員・女工たちで賑わっていた。(オルセー美術館蔵 1876年 131cm×175cm)

読み解き 第二帝政下の農村社会の様子と、帝国主義時代の都市民衆生活の様子は、それぞれどのようなふうだったと言えるだろうか。また、どのような要因で図5のような都市民衆生活が発達したのか、本文の記述も踏まえて考えよう。

「文学と絵画は、19世紀後半になると、職人・労働者・商店員・農民らにも身近になった」という本文記述と、農民や都市の民衆をテーマに描いた絵画資料とを関連づけることで、社会と文化の関係を具体的に理解できる。

19世紀後半の社会科学

自然科学が発展するにつれ、社会科学分野でも自然科学的思考への関心が高まった。進化論が提起され、従来の宗教観が揺さぶられた。

自然科学界でさまざまな法則が発見されたことは、社会科学にも影響を与えた。社会を考察するときに、統計資料を用いたり、何らかの法則を探索しようとする機運が強まったのである。18世紀末に『人口論』を著し、貧困の原因を人口増加と食料生産の不均衡に求めたイギリスのマルサスがその先駆者だった。19世紀後半に、自然科学的思考を重視する傾向がますます強まり、イギリスのダーウィンが『種の起源』(1859年)のなかで唱えた進化論が、宗教観と社会観に大きな影響を及ぼした。進化論が社会に流用したイギリスのスペンサーは「適者生存論(社会進化論)」を唱え、これが1870年代に入ると、社会的弱者や、劣等とみなされた民族・人種への迫害を正当化する論理になっていた。

歴史学の分野でも、史料批判による科学的研究方法が重視されるようになり、ここに近代歴史学が始まった。また、史料館の整備と史料集の刊行が各国で進み、ナショナリズムの風潮と相まって、「国民」の実在を前提にその成立・発展を叙述する国民史の流行につながった。一方で、ナショナリズムに批判的なマルクスが唱えた史的唯物論(唯物史観)も、歴史学の発展に貢献した。

↑4 19世紀自然科学の発見・発明

電気・電力	ファラデー(英) 電磁誘導の法則 マイヤー(独) ヘルムホルツ(独) エネルギー保存の法則 ジーメンズ(独) 発電機とモーター エディソン(米) 電灯・蓄音機・映画
通信	モールス(米) 電信機 ベル(米) 電話機 マルコーニ(伊) 無線電信
交通	ダイムラー(独) ディーゼル(独) エンジン ライト兄弟(米) 動力飛行機での初飛行に成功
その他	ノーベル(スウェーデン) ダイナマイト レントゲン(独) X(エックス)線 キュリー夫妻(仏・ポーランド) ラジウム パストゥール(仏) 細菌学(ワクセン予防接種、殺菌法) コッホ(独) 細菌学(結核菌、ツベルクリン、コレラ菌)

244 | 4部4章 世界の一体化の完成とその影響

本文から、進化論が社会観・宗教観にも深い影響を及ぼしたことがわかる。さらに、史料の『進化論』と『社会進化論』とを比較することで、本文の内容を具体的に理解できる。

大衆が文化を支える新時代

芸術分野にも自然科学の影響が及んだ。印刷技術の進歩により、芸術が大衆の身近なものになると同時に、マスメディアの出現で大衆社会のきざしが見え始めた。

19世紀後半は、文学や絵画でも自然科学の影響が表れ、人物を客観的に描写しようとする写実主義が台頭した。写実主義をさらに推し進めた自然主義の文学では、人物の行動を遺伝で説明するなど、科学的知見をとり入れる傾向が強まった。また、光に関する研究が深まるにつれて、光の変化を絵筆で表現しようとする画家たち(印象派)が現れた。さらに、科学知識を応用するSF小説も誕生した。

これまで専ら貴族や上層ブルジョワジーのものだった文学と絵画は、19世紀後半になると、職人・労働者・商店員・農民らにも身近になった。第2次産業革命の進展で国民全般の生活水準が向上したことや、科学技術の発展が印刷術にも及んだ結果、カラー印刷も含めて大量生産が可能になり、書籍や雑誌の価格が低下して、安価な大衆向け新聞も欧米各国で創刊されたためだった。新聞では連載小説が、雑誌では小説に加えて名画の複製画が人気を博した。

こうしたマスメディアの登場と、同時期に初等教育の義務化が進んで識字率が向上したことが相まって、マスコミュニケーションにより画一的な論議が形成される大衆社会へのきざしも、19世紀末に現れ始めた。

↑1 新たな芸術運動 写実主義・自然主義の隆盛に反発して、善悪の価値判断を避けて美を追求する耽美主義や、形式を軽視して暗示に富む表現を目指す象徴主義など、新しい芸術運動も同時に起きていた。

↑2 問い この時代に芽生えた、後の大衆社会をつくる要因について要約しよう。

1節 帝国主義と世界分割競争 | 245

大衆向けの書籍や雑誌、新聞が誕生した背景には、生活水準の向上や印刷技術の発展があったことがわかる。

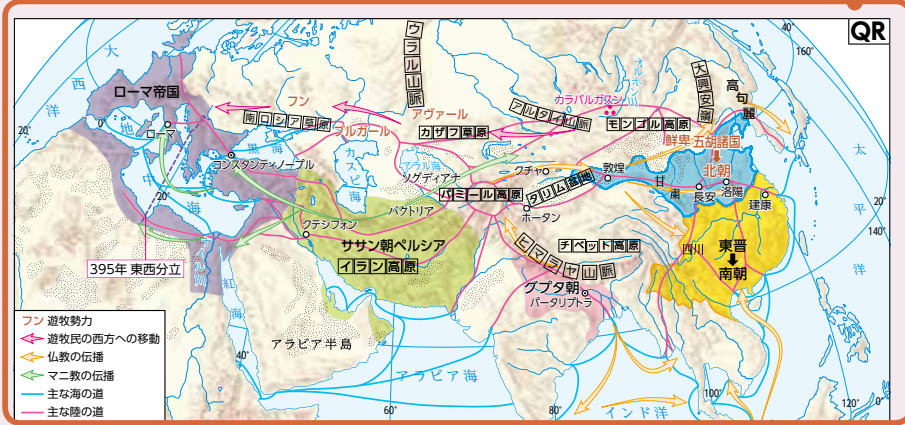
●「文化から見る当時の社会」一覧(全12箇所)

ページ	本文の小見出し
24-25	諸子百家の思想と漢字文化
42-43	南北文化の融合 晋唐文化
69-71	古代ギリシアとヘレニズムの文化と社会
76-77	地中海周辺に広がるローマ文化
107-109	都市に支えられたイスラーム文化 イスラームの学問と芸術
115-116	中世ヨーロッパの文化
140-141	明後期の社会と文化
165-168	ルネサンスの開花 ルネサンスと科学
184-186	華麗な宮廷文化の隆盛と 市民文化の芽生え
215-216	19世紀前半の文化的潮流 ～ロマン主義
244-245	19世紀後半の社会科学 大衆が文化を支える新時代
288-289	現代文化の芽生え(20世紀前半の文化)

●ネットワーク論をベースに展開。 地域間の結びつきがわかる前近代史

- 地域を超える結びつきの視点から世界史をみる特設を、全12箇所設置。
- 前近代史は、ネットワーク論をベースに展開。
- 地域間の結びつきを俯瞰することで、世界史への理解が深まる。

↓教科書 p.84



結びつく世界 3～5世紀 ユーラシアの再編と交易ネットワーク

●「3世紀の危機」と民族大移動

3世紀、北半球の気候が急激に寒冷化し、ユーラシアの農耕地域では農業が大打撃を受け、各地の古代帝国に動揺が広がった。また内陸部では乾燥化が進んで放牧地が枯渇したため、遊牧民や牧畜民が周縁の農耕地域に進出していった。東方での鮮卑の南下・拡散や、西方におけるフンの出現とゲルマン人の大移動はその表れであった。このような異文化集団の移動と定着が何波にもわたって起こるなかで、後漢や魏・晋の統一は崩れていき、ローマ帝国も混乱を深めて西ローマ帝国の滅亡に至る。

一方、遊牧民・牧畜民の移動と拡散は、古代帝国が栄えた地域に、牧畜やオアシス農法の伝播、世界宗教や学術・知識の拡散といった新しい刺激をもたらした。ユーラシアの「陸の道」は衰えたわけではなく、むしろその担い手であった遊牧勢力が各地に進出したことで、農耕地域もより深く交通ネットワークと結びついた。

「3世紀の危機」をきっかけとする政治・経済・社会にわたる変動は、数世紀をかけて、各地域の文明の再編と交流の緊密化を促すことになった。

●「海の道」と周辺部の国家形成

「海の道」は3世紀以降、ますます活況に向かった。3世紀から続いた中国の分裂の下で、江南に成立し

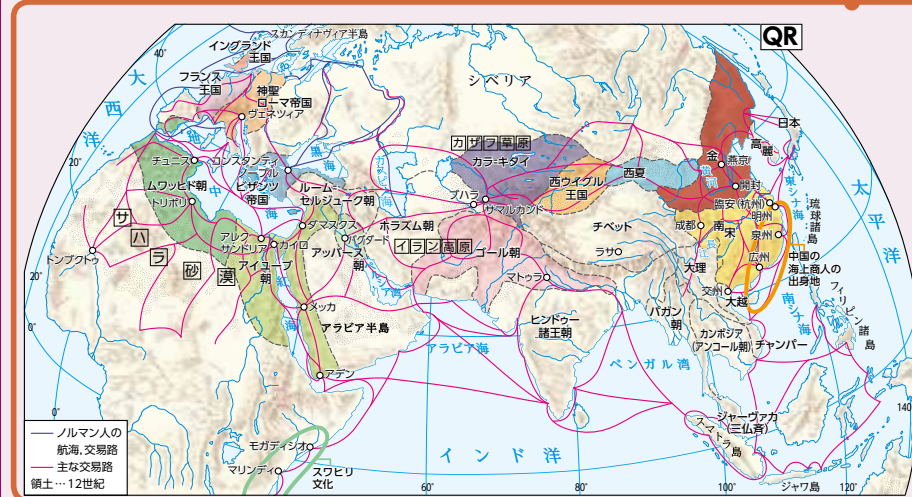
た諸王朝は、人口や国力で勝る北方の王朝に対抗するため、海上交易や南方への勢力拡大を推進した。南アジアでも同様に、インド南部での社会の発展と国家形成が進んだ。こうしたなか、日本列島を含む周辺地域の国家形成も進み、5世紀になると、倭の五王や東南アジア諸国が、さかんに南朝へ朝貢した。東南アジアから朝貢したのは、同時期に拡大していたインド洋での貿易・交流を通じて、インドの文明を取り入れて形成された諸国家であった。

●世界宗教の広がり

言語も生業も異なる人々が恒常的に接触することになったこの時代は、出身や習俗にかかわらず奉じることのできる信仰や規範が求められ、普遍性をもつ世界宗教がネットワークに沿って各地に広がった。中国・東南アジア・インドの間では、「海の道」を通じて仏僧やバラモンが往来するなど、インド洋の宗教ネットワークも広がった。仏教は魏晉南北朝時代の中国で受容され、とりわけ華北の遊牧系政権において、人々を統合し王権を正統化する役割を担った。西方では、キリスト教とマニ教が競い合いながらローマ帝国や西アジアに広まった。マニ教は、イスラームに取って代わられるまで、仏教・キリスト教と並ぶ世界宗教として各地で強い影響を与えた。

◀p.34 p.99▶

↓教科書 p.128



結びつく世界 10～12世紀 「海の道」の活性化

●イスラーム=ネットワークと中国商人の海上進出

イスラーム世界では10世紀になると、カイロがネットワークの中心となり、インド洋や南シナ海でのムスリム商人の活動もますます活発化した。

同じ10世紀前後から、中国商人が、羅針盤やジャンク船などの新技術も用いながら、南シナ海をはじめとする諸地域への進出を開始した。中国経済の中心が黄河中流域から長江下流域(江南)に移動したことや、宋代以降の全国的な経済成長も、この動きを後押しした。また、宋から元にかけての時代には、外国からの朝貢や商人の来航も続き、江南や福建・広東などで多数の港市が繁栄した。中国船は12世紀には、インド洋まで進出した。

●辺境の貿易ブーム

10世紀前後の数百年間は、交易拡大の影響がユーラシアの辺境部に及んだ時代だった。10～13世紀に北半球で温暖な気候が続き、各地の農業生産力が上昇したことも、交易の拡大を助けていた。例えばユーラシアの東方では、琉球諸島や北海道周辺を含む日本列島、朝鮮半島や中国東北から極東ロシア、東南アジアなどの地域でも、手工業品を含む商品の生産・輸出、各地の商人の活動、さらに琉球のような交易を基盤とした国家・文化の形成が進んだ。

→2 ジャンク船 折りたたみ式の操作しやすい帆や船底をしきる隔壁で一部が浸水しても沈みにくく構造をもつ。



また、北海道を中心とする地域での、日本の本州や大陸との貿易の活発化は、アイヌ文化の形成につながった。ほかの地域でも、ヨーロッパ北方のノルマン人(ヴァイキング)の活躍、アフリカ東海岸でのスワヒリ文化の誕生など、同種の動きがみられた。

●ネットワークの連鎖

こうしてユーラシアやアフリカの広い範囲で、古くからの幹線ルートだけでなく、周辺の海域や陸上にもネットワークが張りめぐらされた。インド商人が、綿布と交換に東南アジアから持ち帰った香辛料を、エジプトから来た商人に売り渡し、後者がこれをイタリア商人に転売してドイツ産の銀を受けるといったリレー式の貿易も発達し、12～13世紀までに各地域のネットワークが緩やかにつながった。

貿易を担う各集団の間では、対立と協力の両方がみられ、混血や複数の言語・文化をもつ人々もよく現れた。日本列島の商人の中国渡航、十字軍を含むヨーロッパのイスラーム世界との交流など、周辺から中心を目指す動きも活発化した。◀p.99 p.134▶

時代の 10世紀前後から、中国商人の海上進出、ユーラシア・アフリカの辺境部での交易拡大などが起こり、12～13世紀にはそれらの全域をつなぐ緩やかな結びつきが成立した。

128

ページ上部に大きな世界地図を掲載。当時の地域間の結びつきを地図から具体的に確認できる。

「結びつく世界」の全体構成
(「結びつく世界」の掲載ページは、本冊子 p.17 の一覧をご覧ください。)

1世紀～15世紀

陸海の交易ネットワークによって地域間の結びつきが緊密化していった過程や、地域を超える人や物の移動が世界の諸地域の歴史に与えた影響を「ネットワーク論」を軸に構成。



16世紀～18世紀

地球をめぐる交易ネットワークが成立して「世界の一体化」が始まるなか、工業生産が集中する地域と原材料・食料を生産する地域との分化が進み、垂直的な分業が生じたことを記述。



19世紀～現代

垂直的な分業が世界規模に拡大し、中核-周辺の構造化が進んだことを「世界システム論」を軸に構成。19世紀はイギリス、20世紀はアメリカの覇権の時代として描き、現代は従来の「世界システム」に見られなかった現象が生じている時代として捉えている。

「3世紀の危機」の結果、諸地域の再編と交流が促され、世界史は大きな変動期を迎えたことが理解できる。

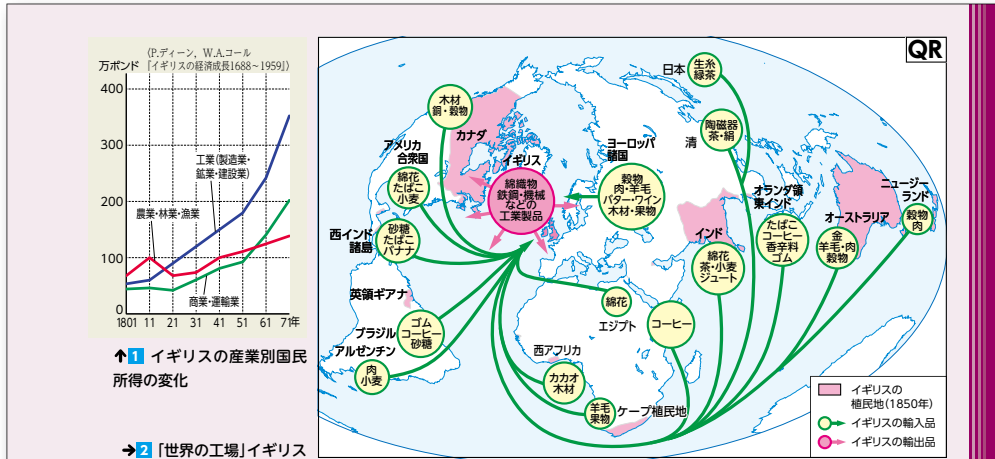
前後の「結びつく世界」のページにリンクできる。

10世紀前後にユーラシアの辺境部まで交易が拡大し、陸海のネットワークが地域間をさらに緊密に結びつけたことがわかる。

●世界システム論をベースに展開。世界のつながりを構造化して理解できる近現代史

- 19世紀以降は、世界システム論をベースに世界全体を記述。
- 複雑な近現代史を、「中核-周辺」の構造で理解できる。

↓教科書 p.211



19世紀 イギリスの覇権と世界システム

●覇権国家イギリス

国際関係において、ほかの大国を圧倒する国力を有し、国際関係全体のあり方を決める影響力をもつ国家を覇権国家とよぶ。

イギリスは、植民地と世界商業において優位をめぐるフランスとの抗争に勝ち、19世紀の世界における覇権国家となった。産業革命をいち早く成し遂げたイギリスは、「世界の工場」となって、圧倒的な生産力を擁し、製品の輸出市場や原材料の供給地を世界中に求め、広大な植民地帝国を確立した。政治的には支配されなかったラテンアメリカなどの地域も、経済的にはイギリス向けの工業用原材料や穀物の輸出に依存するほかなくなった。

1851年にロンドンで開かれた第1回万国博覧会は、イギリスの覇権を人々の目に誇示するものであった。工業化の進展と交通の拡大によって、石炭など日用工業製品の流通は国際的に拡大し、茶など植民地の物産も庶民の生活にまで普及した。

●イギリスの覇権と世界システム

イギリスの覇権は「イギリスの平和(パクス=ブリタニカ)」ともよばれるようにヨーロッパにおける大国間関係にある程度安定させる効果をもった。一方でイギリスは、アジアやアフリカでほかのヨーロッパ列強と権益を争ってその勢力圏を確保しようとした。その結果、これまで自立的な交易を行っていた

東アジアや東南アジアの諸地域でも、伝統的な手工業の多くが衰え、原材料や食料など、世界市場に輸出するための一次産品を生産する経済・社会につくり変えられていった。

少数の一次産品の生産に特化した産業の構造はモノカルチャー経済とよばれる。一次産品の大量生産には大量の労働力が必要になり、劣悪な労働環境のプランテーションが広がった。イギリスの覇権の下で世界経済は垂直的な分業の結びつきを強めた(世界システム)。モノカルチャー経済による低開発は、20世紀に植民地が独立したのちも、先進国の経済に従属させられたまま経済発展が進まず、先進国と開発途上国の格差が拡大する南北問題の遠因となった。

一方、人の移動は、イギリスの植民地帝国による奴隷制の廃止(1833年)や、北京条約(1860年)などを通じた清朝の海禁の最終的廃止などを契機として変化した。それまでアジア各地へ向かっていったインド人(印僑)や中国人(華僑)が、ハワイや奴隷解放後のカリブ海地域、さらには金鉱の発見されたアメリカ西部やオーストラリアへ向かうようになった。

また植民地化の圧力は、アジアの伝統国家に自己改革を促す契機ともなった。オスマン帝国のタンジマートや清朝における戊戌の変法、日本の明治維新などがその例に挙げられる。

時代の特徴 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

211

↓教科書 p.212

歴史の見方 世界システム論でみる世界史

世界史において、地域を横断する遠距離の交通や交易は、古代にさかのぼって常にみられる。しかし19世紀になると、工業化に先んじたヨーロッパ諸国と、アフリカやアジアなどその他の地域との間で、垂直的な分業関係が地球規模で形成された。ヨーロッパ諸国は、アフリカやアジア・ラテンアメリカの諸地域を安価な原料や食料の供給地とし、他方で製品の市場・資本の投資先として自国経済に組み込むことで発展を遂げた。他方、組み込まれた地域は、輸出用の一次産品の生産に特化させられ(低開発)、従属的な立場になった。

世界システム論によれば、原料や食料を生産する地域と、工業製品を生産する地域との間の垂直的な分業関係に基づく世界経済を、一つの「世界システム」とみる。そして工業化に先んじた地域を「中核」、原料や食料生産に特化させられた地域を「周辺」とよぶ。

世界システムの資本主義的な構造においては、「中核」がより広く深く「周辺」を世界経済に組み込んでいくほど、格差が深まる。「中核」で工業化が進み、軽工業から重工業へ、さらに化学工業や電子産業へとより新しく、利潤率が高い産業へ移行

すると、相対的に古い産業が「周辺」に移転し、それにより工業化が進むことで、「中核」的な経済に近づく国も現れる(半周辺)。19世紀末から20世紀にかけての日本やロシア、20世紀末の東アジア諸国の経済発展はそのような例とみることができる。

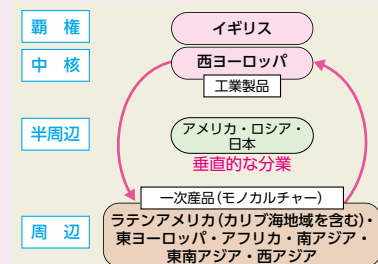
世界システムの「中核」のなかでも、生産・商業・金融の全てにおいて他国を圧倒する力をもつ国を「覇権国家」とよぶ。覇権国家は高い競争力を有し、自由貿易が自国の利益となるため自由貿易を主張し、貿易以外の分野でも自由主義を唱えるようになる。しかし覇権国家が独占的に保有していた技術や機会、自由貿易を通じてしだいに他国にも開かれるため、その優位は時間の経過とともに失われ、「覇権」は衰退する。覇権の衰退期において最も長く維持されるのは金融上の優位であり、ロンドンのシティのように覇権国家の金融センターとしての役割が、長期的に持続する傾向がある。

「結びつく世界」のページでは、世界の同時代的な見方を交易ネットワークや垂直的な分業体制の構造に着目して紹介してきた。19世紀以降は、この世界システム論の視点で世界史をみていく。

●世界システムの動き

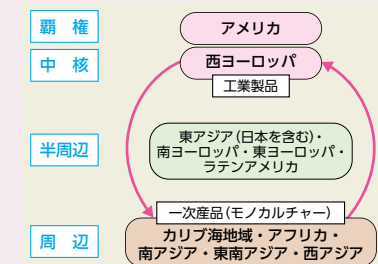
19世紀

19世紀の覇権国家はイギリスである。帝国主義を通じて「中核」・「周辺」関係はアジア・アフリカに大きく拡大した。「半周辺」国家としてのアメリカ・ロシア・日本が急速に上昇を遂げた。



20世紀

20世紀の覇権国家はアメリカである。「中核」・「周辺」関係はさらに地球規模に広がった。東・南ヨーロッパ、ラテンアメリカ、東アジアなど半周辺的な立場におかれた国家は少なくないが、最も力強い上昇を遂げたのは東アジアの「半周辺」国家である。



212

世界システム論による歴史の見方を、丁寧に解説するコラムを設置。「中核」「周辺」「覇権国家」といった概念用語の説明と、構造図により、この歴史の見方をわかりやすく理解できる。

●「結びつく世界」一覧(全12箇所)

ページ	テーマ (タイトル)
34	1~2 世紀 諸地域を結ぶ「陸の道」と「海の道」
84	3~5 世紀 NEW!! ユーラシアの再編と交易ネットワーク
99	8~9 世紀 NEW!! イスラーム = ネットワークの形成
128	10~12 世紀 NEW!! 「海の道」の活性化
134	13~14 世紀 ユーラシア大交流圏の成立と危機
155	16 世紀 「世界の一体化」の始まり
190	17~18 世紀 「17世紀の危機」とその後の諸地域の発展
211	19 世紀 イギリスの覇権と世界システム
257	19 世紀後半~20 世紀初頭 世界大戦前夜の世界システム
304	20 世紀前半 二つの世界大戦と資本主義の変容
338	20 世紀後半 アメリカの覇権とその変容
349	現代 世界システムの変容とグローバル化の行方

19世紀には、イギリスの覇権の下で垂直的な分業体制が世界規模で構造化された(世界システム)ことがわかる。

●資料読解を通じて思考力・判断力・表現力を養う特設「探究TRY」

- 複数の資料を読解しながら、自分の考えを説明したり、議論したりする探究活動のためのページ。
- 多面的・多角的な視点で歴史事象を考察できる。

↓教科書 p.302-303

探究 TRY 「普通の人々」とナチズム —ナチ党の大衆運動と異分子の排除—

ナチズムの政権掌握とユダヤ人迫害はなぜ生じたのだろうか。資料を読み解いて考えてみよう。

Question なぜ、人々はナチズムを支持したのか

資料1 ナチ党の動きと得票率・支持層の変化、当時の人々の反応

ナチ党の動き	選挙での得票率
1920.2 ヒトラー、ナチ党を改編	0%
23.11 ミュンヘン一揆	2.0%
26 ヒトラーユーゲントの設立	47.7%
32.7 総選挙でナチ党第1党に	6.5%
33.1 ヒトラー首相就任	12.6%
2 国会議事堂放火事件 →共産党の非合法化	43.6%
3 初の強制収容所設置 全権委任法成立	2.6%
7 ナチ党による一党独裁の開始	10.6%
10 国際連盟脱退を通告	49.8%
33 歓喜力行団の活動開始	18.3%
34.8 ヒトラー、総統となる	42.8%
36.8 ベルリンオリンピック	13.1%
38.3 オーストリア併合	37.3%
8 ヒトラーユーゲントの来日	37.9%
9 ミュンヘン会議	14.3%
11 「水晶の夜」	33.1%
39.6 反たばこ政策本格化	36.9%
8 障がい者に対する安楽死作戦の開始	33.3%
9 ポーランド侵攻 →第二次世界大戦	43.9%

→3 ナチ党の収容所で参加者に握手をするヒトラー (1937年)

資料2 なぜ、人々はユダヤ人迫害を止めなかったのか

資料2 ナチ党によるユダヤ人迫害の実態

● 主な強制収容所
○ 絶滅政策・大量虐殺の行われた収容所
● 虐殺されたユダヤ人の推定数 (1939-45年)
■ 1939年の枢軸国
■ 1942年までの枢軸国の勢力圏

オランダ 10.6万人、ベルギー 2.4万人、ドイツ 16万人、フランス 8.3万人、イタリア 0.8万人、ポーランド 30万人、ソ連 100万人、エストニア 0.1万人、ラトヴィア 8万人、リトアニア 13.5万人、オーストリア 6.5万人、ハンガリー 26万人、ユーゴスラヴィア 6万人、ルーマニア 46.9万人

資料3 ナチ党による宣言

彼ら(ユダヤ人)は国家を形成する力もなく、文化創造力、労働意欲もなく、努力なくして利益をむさぼり、いたるところで利益を吸い上げ、国際的な結びつきにより、国家経済の支配をもくろみ、国家を破壊しようとしている。そのためには手段を選ばない。
(ヒトラーとナチス第三帝国)

資料4 枢軸国の勢力圏と収容所の分布

ナチ党は反ユダヤキャンペーンを、新聞やポスターなどのほか、大衆運動を通じて展開した。

資料5 収容所での体験談

出迎えるとは、人々の手荷物を、そのなかに入っているというか、隠されている値打ち品、つまり当時貴重になっていた日用品や、こっそり持ちこまれた宝石のたぐいもろとも取りあげることだった。戦争末期の当時、ヨーロッパでアウシュヴィッツほど金銀、プラチナ、ダイヤモンドがごっそり集積していたところはなかった。
(フランクル著 池田香代子訳「夜と霧」)

資料6 ユダヤ人迫害に対する人々の反応

ユダヤ人迫害に対する人々の反応

…シナゴーク放火事件とその後の事件からあとは、人びとに事態を知らせようとするのをあきらめました。…理解してもらえない余り、理解させる能力がないし、事態がこのまま進行して、はじめて犠牲者が、つぎに体制の建設者が、そして、残った私たちが破壊するにちがいないことがわかっていったからです。
(マイヤー著 田中浩 金井和子訳「彼らは自由だと思っていた」)

ナチスが彼らにどんなことをしたのか、わたしたちみんなは知りませんでした。時とともに忘れてゆってしまいました。…彼らが強制収容所に送られて、ガスで殺され、大量にうめられた、ということはあとになって知りました。…そんなことがおおよそ可能だったということを確認したくないので、頭の外に追いやっているのだと、わたしは思います。
*戦争の終結より前 (山本秀行「ナチズムの記憶」)

最後の学年のころには、ユダヤ人を目のかたきにする教師が担任になった。彼は、聖書の時間にユダヤ人問題をとりあげて、午前中いっぱいこの問題について、ユダヤ人をののしった。(山本秀行「ナチズムの記憶」)

彼ら(ユダヤ人)は、もう20年もわれわれのところや叔父さんの農場に出入りしていた。ところが、…「農場主で退役軍人のX(叔父)は、民族の裏切り者で、ユダヤ人の奴隷である」と書かれたプレートが(村の掲示板)に立てかけてあった。(山本秀行「ナチズムの記憶」)

STEP1 読解

1) 図1と2から、ナチ党はいつ、どのような層に支持を拡大していったと言えるだろうか。
2) 史料Aで、人々はナチズムの魅力はどのようなものだと書いているだろうか。
3) ナチズムが人々に支持を広げた理由として最も大きいと考える資料や人々の証言はどれだとあなたは考えるだろうか。また、なぜそのように考えたのか、根拠も説明しよう。

STEP2 説明

ナチズムが支持を広げた背景を、次の用語を使用して説明しよう。

ヴェルサイユ体制 中間層 大衆運動 社会主義勢力 労働者 人種主義

STEP3 議論

STEP2でまとめた内容について、グループで発表し合い、議論してみよう。議論を経て、自分の意見が変わった場合は、STEP2でまとめた内容を変更しよう。

「探究TRY」の三段階の問い

- STEP1 読解**
複数の資料の読解を通じて、自分の考えをまとめる。
- STEP2 説明**
STEP1をうけて、自分の考えを説明する。
- STEP3 議論**
STEP2の内容をグループで発表し合い、議論をもとに自分の考えを再検討する。

●「探究TRY」一覧(全6箇所)

ページ	テーマ(タイトル)
46-47	ユーラシア東部の国際関係 —「中華」の王朝とその周辺
82-83	古代ローマと世界帝国 —古代ローマの国家体制
156-157	銀にみる世界の一体化 —16世紀の世界の結びつき
209-210	工業化による世界の変化 —労働・環境・国際分業体制
266-267	国民と国民国家の誕生 —国民統合と国家形成
302-303	「普通の人々」とナチズム —ナチ党の大衆運動と異分子の排除

異なる立場からの史料を読み解くことで、歴史にはさまざまな解釈が成り立ち得ることがわかる。

自分の考えを説明したり、議論したりする探究活動を通じて、より深い考察ができる。

1部2章にあたるp.10-11では「家族の形態の変化と歴史」を、p.12-13では「感染症への対応の歴史」をテーマに探究的な学習ができます。

18

19

● 各種資料から、資料読解の技能を養う

「読み解き」の問い

- B5判型を活かし、本文の周囲にさまざまな資料を掲載。
- 多数の資料に「読み解き」の問いを設置。
- 資料を見る視点など、資料読解の技能が身につく。

教科書 p.35

文章史料

地図

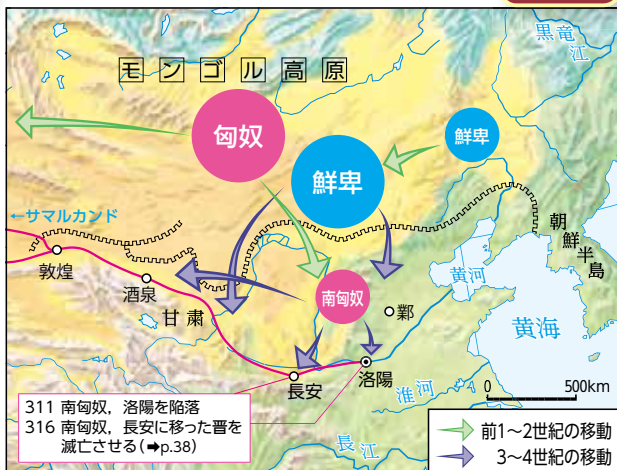
史料 中国にいたソグド人が
サマルカンドに出した手紙(313年)

(この手紙は)ヴァルザック様へ、…私ナナイ=ヴァンダクから送られました。

…最後の天子は、飢饉のために洛陽から逃亡し、宮殿と城には火が放たれて焼け落ちました。洛陽も鄴ももうだめです。その上、匈奴¹たち……長安……まで、そして鄴までを、昨日まで天子の家来であったこの匈奴たちが……。…私たちには、残った中国人が長安から、中国から、匈奴を追い払うことができたのか、あるいは残りの国々を取り返したのか分かりません。…

私は敦煌に向け…32個の麝香²を送りました、…(サマルカンドに)届けられましたら、それを5等分し、その5分の3は私の息子が取り、5分の1はパーサクが、そしてもう5分の1はあなた様が(おとり下さい)。

* 1 匈奴はこの手紙ではKhun(フン)とよばれている
* 2 香料・薬材の原料
(…は中略部、……は破損で読めない箇所) (吉田豊 荒川正晴訳 一部改変)



↑1 遊牧民の南下の動き

読み解き この手紙は、中国でどのような出来事があったと伝えられているだろうか。また、手紙を書いたソグド人はどのような仕事に従事しているだろうか。

史料と地図から、五胡十六国時代の始まりの具体的な様相が読み取れる。また、史料に出てくるソグド人は商業に従事していたことが読み取れる。

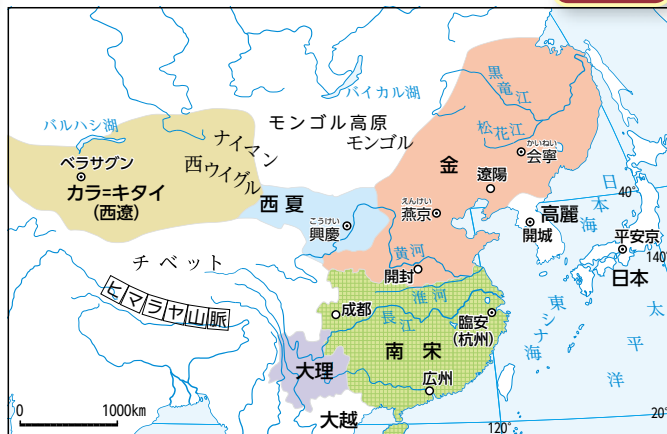
教科書 p.123

地図

地図



↑4 キタイ帝国と北宋



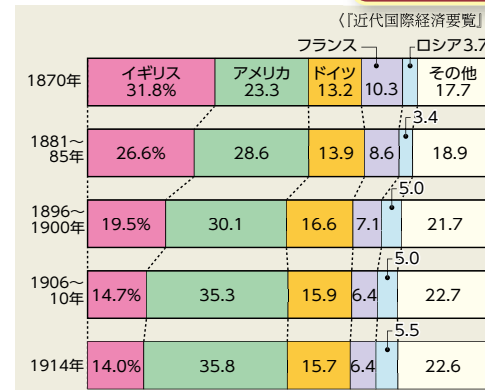
↑5 12世紀のユーラシア東方の多国家体制 遊牧国家のキタイ帝国はモンゴル高原にも進出し、女真人の金は高原の遊牧勢力を間接支配した。西夏は東西貿易を押さえて繁栄した。

読み解き 図4と図5を比較し、キタイ(カラ=キタイ)と金の支配地域で異なる点を二つ挙げよう。

地図を比較することで、金はキタイ帝国とは違いモンゴル高原を支配していないことや、12世紀はユーラシア東方の多極化が進んでいたことが読み取れる。

教科書 p.247

グラフ



↑4 工業生産の国別割合の変化 **読み解き** アメリカとドイツがイギリスの工業生産を追い抜いたのは、それぞれどの時期だろうか。

第1次産業革命において「世界の工場」であったイギリスが、第2次産業革命の進行につれてアメリカとドイツに追い抜かれていくことが読み取れる。

教科書 p.270

新聞

ポスター

ポスター

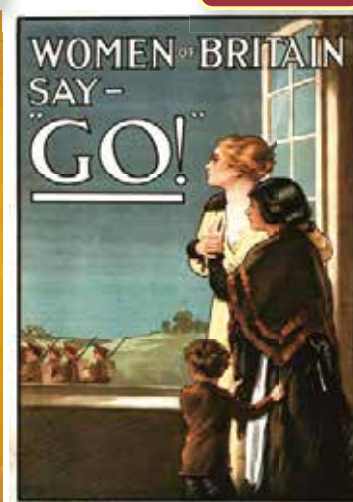


↑1 フランスの絵入り新聞 (1914年10月4日) ドイツ軍の砲撃で炎上するランス大聖堂(→p.89)が描かれている。ヨーロッパではヴァンダル人(→p.86)が野蛮な破壊者とされてきた。

読み解き 図1と2は、それぞれどのような効果を生むことをねらいとしているだろうか。



↑2 第一次世界大戦中に作成されたポスター(左ドイツ、右イギリス)

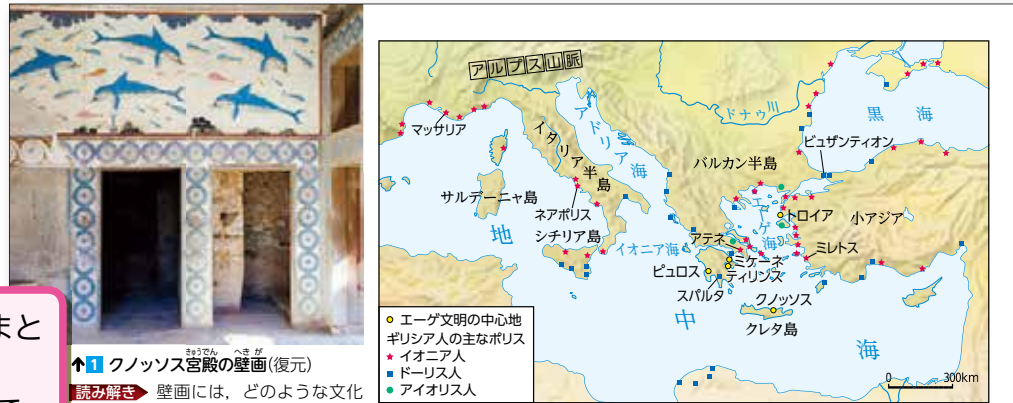


総力戦となった第一次世界大戦では、兵士を大量に動員する必要があったため、国家は新聞やポスターで国民の愛国心に訴えていたことがわかる。

●歴史の流れがつかみやすい 要約文・本文・側注の三段構成

●因果関係がわかりやすい本文と、地図や写真などの図版・資料に加え、 要約文と側注を設置。

↓教科書 p.64-65



本文の要点をまとめた要約文
→本冊子p.24で解説

↑1 クノッス宮殿の壁画(復元)
読み解き 壁画には、どのような文化的特徴が表れているだろうか。

↑2 ギリシア人のポリス

2節

地中海周辺の国家形成

節の課題 古代ギリシアの社会、国家、文化・思想にはどのような特徴があるだろうか。

1 エーゲ文明の発見 ドイツのシュリーマン(1822~90年)は、ホメロスの英雄叙事詩(→p.69)に描かれたトロイア戦争を史実と信じてトロイアやミケーネの遺跡を発掘し、エーゲ文明の存在を証明した。一方クレタ文明の中心地クノッス宮殿を発掘したのはイギリスのエヴァンズ(1851~1941年)である。クレタで発見された絵文字と線文字Aは未解読だが、線文字Bはイギリスのヴェントリス(1922~56年)によって解読され、古いギリシア語を記したものであることが明らかにされた。

エーゲ文明 エーゲ海の島々やギリシア本土南部では、オリエントの影響を受けて、小規模ではあったが独自の青銅器文明が発達した。このいくつかの文明は、総称してエーゲ文明とよばれる。

クレタ島では、前2000年ごろからクノッスを中心に複雑な構造をもつ宮殿が建設された。このクレタ文明は、城壁がない宮殿や鮮やかな彩色壁画から、平和で海洋的な性格であったと考えられている。一方ギリシア本土では、前1600年ごろインド=ヨーロッパ系のギリシア人が、ミケーネ・ティルス・ピュロスなどに堅固な城塞を王宮とする小規模な専制国家を成立させた。これがミケーネ文明である。彼らは前1400年ごろにクレタ島に進出し、後には小アジアのトロイア(トロヤ)にも遠征した。

エーゲ文明は前12世紀ごろ滅亡した。一説には「海の民」の侵入によるともいわれる。その後ギリシアは約400年間にわたって文字史料がない暗黒時代に突入したが、戦乱のなかで鉄器が広く用いられていった。

ポリスの形成

長く続いた混乱のなかでギリシア人は、市民が政治を担うポリスという新しいかたちの都市国家を生み出していった。

前8世紀ごろになると、人々はアクロポリスとよばれる丘に神殿を建て、そこを拠点に集住するようになった。丘のふもとには集会の場としての広場(アゴラ)が設けられた。こうした都市国家(ポリス)は各地に生まれた。このころには海上交易が活発化し、アルファベットが用いられるようになった。人口が増加するとギリシア人は耕地を求めて植民活動を行い、地中海・黒海沿岸に多数の植民市を建設した。ポリスは互いに

因果関係や社会構造、歴史事象の流れを丁寧に記した本文
→本冊子p.6-9で解説

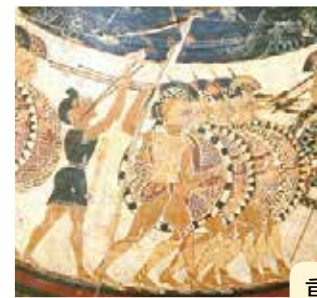
本文の詳細や補足を記した側注
→本冊子p.25で解説



抗争を繰り返したが、同じギリシア人であるという共通の民族意識を失うことはなかった。西アジアや中国では都市国家から世界帝国へと国家が発達していったが、ギリシアでは都市国家の形態を維持しつつ国家が発展した。

↑3 アテネのアクロポリス アクロポリスには守護神をまつる神殿があった。

ポリスには初め、王がおかれていることが多かったが、後に貴族による支配が強まった。しかし戦争において重装歩兵の密集隊戦術が優勢になってくると、同等の資格で戦場に立ち、同じ責任を負うことから、政治参加を求める平民の声が強まり、参政権を有する市民が登場した。市民は成年男子に限られ、貴族・平民の違いはあったが土地を所有し、かつ自費で武具を用意する戦士であった。女性、ほかのポリスの出身者、奴隷は政治から排除され、特に奴隷は本人の意思を無視して市場で売買された。奴隷は主に戦争捕虜や債務によって自由を失った者で、家事・農業・鉱山などで労働を強制された。



↑4 重装歩兵の兵士

15 **スパルタとアテネ(アテナイ)**
二つの典型的なポリスのうち、スパルタは閉鎖的で強固な軍事体制を成立させ、商工業の発達したアテネは試行錯誤の末、民主政を成立させていった。

ギリシアで最も典型的なポリスはスパルタとアテネであった。ドーリス人のスパルタでは、征服した先住民をヘイロータイ(隷属農民)とし、またペリオイコイ(周辺民)を支配した。市民の10倍以上の人口のヘイロータイを抱えたスパルタは、反乱に備え強力な軍勢力を維持する必要がある。そのため市民は一切の生産労働をせずに、少年期から集団生活をして厳格な軍事訓練を行った。また市民間の平等を維持するため、土地の売買を禁じ、他のポリスと交易を行わなかった。

イオニア人のアテネでは、商工業の発展に伴って富の差が拡大し、裕福な貴族が政治を独占する貴族政となった。貴族政の下では、債務を負って財産を手放し、奴隷に転落する平民が後を絶たなかった。平民の没落は軍勢力の低下を意味したため、前594年にソロンは、債務の帳消しを行い、債務によって奴隷とされることを禁止して平民を保護した。さらに血統でなく財産額によって市民の政治的権利・義務に差をつけた

Key Word 市民(ギリシア・ローマ)

ギリシアやローマ(→p.72)などの古代都市国家では、戦闘に参加する戦士だけが、民会(→p.67)に参加し国政に関わる資格をもつ「市民」と考えられていた。中世になると「農民」に対し、城壁で囲まれた都市に住む人という意味で、「市民」は主に商人や手工業者を指した。ただし、そのなかで市政を担ったのは少数の富裕な大商人や親方に限られた(→p.112)。

5 スパルタの被支配民

ヘイロータイは家族をもち集落をたぐって生活したが、厳しい監視の下でスパルタ市民の農地を耕作し、徹底した収奪を受けた。またペリオイコイは商工業に関わり、従軍と貢納の義務を負い、また参政権は与えられなかった。

問い アテネとスパルタの共通点と相違点を要約しよう。

重要な概念用語については、「Key Word」でさらに深める。

地域インデックスで、学習地域が一目でわかる。

●学習場面に応じてさまざまな活用ができる 要約文と側注

要約文

- 小見出しごとに、本文の要点を2行程度で端的にまとめた要約文を設置。

側注

- 本文に出てくる用語やさらに詳細な事項について、側注で解説。

例) 教科書2部3章5節「イスラームの誕生」の要約文

教科書

p.93	西アジアの風土とイスラームの成立 イスラームは乾燥地帯の西アジアで宗教として確立するとともに、オリエントと地中海の諸文明を吸収して新しい文明を生み出し、東西に広がった。
p.94	預言者ムハンマド メッカに生まれたムハンマドは、神の啓示を受けて預言者と名乗り、イスラームの教えを確立した。
p.95	イスラームとイスラーム社会 ムスリムたちは『クルアーン』の教えとそれに立脚したシャリーアに従って生き、社会を営む。
p.95	急速に拡大するイスラームの共同体 アラブ人のムスリムの征服活動によって、広大なイスラーム世界が形成された。しかし、初期の統治は、アラブ人による異民族支配であった。
p.97	シーア派とスンナ派 イスラーム共同体の指導者をめぐる意見の相違から、二つの宗派が成立した。
p.97	イスラーム帝国としてのアッバース朝 アラブ人の異民族支配体制が崩れ、新たな王朝では、諸民族が対等なムスリムとして、社会的役割を担う体制が作り出された。

要約文をつなげて読めば、西アジアの風土、イスラームの誕生から拡大まで教科書の6ページ分の内容を端的につかめる。

要約文の活用法 (例)

- ・ 予習で大まかな流れを把握する。
- ・ 授業で前時の内容をおさらいする。
- ・ 受験前に通史をおさらいする。
- ・ 論述の文例として活用する。

例) 教科書 p.162-163 の側注

- ① **グルジア・アルメニア系の軍人・宮廷官僚** 王の近衛軍団として用いられたが、やがて自分の出身地との強いきずなをつくりあげ、文官としても、独自の宮廷勢力を築きあげるようになった。
- ② **ラージプート** 7, 8世紀に現れた北インドの王侯・戦士

本文で学習するサファヴィー朝やムガル帝国に関して、より詳細な知識をおさえられる。

↓教科書 p.162-163

- ③ **シク教** ヒンドゥー教とイスラームとを批判的に統合した宗教。業・輪廻の思想を基礎にする一方で、偶像崇拜を批判し、カースト制に反対する。パンジャブ地方に勢力を広げた後、教団としてアウラングゼーブに反旗をひるがえしたため迫害されたが、19世紀初頭には独立王国(シク王国)を築いた(→p.231)。現在でもパンジャブ地方では最大宗教である。
- ④ **インドにおけるスーフィズム** 両宗教の詳しい思想体系のちがいを知らない民衆は、修行によって神との合一を目指すスーフィズムの姿を、修行によって解脱しようとするヒンドゥーの修行僧の姿と重ね、彼らを共に尊敬した。このことがまた、スーフィーを通じてヒンドゥー教徒がイスラームへと改宗する背景となった。
- ⑤ **ウルドゥー語** 現在のパキスタンでの国語となっている。

側注の活用法 (例)

- ・ 学習内容をさらに詳しく理解する。
- ・ 受験対策として、細かな知識を補充する。

●章・節ごとの「見通し」・「振り返り」

- 章には「見通し」「振り返り」を、節には「課題」「まとめ」を設置。
- 章の「見通し」(課題)を受けて、各節で「課題」→「まとめ」を積み重ねながら、課題を追究。最後に章の「振り返り」で自分の考えを説明する。
- 自身の考えを説明することで、思考力・判断力・表現力が養われる。

●見開きの「問い」

- 多くの見開きに章の「振り返り」・節の「まとめ」に関連する「問い」を設置。
- 教科書のページが進むほど、難易度の高い「問い」が増えていく。
- 着実な知識の習得とともに、思考力・判断力・表現力の育成にもつながる。

例) 4部5章 世界大戦の時代の見通し・振り返り

4部5章の見通し

なぜ世界は二度の大きな戦争を引き起こしてしまったのだろうか。(教科書 p.268)

1節 第一次世界大戦と社会主義革命

課題：第一次世界大戦はヨーロッパの列強にどのような変化をもたらしただろうか。(教科書 p.268)
 まとめ：第一次世界大戦によってヨーロッパ諸国とそれを取り巻く国際秩序はどのように変化したか、あなたの考えを説明しよう。(教科書 p.276)

2節 第一次世界大戦とアジアのナショナリズムの展開

課題：民族自決の理念はアジア諸国にどのような影響と変化をもたらしただろうか。(教科書 p.277)
 まとめ：民族自決の理念はアジアの国民国家建設にどのように影響を与えたか、各地域の展開を踏まえて、あなたの考えを説明しよう。(教科書 p.285)

3節 大衆社会の到来とファシズムの出現

課題：第一次世界大戦後の世界経済と欧米の政治の動きはどのように変化したのだろうか。(教科書 p.286)
 まとめ：世界恐慌への各国の対応はその後の世界の政治や経済にどのような影響をもたらしたといえるか、あなたの考えを説明しよう。(教科書 p.293)

4節 第二次世界大戦とその惨禍

課題：どのようにして、各国は第二次世界大戦に突入していったのだろうか。(教科書 p.294)
 まとめ：ヨーロッパでの戦争、アジア・太平洋での戦争の原因と結果はそれぞれどのようなものか、あなたの考えを説明しよう。(教科書 p.301)

4部5章の振り返り

なぜ第一次世界大戦の反省を踏まえた平和への取り組みは成功せず、第二次世界大戦が起きてしまったのか、あなたの考えを説明しよう。(教科書 p.301)

↓教科書 p.30-31



「抜き出そう」(難易度：低)
 本文を抜き出して答える、簡単な問い。

問い 中央ユーラシアにおいて強力な遊牧国家が生まれる条件を抜き出そう。

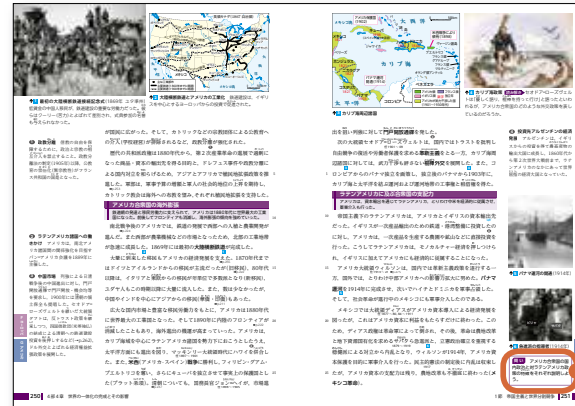
↓教科書 p.102-103



「要約しよう」(難易度：中)
 教科書の内容を自身で要約する問い。

問い カリフとスルタンはどのような関係にあったのか、要約しよう。

↓教科書 p.250-251



「説明しよう」(難易度：高)
 教科書の内容を解釈し、自身の言葉で説明する問い。

問い アメリカ合衆国の国内政治と対ラテンアメリカ政策の特徴をそれぞれ説明しよう。

●本文の内容を深め、多様な視点を養う 各種コラム

視点を交えて(全21箇所)

さまざまな立場に焦点をあて、多面的・多角的に歴史事象を考えるコラム。

視点を交えて 聖地エルサレムをめぐる争い

エルサレムは、ユダヤ教にとっては神殿があった神の町であり、キリスト教にとってはイエスが処刑された聖地である。イスラームでは、ムハンマドの天国訪問の奇跡を象徴する土地とされた。三つの宗教の聖地とされたこの町では、それぞれの信者が共存していたが、しばしば、争奪戦争の対象ともなった。十字軍運動はその代表的なものであり、ヨーロッパ西部のキリスト教徒は、ムスリムの手からこの地を奪うため軍事遠征を繰り返した。



↑1 エルサレムの岩のドーム
イスラームの聖所にウマイヤ朝が建設したもので、ほぼ同じ場所にユダヤ教・キリスト教のそれぞれの聖所が存在する。

教皇ウルバヌス2世の演説(1095年)

これは、神のご意志による緊急の任務で…東方のキリスト教徒たちを援護するため、ただちに出発し、あの下劣な民族を同胞の土地から根絶やしにするようにと。
(阿部寿美代訳)

サラディンの演説(1187年)

エルサレムは91年間も敵の手にあり…この地で神への礼拝を捧げることがまったくできなかつた。…エルサレムを奪回するという手柄を、神は…取っておいてくださったのだ。
(阿部寿美代訳)

↑教科書 p.104

世界史の中の日本(全19箇所)

世界の動きと日本の動きが、どのように関連しているのかをみるコラム。

世界史の中の日本 大元ウルスと日本

日本と大元ウルスの間では、文永・弘安の役のため政府間の関係は開かれなかったが、民間の海上貿易は活発に行われた。戦争時や倭寇(→p.136)の出没時には、両国の政府が沿岸警備の強化や海外交通の統制をしたが、それ以外の時期は海商が盛んに往来して貿易を行った。中心地となったのは寧波(明州)、元代には慶元と博多(→p.127)であり、博多は元軍の攻撃目標となったにもかかわらず、戦後はすぐに繁栄に戻った。戦争や外交を担った幕府や寺社なども、有力者が寺院建設費の捻出の名目で貿易船を派遣し、私的な貿易を行っていた。貿易船には多くの僧が便乗して往来し、禅宗や宋学など新しい学問や文化がもたらされた。喫茶の風習が広まったのも、禅僧を通してである。



↑2 元軍と戦う日本の武士 元軍は、モンゴル・女真・高麗・南宋などさまざまな出身者の混成であった。日本側は元軍の集団戦法や火薬兵器に苦戦したが、元軍も日本側が築いた防壁に上陸をはばまれた。『蒙古襲来絵詞』宮内庁三の丸尚蔵館蔵

↑教科書 p.131

SDGsを考える世界史(全18箇所)

歴史事象から、SDGsの17の目標の視点について考えるコラム。

SDGsを考える世界史 南北問題は正の取り組み

南北格差是正に取り組む国際協力機関が1960年代に二つ作られた。まず、1961年に設立された経済協力開発機構(OECD)は先進工業国を中心に構成され、主要活動の一つを、低金利の融資を開発途上国に提供することとし、日本も64年に加盟した。また、南側諸国の主導により国連貿易開発会議(→p.305)が設置され、その第1回会議(1964年)では、先進工業国による発展途上国への技術援助・資金援助(GNPの1%)や特恵関税制度適用などを求めた。こうした政府レベルの取り組みに加えて、国家間の利害対立を超えて活動する非政府組織(NGO)などの非営利団体(NPO)のなかにも、南北問題は正に取り組むものがある。そうした活動のうち、私たちが日常の買い物を通じて貢献できるものとして、近年注目されるようになったのがフェアトレードである。これは発展途上国の産品を適正価格で継続的に購入することにより、途上国の生産者や労働者の生活改善を目指す取り組みである。



↑2 日本で販売されているフェアトレード認証製品

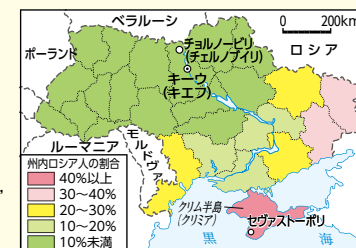
↑教科書 p.329

ケーススタディ 現代の諸課題を考える(全8箇所)

現代世界の諸課題を歴史的経緯から読み解くコラム。

ケーススタディ 現代の諸課題を考える 冷戦後に起こった紛争①～クリム(クリミア)半島を事例に

ソ連解体時に独立したウクライナではクリミア自治共和国が設けられたが、ロシア人とウクライナ人、クリミア=タタール人の間で民族的軋轢が高まり、ロシア人がロシア連邦へのクリム(クリミア)半島編入を求める住民投票を求めた。ウクライナと欧米各国、日本は、この投票は加盟国の領土保全を求める国連憲章に違反するとして、国連総会においても中止を求める決議が採択された。しかし2014年に投票は強行され、賛成票が過半数を得たとして、ロシアはクリム半島を編入した。直後の演説でロシア大統領プーチンは、ウラジーミル1世(→p.121)がこの地で正教に改宗したことなど、歪曲された歴史的記憶をもとに編入を正当化し、編入が国際法違反であることには口をつぐんだ。これによりロシアはG8参加資格停止の制裁(→p.331)を課されたが、さらに2022年、全域に侵攻したため、紛争はクリミアの枠を超えて深刻化した。



13世紀	モンゴルによるクリム半島支配(→p.130)
15世紀	クリム=ハン国建国(→p.226)
1783	クリム=ハン国、ロシアに併合される(→p.183) →セヴァストポリ要塞の建設
1853	クリミア戦争(→p.218)
1917	ロシア革命により混乱(～21) (→p.272)
21	クリミア自治共和国設立(翌年、ソ連邦構成国へ)
54	ソ連、クリミアをウクライナ共和国へ移管
91	ソ連解体 →ロシア人住民、ウクライナ住民、クリミア=タタール人住民間の対立
2014	ロシアによる編入表明

↑2 クリミアの歴史
↑1 ウクライナに住むロシア人の州別割合(2001年)

↑教科書 p.324

本文執筆者紹介



大阪大学名誉教授
桃木 至朗
【東南アジア・海域アジア史】

主な執筆箇所：東南アジア史全般、現代史、各部扉

主著：『市民のための歴史学』大阪大学出版会、2022年
『市民のための世界史』大阪大学出版会、2014年（共編著）



京都大学名誉教授
杉本 淑彦
【近現代フランス史】

主な執筆箇所：近代以降のヨーロッパ史、現代史

主著：『ナポレオン—最後の専制君主、最初の近代政治家』岩波書店、2018年
『教養のフランス近現代史』ミネルヴァ書房、2015年（共編著）



神戸市外国語大学名誉教授
指 昭博
【近世ヨーロッパ史】

主な執筆箇所：中世～近世のヨーロッパ史

主著：『図説イギリスの歴史 [増補新版]』河出書房新社、2015年
『イギリス宗教改革の光と影～メアリとエリザベスの時代～』ミネルヴァ書房、2011年



早稲田大学高等学院教諭
青野 公彦
【中世ヨーロッパ史】

主な執筆箇所：古代～中世のヨーロッパ史

主著：『教会改革とナツィオ（国民）：一四一八年のコンコルダートをめぐって』
（森原隆編著『ヨーロッパ・エリート支配と政治文化』成文堂、2010年所収）



名古屋大学助教
三田 昌彦
【インド古代中世史】

主な執筆箇所：南アジア史全般

主著：『アジア経済史研究入門』名古屋大学出版会、2015年
『世界歴史大系 南アジア史 2』山川出版社、2007年（共著）



九州大学教授
清水 和裕
【初期イスラーム史】

主な執筆箇所：古代～近世のイスラーム関係箇所

主著：『イスラーム史のなかの奴隷』山川出版社、2015年
『軍事奴隷・官僚・民衆：アッパース朝解体期のイラク社会』山川出版社、2005年



東京大学教授
吉澤 誠一郎
【中国近代史】

主な執筆箇所：近代以降の東アジア史

主著：『論点 東洋史学』ミネルヴァ書房、2022年（監修、共著）
『清朝と近代世界—19世紀（シリーズ中国現代史1）』岩波書店、2010年



立命館大学教授
山下 範久
【歴史社会学】

主な執筆箇所：16世紀以降の「結びつく世界」

主著：『教養としてのワインの世界史』筑摩書房、2018年
『世界システム論で読む日本史』講談社、2003年



東京大学教授
杉山 清彦
【大清帝国史】

主な執筆箇所：古代～近世の東アジア史・中央ユーラシア史

主著：『中国と東部ユーラシアの歴史（放送大学教材）』NHK出版、2020年（共編著）
『大清帝国の形成と八旗制』名古屋大学出版会、2015年



立命館大学教授
末近 浩太
【中東・イスラーム地域研究】

主な執筆箇所：近代以降のイスラーム関係箇所

主著：『中東政治入門』筑摩書房、2020年
『イスラーム主義—もう一つの近代を構想する』岩波書店、2018年

本冊子のp.31-67は教科書と同じ大きさの紙面です。試し読みをして、教科書内容の理解を深めていただくことができます。

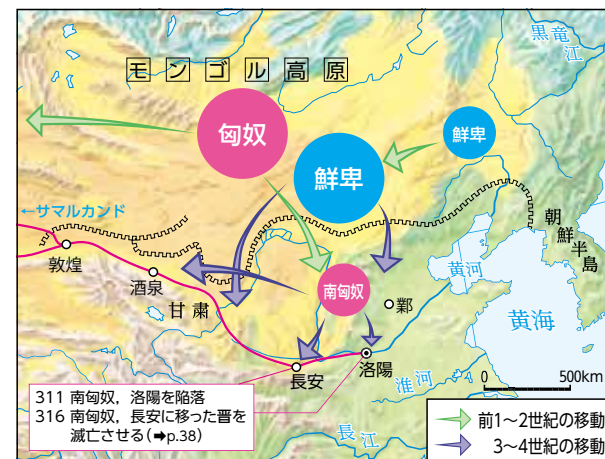
史料 中国にいたソグド人がサマルカンドに出した手紙(313年)

(この手紙は)ヴァルザック様へ、…私ナナイ=ヴァンダクから送られました。

…最後の天子は、飢饉のために洛陽から逃亡し、宮殿と城には火が放たれて焼け落ちました。洛陽も鄴ももうだめです。その上、匈奴*1たち…長安…まで、そして鄴までを、昨日まで天子の家来であったこの匈奴たちが…。…私たちには、残った中国人が長安から、中国から、匈奴を追い払うことができたのか、あるいは残りの国々を取り返したのか分かりません。…

私は敦煌に向け…32個の麝香*2を送りました、…(サマルカンドに)届けられましたら、それを5等分し、その5分の3は私の息子が取り、5分の1はペーサクが、そしてもう5分の1はあなた様が(おとり下さい)。

*1 匈奴はこの手紙ではKhun(フン)とよばれている
*2 香料・薬材の原料
(…は中略部、…は破損で読めない箇所) (吉田豊 荒川正晴訳 一部改変)



↑1 遊牧民の南下の動き

読み解き この手紙は、中国でどのような出来事があったと伝えられているだろうか。また、手紙を書いたソグド人はどのような仕事に従事しているだろうか。

4節 遊牧帝国の興亡と移動

節の課題 3～4世紀のユーラシアの変動で、国家や諸地域はどのように変化していっただろうか。

匈奴の解体と遊牧民の移動・拡散

3世紀以降、気候が寒冷化するなかで遊牧勢力の農耕地帯への進出・移住が活発化した。鮮卑やフンの活動によって、ユーラシアの東西で勢力圏が塗り替わった。

5 前2世紀後半以降、匈奴は漢と共存関係に入ったが、内紛や災害によってしだいに統合を失い、まず東西、次いで南北に分裂した。南匈奴は後漢に臣属して長城以南の華北へ移住し、代わってそれまで匈奴に従っていた遊牧集団の一つである鮮卑が台頭した。鮮卑は君主号としてカガンをを用い、モンゴル高原に進出したが、3世紀にはいくつかの集団

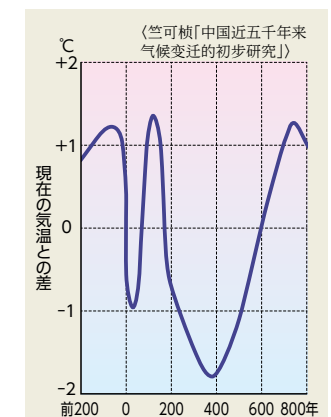
10 に分かれて華北へ南下した。

草原と耕地が入り交じる華北には、漢代以来さまざまな遊牧集団が残り住み、王朝や地元豪族の軍隊となっていた。4世紀初め、後漢滅亡後の動乱を取めた晋(西晋)の内紛をきっかけに、南匈奴が匈奴帝国の再興を図って自立し、鮮卑もこれに続いた。これが遊牧勢力の割拠の時代(五胡十六国時代)の始まりとなり、以後隋・唐に至るまで、華北に遊牧系王朝が次々と建てられることとなった。

3～6世紀は世界的に気候が寒冷化し、ユーラシア各地の農業や牧畜が打撃を受けた時期であった。元来寒冷な草原地帯はとりわけ環境の悪化の影響を受けやすく、各地で遊牧民や牧畜民が周囲の農耕地帯に進出する動きをみせた。匈奴や鮮卑の華北への南下はその一環でもあった。また、中央ユーラシアの遊牧民の動きは東西で連動しており、ユーラシア西方でも、西進した北匈奴の勢力が中心となったフンが4世紀後半に出現し、ゲルマン人の大移動を引き起こすきっかけとなった。

① **カガン(可汗)** 最高君主の称号で、以後、単に代わって中央ユーラシアで広く使われた。後に発音が変化してカーン、ハンというようになった。

② **フン** 匈奴をはじめとするさまざまな集団からなる遊牧勢力で、西方に拡大して4～5世紀にヨーロッパに侵入した。



気候の寒冷化の結果、遊牧民が農耕地帯に進出したが、それはユーラシアの東西で同時進行した現象であったことがわかる。



世界遺産

〈碑文の突厥文字〉



←1 オルホン碑文と突厥文字
突厥文字は史上初めての遊牧民独自の文字で、表音文字である。オルホン川流域に立てられた石碑群に記されている。

史料 ソグド人の風俗と社会

人々は皆目元が深くて鼻が高く、豊かなひげを蓄えている。…その風俗は、ソグド文字を習い、商売熱心で、わずかな商利にもこだわる。男性は二十歳になれば遠くへ出かけていき、中国にもやって来る。利のある所で行かない所はない。

→2 壁画に描かれたソグド人 ソグド人は、東は中国から西はビザンツ帝国まで、国際的な商業活動を展開した。



突厥帝国とウイグル・チベット

7～8世紀、モンゴル高原の突厥・ウイグルと、チベット高原のチベット、それに隋唐帝国がユーラシア東方を三分し、それぞれの下で制度・文化が発展した。

モンゴル高原では、鮮卑が南下すると、代わって柔然が台頭し、鮮卑が華北に建てた北魏と対立した。6世紀半ば、トルコ系の突厥(テュルク)が急速に勢力を拡大し、柔然を倒してモンゴル高原の覇者となった。突厥は東方では華北の北朝を従属させ、西方ではソグディアナを支配下におき、史上初めて中央ユーラシアの東西にまたがる遊牧帝国を築いた。

貿易・外交にはソグド人を活用し、遠くササン朝ペルシア・東ローマ帝国とも外交関係をもった。突厥は6世紀末に東西に分裂し、隋が一時優位に立ったが、隋が混乱に陥ると東突厥は再び力を強め、建国期の唐を臣属させた。しかし、唐の太宗(李世民)の反撃を受けて東突厥は630年に倒れ、唐の間接支配下におかれた。東突厥は7世紀末に帝国を再建したが、744年、同じトルコ系のウイグルに取って代わられた。

ウイグル帝国は、唐の内乱(安史の乱)に介入して、唐を援助する代わりに事実上従属させた。ウイグル帝国もソグド人を用いて、馬を絹に交換させる唐との絹馬貿易で巨利を上げ、モンゴル高原に城郭都市を築いて繁栄した。一方、チベット高原では7世紀前半にソンツェン=ガンポが建てたチベット(吐蕃)が勢力を伸ばし、中央アジアにも進出してウイグル帝国と勢力を競った。8世紀後半以降のユーラシア東方は、ウイグル・チベット・唐の三帝国が並び立つ時代となった。遊牧勢力の活動は西方でも盛んで、アヴァールやトルコ系のブルガールなどが、カガンを称する君主に率いられて南ロシア草原に次々と進出した。

しかし、ウイグル帝国は840年に内乱で倒れ、チベット帝国も同時期に内紛で分裂・衰退した。ウイグル・チベット両帝国が崩壊すると、モンゴル高原・チベット高原は共に長い分裂時代に入った。

遊牧民は、天に対する素朴な信仰をもつ一方、外来の世界宗教も柔軟に受け入れ、東方では仏教とマニ教がこのころに広まった。

遊牧民の移動は、ユーラシアの国家や諸地域にどのような変化をもたらしたのか、あなたの考えを説明しよう。

4節のまとめ

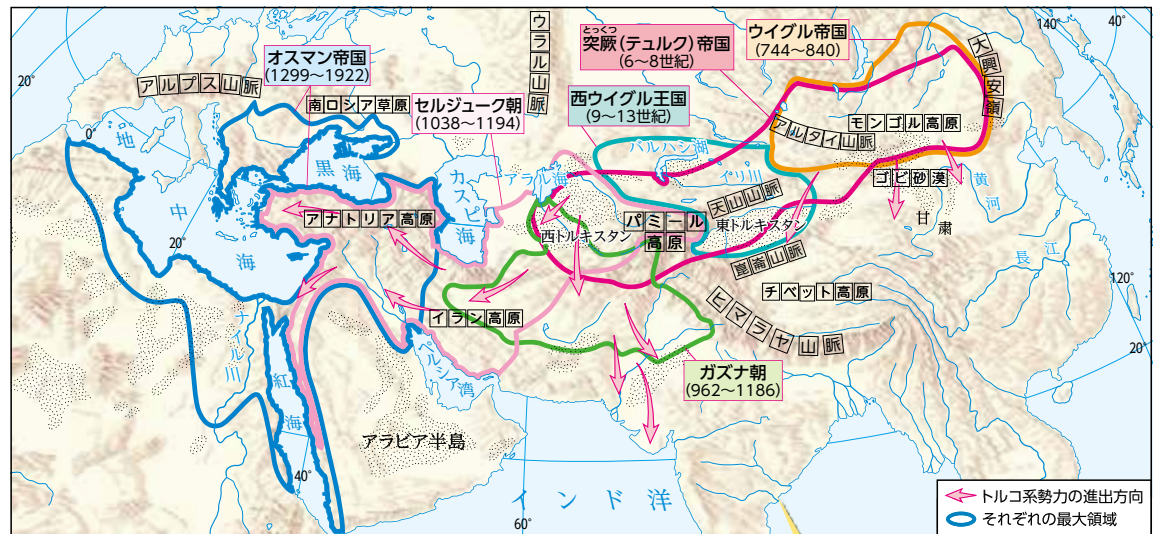
1 突厥 突厥とはトルコを意味する「テュルク」の発音を漢字であてたものである。これ以前の鮮卑・柔然なども発音を写したもののだが、原語はわからない。

柔然→突厥→ウイグル・チベットといった諸勢力の興亡を、北朝・隋唐帝国との関係も視野に入れてわかりやすく解説。

2 マニ教 イランで3世紀生まれた宗教(→p.81)で、キリスト教(→p.78)と競ってユーラシアに広がったが、イスラーム(→p.93)が現れると急速に取って代わられた。

チベットの地理と文化

チベットは中央ユーラシアの要衝の一つで、東方は甘粛・四川などへ、西方はパミール高原へとつながり、さらにヒマラヤ山脈を越えて南のインドと結ばれている。仏教はインドから直接伝わって独自に発展し(チベット仏教)、またチベット文字はインドの文字をもとにした表音文字である。



トルコ人の西方移動とユーラシアの変動

ウイグル帝国の崩壊をきっかけに、9世紀以降トルコ系遊牧民の西方移動が本格化し、中央アジアのトルコ化とトルコ人のイスラーム世界への流入が進行した。

840年にウイグル帝国が崩壊すると、支配下にあったトルコ系の遊牧集団はいくつかに分かれて南方・西方に移動し、10世紀には草原地帯だけでなく甘粛・タリム盆地のオアシス地帯に住み着いた。それまでの遊牧国家はオアシス都市に代官をおいて統治していたが、遊牧民による直接支配の開始は、オアシス住民に大きな影響をもたらした。

中央ユーラシアでは、それまでは主に東部にトルコ・モンゴル系、西部にイラン系の言語を話す人々が広がっており、特にオアシス地帯においてはイラン系が中心であった。しかし、このトルコ人の西方移動以降、中央アジアのオアシス住民はしだいにトルコ語を身につけるようになり、数世紀を経てトルキスタン(ペルシア語で「トルコ人の土地」の意)へと変貌していった。一方、パミール高原以西の西トルキスタンにおいては、7世紀にアラビア半島で誕生したイスラームの勢力が拡大しており、9世紀以降、オアシス住民や西進してきたトルコ系遊牧民のイスラームへの改宗が進行した。改宗したトルコ人は、奴隷軍人や部族集団のかたちで西アジアに流入し、さらにみずから王朝も開いて、西アジア・北アフリカの政治・軍事に大きな影響を与えた。

このように9世紀に始まるトルコ人の西方移動は、数世紀をかけて、西へ向かうトルコ化(住民の言語のトルコ語化)と東へ向かうイスラーム化(住民のイスラーム受容)の波を引き起こし、世界史に大きな影響を与えた。一方、モンゴル高原にウイグルに代わる統一勢力が現れなかったことは、より東方にいたキタイ(契丹)などモンゴル系遊牧民の活動を活性化させることとなった。

↑3 トルコ系王朝の西方展開 大規模な民族移動や住民の入れ替わりが起きたのではなく、トルコ系遊牧集団による王朝建設の結果、領内の住民がトルコ語

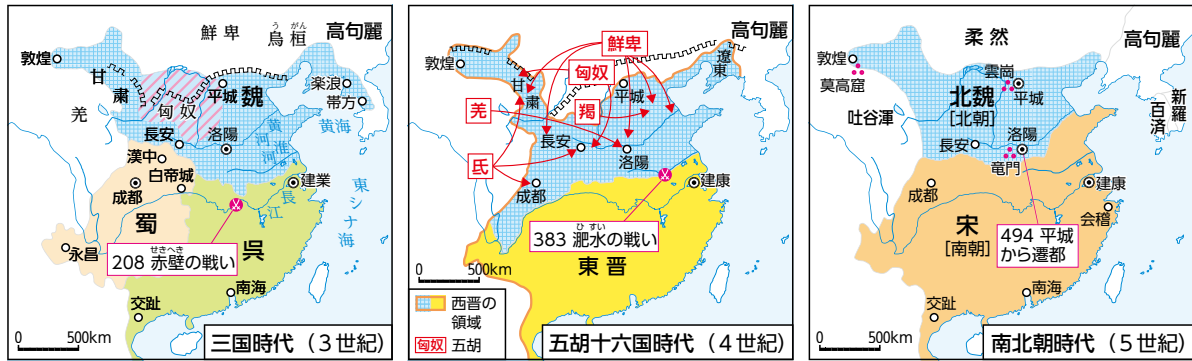
数世紀にわたるトルコ人の西方移動とイスラーム勢力の東進が、その後の歴史に大きな影響を与えたことがわかる。地図により、位置関係の確認もできる。



↑4 マニ教の細密画とウイグル文字 中央アジア東部の東トルキスタンでは、トルコ語は急速に浸透したが、イスラームの定着は遅かった。西ウイグル王国ではマニ教・仏教が信仰され、表音文字のウイグル文字でトルコ語を書き表す文書文化が発達した。

4節のまとめ

遊牧民の移動は、ユーラシアの国家や諸地域にどのような変化をもたらしたのか、あなたの考えを説明しよう。



↑1 3～5世紀の東アジア 後漢末の戦乱以来、常に勢力抗争を動かしたのは、華北一帯に入り込んだ中央ユーラシアの遊牧勢力であった。これに対し江南では、六朝諸国家の下で開発が進んだ。

5節 ユーラシアの変動と東アジア

中央ユーラシアの遊牧民の進出で、東アジアはどのように変化しただろうか。

中華の分裂と遊牧民の進出

華北で遊牧民の活動が活発化するなか、後漢が減びると中国大陸は政治的分裂の時代に入る。遊牧民と漢人の諸勢力が抗争を繰り返す一方、文化の融合が進んだ。

① 王朝交替と禅譲 王莽が新を建てる際(→p.27)、古代の理想的王朝交替とされる禅譲(→p.23)の形式をとり、魏の曹丕以降、北宋(→p.122)まで続いた。実態は、実力者が前王朝の皇帝に自分への譲位を強要するものだが、大規模な戦乱を伴わずに済む王朝交替方法ともいえる。

2世紀末の黄巾の乱の後、各地に割拠した勢力のなかから曹操・孫権・劉備が台頭した。220年に曹操の子曹丕が後漢の皇帝から禅譲を受けて位221～223、華北で魏を建てると、これに対抗して劉備は四川で蜀を、孫権は江南で呉を建て、それぞれ皇帝を称した(三国時代)。最も勢力が大きかった魏が蜀を滅ぼしたが、その魏でも重臣の司馬氏が実権を握り、司馬炎(武帝)が帝位を奪って晋(西晋)を建てた。

晋は280年に呉を滅ぼし、南北を統一した。しかし、晋が王族の内紛で混乱に陥ると、後漢以来服属していた南匈奴が4世紀初めに自立し、洛陽、長安を攻略して晋を滅ぼした(永嘉の乱)。これをきっかけに、華北にいた遊牧民の自立と新たな集団の流入が相次ぎ、遼東地方から甘粛地方に至る華北一帯で次々と遊牧系王朝がおこった。これらの遊牧民たちは「五胡」と総称され、以後100年余りにわたって彼らの建てた諸国家が興亡を繰り返した(五胡十六国時代)。そのなかから台頭した鮮卑の拓跋部が北魏を建て、439年に華北を統一した。

一方、晋が減びると、江南にいた王族が建康(現在の南京)で晋を再建した(東晋)。華北では戦乱が続き、東晋も北方に反攻する力はなかったため、華北と江南で政権が並び立つ情勢が固定していった。

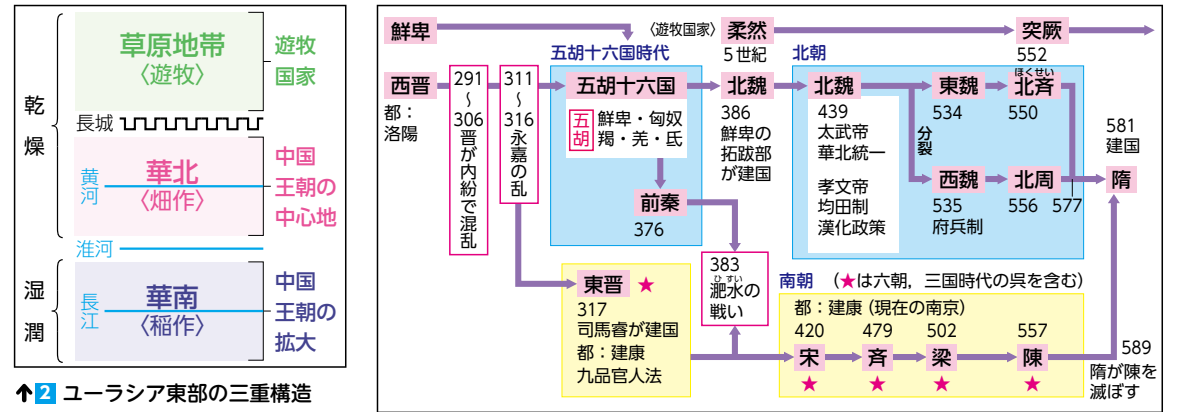
南北朝とその社会

約370年にわたる魏晋南北朝時代は、遊牧社会・農耕社会が入り乱れて抗争・融合した時代であり、華北・江南それぞれにおいて新たな制度・社会が作り出された。

華北を統一した北魏は、多数の漢人農民・都市住民を支配するため、均田制(給田制)を施行し、本拠地の平城(現在の山西省大同)から洛陽に遷都するなど、積極的な漢化政策をとった。しかし、鮮卑本来の言語・服装の禁止や洛陽中心の政治は、北方に残った同族の反発を買い、長城

遊牧系王朝であった北魏が、漢人支配のために均田制を生み出したことがわかる。

づいて、身分・地位に応じて土地を分配する制度。王朝が土地と農民を把握し、税収を確保することをねらいとした。



↑2 ユーラシア東部の三重構造

地帯での軍隊の反乱をきっかけに北魏は東西に分裂した。北魏から、華北を再統一した北周までの諸王朝は北朝と総称され、いずれも鮮卑の拓跋部出身の有力者たちが支配層であった。

一方、江南に建てられた東晋の下には、華北から多数の漢人貴族・農民が移ってきたため、長江下流域の農業開発が進み、また長安・洛陽一帯で育まれた文化がもたらされた。しかし、北方との軍事的緊張が続くなかで武将が実権を握るようになり、東晋は宋に取って代わられた。以後、南朝と総称される諸王朝が相次いで興亡した。

後漢滅亡以降の約370年にわたる分裂時代を魏晋南北朝時代という。この時代、モンゴル高原の遊牧国家、遊牧勢力が中国式の統治体制を採用した華北の諸王朝、江南を基盤とする漢人政権である六朝が南北に三重構造をなして並び立った。華北ではさまざまな遊牧勢力と漢人が、江南では華北からの移住者と江南住民が混じり合うことになり、それぞれの地域で新たな政治体制や文化が形づくられていった。

後漢末以来、戦乱と飢饉が相次ぐなか、多くの農民が土地を捨てて流浪し、豪族はそれらの農地・農民を支配下に収めて大土地経営を広げた。歴代王朝は、大土地所有を抑制し、農民を把握・保護して税収を確保するための土地制度・税制を打ち出した。しかし、豪族・貴族の支配層としての地位は揺るがず、魏が創始した官僚登用制度の九品官人法(九品中正)によって、かえって彼らによる要職の独占が進んだ。特に南朝においては、要職を世襲していく門閥貴族を生むことになった。彼らは大土地経営を行いつつ、漢・魏以来の伝統的な制度や教養の継承者を自負し、王朝の興亡に関わりなく政治・社会の上層を占め続けた。

一方、華北では、鮮卑をはじめとした遊牧勢力が漢人知識人・貴族と連合して支配層となり、遊牧民・漢人農民など多様な人々を統治する試みが積み重ねられた。律令や均田制などの民族・風土の違いを超えて適用できる諸制度がつくられ、後の隋・唐に受け継がれた。

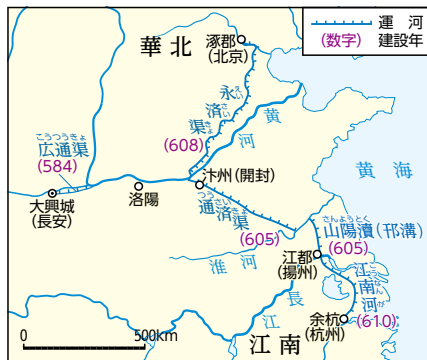
↑3 魏晋南北朝時代の王朝の変遷 三重構造のうち、北朝にとって脅威だったのは常に北方の遊牧国家であり、南朝は柔然や朝鮮半島の高句麗(→p.29, 44)と結んで北朝に対抗しようとした。倭の五王(→p.44)との関係もその一環である。

北方遊牧民の南下と、それに押された漢人の南下の結果、遊牧国家・華北・江南の三重構造が生まれたことがわかる。

⑤ 六朝 江南におこった呉・東晋と南朝を、併せて六朝とよぶ。首都はいずれも現在の南京で、呉の時代は建業、東晋以降は建康とよばれた。

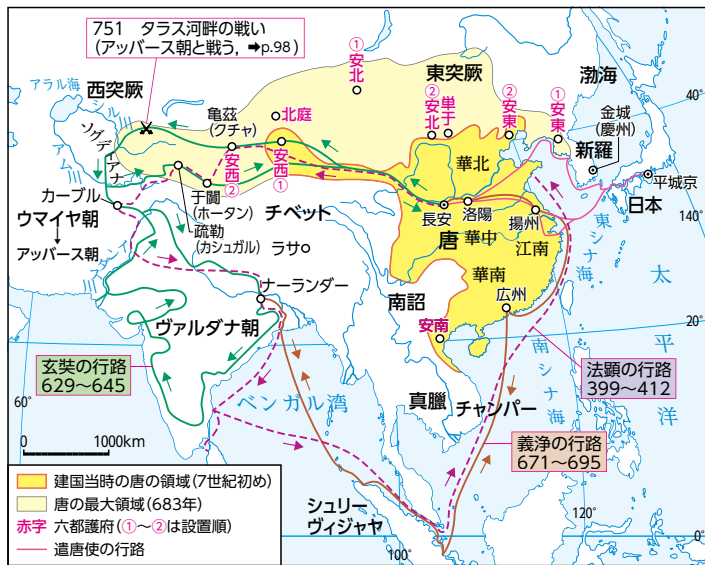
⑥ 魏晋南北朝時代の土地制度 魏の屯田制、北魏に始まる均田制(給田制)など、いずれも耕作者に土地を分配して課税するものであった。戦乱や飢饉によって放棄された土地が増加していたことが背景にあった。

⑦ 九品官人法 地方におかれた中正官が、各地域社会の人物評をもとに人材を9段階に評価多様な人々を統治するために、民族や風土を超えた諸制度が必要になったことがわかる。それが普遍的な制度だったために、後の隋・唐にも継承されたことがわかる。

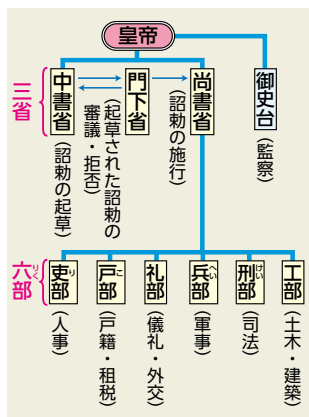


↑1 隋の運河 工事の負担は隋の滅亡を早めたが、大運河はその後19世紀まで南北の物流の大動脈となった。

→2 唐の領域 唐は、戸籍に基づく州県の直接統治と、遊牧民に対する、都護府を通じた間接統治とを併用して、広大な領域を統御した。



- ① **州県制** 漢代に郡・県の上に州がおかれていたが、隋のとき郡を廃止して州県制とした。
- ② **太宗の治世** 後世、太宗は名君とされ、その治世は「貞観の治」とよばれる。太宗との対比のため、隋の煬帝には暴君のイメージがつくられた。
- ③ **律・令・格・式** 律は行政法や民法、令は刑法、格は補足、式は施行細則に相当する。さらに皇帝の命令(勅)は律令に優先され、最上位の法令とされた。



↑3 唐の中央官制 単独の宰相はおかれず、三省の長官らの合議だった。六部は実務官庁で、御史台は官僚の監察を務めた。

問 大運河の建設について、成功点と失敗点をそれぞれ説明しよう。

隋唐世界帝国の形成

隋は南北を統一して大運河・都城・科挙など新たな帝国統治のしくみを生み出し、これを受け継いで完成させた唐はユーラシア東方の世界帝国となった。

581年、北周の有力者であった楊堅(文帝)が帝位について隋を建てた。文帝の分断策によって突厥(テュルク)帝国が東西分裂して北方の脅威が弱まると、589年に文帝は南朝の陳を滅ぼし、南北を統合した。

文帝とその子煬帝は、北朝でつちかわれた画一的な諸制度を引き継ぎつつ、江南で育まれた文化と経済力を取り込むため、中央集権化と南北統合を進めた。華北と江南をつなぐ交通・輸送の幹線として大運河を開通させ、首都長安(大興城)・洛陽と結びつけた。官僚登用制度では、推薦制の九品官人法に代わって学科試験による科挙(選挙)を導入し、また地方には州県制をしいた。しかし、相次ぐ土木事業や外征に不満が募り、高句麗遠征の失敗をきっかけに全土で反乱が起こって、隋は滅んだ。代わって、北周・隋と同じ拓跋部出身の武将李淵(高祖)が東突厥の支援のもと長安に入り、618年に唐を建てた。

中国内地を再統一した2代皇帝太宗(李世民)は、さらに東突厥を従え、チベット(吐蕃)帝国と和親して、中央ユーラシアへも勢力を伸ばした。続く高宗の時代には西突厥も服属させ、朝鮮半島にも進出したため、唐は一時期、東アジア・中央ユーラシアにまたがる世界帝国となった。

唐は、律・令・格・式からなる法制を整え、三省・六部をはじめとする中央官制を整備して統治を行った。基本方針は、自作農の増加と土地への定着を図り、それを王朝の財政・軍事の基盤とすることだった。そのため隋の諸制度を引き継ぎ、戸籍をもとに民衆に土地を支給し(均田制)、負担として租税・労役(租調役制)と兵役(府兵制)を課するという土地制度・税制・兵制が一体となった制度をしいた。一方、征服地は現地の

世界史の中の日本 唐からみた遣唐使

日本に大陸の制度・文化をもたらした遣唐使は、日本の国づくりには大きな役割を果たしたが、唐からみると新羅・渤海などの数多い朝貢使節の一つにすぎなかった。また、日本の遣唐留学生・留学僧も、国際都市の長安・洛陽にあっては多種多様な外国人の一人でしかなかった。

一方、鮮卑系の北朝の系譜を引き継ぎ、世界帝国となった唐では、人材登用も柔軟に行われ、ソグド・突厥・高句麗・インドなど多様な出身の人々が活躍していた。そのため、日本人も能力が認められれば登用された。留学生として唐に渡り、ベトナムの安南節度使となった阿倍仲麻呂は、その代表である。



↑4 長安を訪れる外国使節と唐の官吏 到来した使節には、唐の官吏による接待が行われ、その費用は唐がもっていた。

首長に引き続き委ね、六つの都護府において監督する間接統治を行った。北朝から隋、さらに唐に至る一連の王朝の支配層は、いずれも鮮卑拓跋部出身者を中心としていたため、これらは拓跋国家と総称される。国家のしくみも多くが受け継がれ、唐において完成された。

唐代の社会と経済

首都長安は中央ユーラシアに開かれた国際都市であり、農業や貿易で富む江南と大運河で結ばれていた。やがて社会の変容が進むと、経済中心の統治体制に転換した。

隋唐帝国の首都長安は、中央ユーラシアと直結し、大運河によって海の道ともつながった国際都市であった。人口は約70万を数え、唐の貴族・官僚・軍人・市民だけでなく、諸外国から訪れる使節・商人・宗教者・留学生ら数万人も集った。広大な領域を支えるため、穀物や絹が租調役制を通して集められ、さらに西域経営のためソグド商人らによって西方にも送られた。一方、大運河の開通以降、江南への移住・開発が本格化し、また海路からアラブ系・イラン系のムスリム商人が到来して、揚州・広州など華中・華南の海港が栄えた。経済の中心がしだいに江南に移るにつれ、大運河に近い副都洛陽の比重が高まった。

魏晋南北朝時代以来、華北には遊牧民の牧畜文化や西方のオアシス農業文化が浸透・融合していた。唐代にはあわなどの雑穀に加えて小麦の栽培が広まり、主食となった。また華中・華南では茶の栽培が始まり、唐代後半以降、茶を飲む習慣が普及した。

しかし、農村では、租税や労役・兵役の負担のために没落する農民が増え、彼らを支配下に収めて使役する貴族や新興地主の荘園経営が広がった。こうして8世紀前半には土地制度・税制・兵制が一体となった体制は崩れ、現実に対応して諸制度が切り替えられていった。兵制は給与制の専従兵士からなる募兵制に移行し、税制も現住地で所有している土地・財産に応じて課税する兩税法が780年に採用された。これらを通

「遣唐使」とは諸国から訪れる朝貢使節の一つであり、日本の「遣唐使」だけが特別ではなかったことが、唐からみることでわかる。

8世紀以降、労役は絹などで代納されるようになった(庸)。

- ⑤ **拓跋国家** 突厥やウイグルは、唐をタブガチュ(拓跋の発音のなまり)とよび、鮮卑拓跋部の王朝とみなし続けていた。
 - ⑥ **国際都市長安** 長安にはソグド商人が活発に往来し、さらに突厥の解体でトルコ系遊牧民(→p.37)が、またササン朝(→p.81)の滅亡でイラン系の人々が数多く移住していた。胡服・胡弓やポロ競技など、ソグド文化や遊牧民の風俗が流行し、その影響は日本の正倉院の宝物にもみられる。
 - ⑦ **兩税法の導入** 夏・秋の2回徴税するので兩税という。夏は小麦、秋は稲の収穫を主な課税対象としており、背景には唐代の小麦栽培の普及や稲作技術の向上がある。
- 唐は、自作農の増加と土地への定着を図る政策として、均田制・租調役制・府兵制をしいたが、農民の没落と荘園が増加した結果、兩税法・募兵制に切り替わったことが理解できる。

文化から見る 当時の社会

国際色豊かな唐の文化

唐の時代には、南北の統合と西域文化の流入により、国際色豊かな文化が形づくられた。さまざまな資料から、唐の文化の国際性を見てみよう。



1 外出する宮廷の人々 女性たちの間では、胡服とよばれる、筒袖で体にぴったり沿う西方趣味の服装が流行した。胡とは、当時ソグドを指した。



2 発掘された小麦粉食品 小麦の製粉技術は西方由来である。小麦粉を使った食品は漢代に現れ、「胡餅」「胡食」とよばれた。唐代には民衆にとっても日常的な食物となっていた。

読み解き 史料に記された「胡曲」「胡食」「胡服」を、図1～3からそれぞれ選ぼう。また、図1～3や史料を根拠に、交通の発展は文化に対してどのような影響を及ぼしたのか考えよう。



西域からきたと思われるラクダ

3 唐三彩 前面の人物が持つ弦楽器は琵琶とよばれ、日本にも伝わった。

史料 玄宗時代の長安の流行 宮中音楽では胡曲が好まれ、貴人の食事はことごとく胡食が供され、身分のある男性も女性も皆胡服を着るまでになった。《『旧唐書』より要約》

1 世界宗教の伝播 この時期、特定の民族や地域を超えて信仰される世界宗教が広まった。仏教に加え、新たに西方からマニ教・ゾロアスター教(祆教、→p.63)・ネストリウス派キリスト教(景教、→p.79)・イスラーム(後に回教とよばれる、→p.93)が伝来した。

儒教・仏教・道教と 中国社会

唐の文化は、外来文化と漢代までの文化が融合した華北の文化が、貴族中心の江南の文化と結び付き、さらに西域文化まで流入した多層的な融合の文化であったことがわかる。

やがて中国社会では、儒教を公認の政治思想としつつ、道教を信じ仏教も学ぶというあり方が定着していった。

して、魏・晋以来試みられてきた王朝による土地管理と大土地所有制限という方針は放棄され、貧富の格差を前提としたうえで徴税・兵力調達を行う体制に切り替わり、以後の王朝にも受け継がれた。

南北文化の融合 晋唐文化

魏・晋以来、江南の優雅な文化と華北の質実な文化の二つの流れが成長し、隋・唐で融合した。仏教をはじめ西域文化も流入し、唐代には国際色豊かな文化が栄えた。

魏・晋代に始まり、南朝・北朝で発展し隋・唐に至る文化の流れを晋唐文化という。この一連の文化は、朝貢使節や僧侶・商人の往来を通して各地に広がっていき、日本を含む東アジア共通の文化的土壌となった。

魏・晋以降、中央ユーラシアに連なる華北では、質実剛健な遊牧系政権の下で、仏教をはじめとする外来文化が漢代までの文化と融合した。

また、緑豊かな江南では貴族中心の優雅な六朝文化が栄え、世俗を離れた趣味や幅広い教養が貴族たちに好まれ、清談とよばれる哲学的談議が流行した。東晋の陶潜(陶淵明)の詩や王羲之の書、顧愷之の絵画は、当時にとどまらず後世まで広く愛された。

この二つの流れが南北の統合と大運河によって結びつき、さらにソグド文化やインド系・イラン系文化などの入り混じった西域文化が流入・融合したのが、隋唐の文化である。主に華北で発展した漢訳仏教や仏

この二つの流れが南北の統合と大運河によって結びつき、さらにソグド文化やインド系・イラン系文化などの入り混じった西域文化が流入・融合したのが、隋唐の文化である。主に華北で発展した漢訳仏教や仏

1 2 3 史料

アジア各地に広まる文化

晋唐文化は、漢字文化圏共通の文化的土壌となった。資料から、日本でどのように唐の文化が受容されていたのか見てみよう。

4 白居易の唐詩 唐の詩人である白居易が、長安から地方へ左遷され、廬山のみもとに草庵を建てたときによんだ詩。

5 『枕草子』 日本の平安時代の作品。藤原道隆の娘、中宮定子に仕える清少納言が、宮廷生活を記した随筆。

4 白居易の唐詩 唐の詩人である白居易が、長安から地方へ左遷され、廬山のみもとに草庵を建てたときによんだ詩。

史料 『枕草子』(1000年ごろ)

雪のたいそう高くつもった日、…話をしていると、宮さまが、「少納言よ、香炉峰の雪はどんなふうかしら。」とおっしゃるので、格子をあけ、みすを高くまきあげるとおわらいになった。「…白氏文集の詩は知っていても、なかなか、あなたのように機転はききませんわ。やっぱりこちらの宮さまにお仕えなさるにふさわしい方よ。」と、みんなにいわれた。《大庭みな子訳》

読み解き 史料4の漢詩のうち、史料5と関係する箇所に線を引こう。また、史料4は日本の貴族にとってどのような存在だったのか、考えよう。

像、江南で発達した詩文や書・画は、遊牧民と漢人、華北と江南といった違いを超えて広く受け入れられ、さらに時代や地域をも超えて後世まで重んじられた。李白や杜甫、白居易(白樂天)らの唐詩は、中国にとどまらず日本をはじめ漢字文化圏共通の教養として広く親しまれた。

5 多様な文化に寛容な遊牧民が主導権を握っていたこの時代は、さまざまな宗教・思想も活発に展開した。なかでも紀元前後に伝来した仏教は、4世紀以降、中央アジア出身の僧侶・鳩摩羅什によって華北の諸国で盛んになり、江南でも貴族たちに広まった。北朝から唐にかけて、巨大な石窟寺院がえられるなど仏教は国家的保護を受けて栄え、仏典の伝来・翻訳が進んで天台宗・禅宗・浄土宗などの諸宗派が成立した。一方、外来の仏教の普及は在来の民間信仰や儒教を刺激し、老荘思想や神仙思想などを取り入れた道教が成立して、唐代には王朝の保護を受けた。儒教でも經典の整理・研究が進み、唐代に太宗の命で注釈書『五經正義』がつくられ、科挙試験のための公式解釈となった。

15 やがて唐代後半になると、このような国際色豊かで普遍性の高い文化から、古文の復興を主張した韓愈・柳宗元らのように、中国内地の風土に根ざし、漢代に模範を求める動きが盛んになった。

Table with 2 columns: 文 (Literature) and 宗 (Religion). Rows include 詩文 (Poetry), 書画 (Calligraphy/Painting), 仏教 (Buddhism), and 道教 (Taoism).

Table with 2 columns: 文 (Literature) and 宗 (Religion). Rows include 詩文 (Poetry), 書画 (Calligraphy/Painting), 仏教 (Buddhism), and 道教 (Taoism).

晋唐文化は、地域や時代を超えて愛好されたことがわかる。例えば日本では、『枕草子』が白居易の詩に影響を受けていたことがわかる。

6 白居易



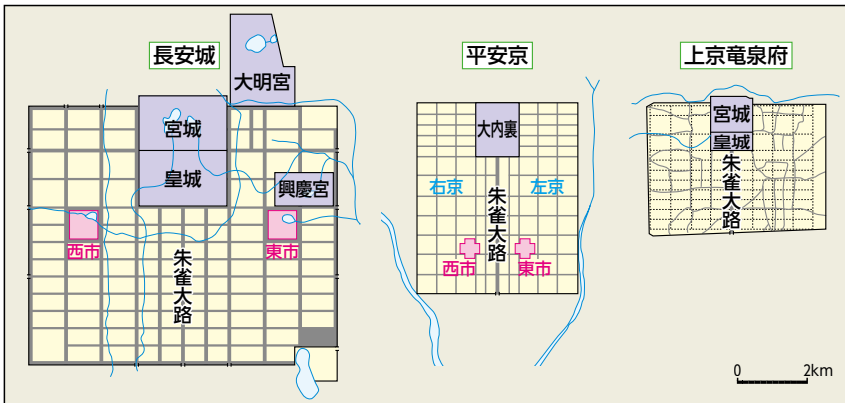
7 顔真卿の書 東アジア各地で広く模範として重んじられた。

2 求法僧の取經の旅 東晋の僧侶は、仏典を求めて陸路でインドまで赴き、海路で帰国して『仏国記』を著した。また、唐代には玄奘が陸路、義浄が海路でインドを訪れ、經典を持ち帰った(→p.40)。

問い 晋唐文化について、魏・晋代から唐代までの文化の流れを要約しよう。

→1 東アジアの都城制 都城制は北朝の遊牧系政権の下で発達した。長安は新たに建設された計画都市であり、このような都城制は、国家を建設・整備しつつあった諸国にとって理想とされ、日本の平城京・平安京、渤海の上京竜泉府など、各国で模倣された。

読み解き 平安京と上京竜泉府は、どのような点が長安の模倣なのだろう。



朝鮮半島の対外関係

大興安嶺を経てモンゴル高原につながる朝鮮半島北部は中央ユーラシアとも密接な関係にあり、しばしば中華王朝と遊牧国家の争奪の対象となった。匈奴に反撃を図る漢や、突厥と対立する隋・唐が半島に遠征したのは、その一例である。一方、半島南部では663年の白村江の戦いで倭の介入は退けられたが、日本との密接な交流は以後も続いた。



↑2 三国時代の朝鮮半島(5世紀)

1 南詔 チベット=ビルマ系の文化をもつ王国で、インドや中国の文化の影響を受けた。

A 中央ユーラシア
B 東アジア
C 日本

唐の外交姿勢が、北方・西方と東方・南方では異なっており、とくに北方・西方の中央ユーラシア勢力の動向に左右されていたことがわかる。

東アジア諸国家の形成

朝鮮半島・日本列島など唐の周縁諸地域では、漢字を媒体として律令・都城制・仏教文化をとり入れた国家が整備され、現在に続く漢字文化圏が形成された。

3世紀以降、朝鮮半島・日本列島では国家形成が進展し、中国王朝とさまざまな関係を展開した。4世紀に楽浪郡を滅ぼした高句麗は、広開土王のときに勢力を拡大し、中国東部の南方から朝鮮半島北部までを支配下に収めた。このころ半島南部では百済・新羅が成立し、高句麗と並び立つ形勢となった(三国時代)。一方、日本列島では、近畿地方を中心とするヤマト王権が倭国の統合を進めた。5世紀には倭国の王(倭の五王)がたびたび江南地方の南朝に朝貢し、また百済や加耶(加羅)諸国と結んで朝鮮半島南部にも介入した。

隋唐帝国の成立は、近隣の諸地域に大きな影響を及ぼした。朝鮮半島では、唐と結んだ新羅が百済・高句麗を滅ぼし、次いで唐も排除して、676年に三国の統一を果たした。新羅は官位制・身分制を整え、都慶州では仏教文化が栄えた。これに対し、その北方で7世紀末に高句麗の遺民が渤海を建て、日本とも通交した。また、唐の西南の雲南地方では8世紀に南詔が自立し、唐の影響を受けた国づくりを進めた。日本も遣唐使・遣唐使を派遣して制度・文化のとり入れに努め、律令国家体制を整えていった。奈良時代の天平文化は、仏教色が濃く唐の文化の影響を強く受けている。これら唐の東方・南方の諸国の多くは、隋唐帝国で完成された律令・都城制・漢訳仏教という統治制度・思想体系を、漢字を媒介としてとり入れた。こうして漢字文化圏がほぼ輪郭を整えた。

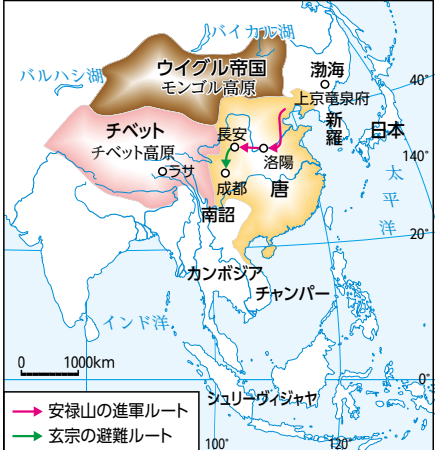
一方で、突厥やウイグル、チベット(吐蕃)は唐と対等、あるいは唐より優位の関係にあり、唐の外交政策を決定する要因となったのは、常に北方・西方の中央ユーラシア勢力の動向であった。唐は、優勢なときは直轄支配や間接統治を拡大し、劣勢になると婚姻や交易に応じた。片や東方・南方の朝貢国に対しては、冊封関係を結んで世界帝国としてふるまい、唐は力関係や国際情勢に応じて多様な関係を展開した。

中国史上唯一の女帝・則天武后

中国史上、政治を動かした女性は何人もいるが、みずから皇帝となったのは則天武后ただ一人である。高宗の妃の一人だった則天武后は、皇后に上り詰ると、病弱の夫に代わって実権を握り、高宗の没後、実子の中宗らを廃位して皇帝となった。武後の死後、復した中宗の皇后韋后もこれにならって帝位に就こうとしたが失敗した。女性が主導した一連の政治変動は、後に「武韋の禍」と否定的によばれるが、則天武后の時代は、統治が安定し、科挙出身の官僚の登用など改革の進んだ時期であった。



↑3 則天武后 本名は武照。政治において儒教とともに仏教を重視した。



唐の体制転換とユーラシア東方の変動

唐は安史の乱の後、財政改革で体制を立て直したが、共存していたウイグル帝国が崩壊し、黄巢の乱で江南が混乱すると行き詰まり、ユーラシア東方は変動期となった。7世紀末、高宗の皇后であった則天武后(武則天)が皇帝となって国号を周と改めた。その死後の混乱を収めて唐を復活させた玄宗は、政治を引き締め、国政改革に努めた(開元の治)。則天武后から玄宗の時代、唐初期の統治体制の切り替えが進んだ。科挙官僚の登用が増えて、北朝以来の貴族と並んで政治を担うようになり、府兵制に代わった募兵制の下、節度使が指揮する軍隊が辺境防衛にあたった。

唐の軍隊の主力は、服属したトルコ・ソグドなどの騎馬軍団であり、なかでも両者の血を引く節度使安禄山は強力な軍隊を指揮していた。玄宗の晩年、楊貴妃の一族が実権を握ると、河北で自立を強めていた安禄山は、ソグド系部将の史思明と共に挙兵した(安史の乱)。唐は洛陽・長安を奪われ危機に陥ったが、ウイグル帝国が援軍を送って乱を鎮圧した。

弱体化した唐はウイグル・チベットに中央アジアを奪われ、南詔の独立で雲南も失い、8世紀半ば以降、領域は著しく縮小した。中央政府の統制も弱まり、安史の乱後、内地にもおかれるようになった節度使が、軍事だけでなく行政・財政の権限も握って各地で勢力をもった(藩鎮)。

後半期の唐王朝の実体は、各地方の藩鎮の集合体にすぎず、ユーラシア東方最大の軍事力をもつウイグル帝国との和親関係と、経済の中心に成長した江南地方からの収入によって支えられていた。唐は両税法と塩の専売を導入して財政の再建を図ったが、9世紀後半には塩の密売人によって黄巢の乱が起こった。唐は、840年のウイグル帝国崩壊で後ろ盾を失っていた上、乱によって江南が混乱に陥るとその衰退は決定的となり、907年、節度使の朱全忠に滅ぼされた。ウイグルと唐の崩壊により、ユーラシア東方は変動期に入っていく。

↑4 9世紀初めの唐・ウイグル・チベット 安史の乱で唐が衰えた後、中央アジアはウイグル・チベット両帝国が南北で分け合った。唐は江南の税収と海上貿易に依存するようになった。

安史の乱以降、領土的にも立場的にも弱体化した唐は、チベットと対等の関係になったことが、唐蕃会盟碑から読み取れる。

唐蕃会盟碑(823年) チベットと中国の両国は、現在支配している領域と境界を守り、その東方すべては大中国の領域、西方すべてはまさしく大チベットの領域で...、チベット人はチベットで安らかにし、中国人は中国で安らかにするという大いなる政事を結んで一つにして...、誓いをなした。

↑5 唐蕃会盟碑 ラサに立てられた碑で、唐とチベット(吐蕃)の講和条約の内容を記している。読み解き 両国の関係はどのようなものだろうか。

5節のまとめ 隋唐帝国で形成された諸制度や文化が朝鮮半島や日本に広がったのはなぜか、あなたの考えを説明しよう。

1章の振り返り 東アジアと中央ユーラシアの歴史的特質は、どのようなものだろうか。あなたの考えを説明しよう。

探究 TRY

ユーラシア東部の国際関係 — 「中華」の王朝とその周辺

中国の王朝は、自身の国が世界の中心たる「中華」であり(→p.25)、周囲の国々は皇帝の徳や文化を慕って朝貢してくるのだという思想をもっていた。だが、実際の近隣諸国との関係性はどのようなものだったのだろうか。唐代の資料を読み解いて、ユーラシア東部の国際関係を考えよう。

Question 唐は、近隣諸国とどのような関係にあったのだろうか

資料1 唐と日本の関係

遣唐使について

遣唐使は日本から唐への公式の朝貢使節で、630年に開始された。4隻の船で編成され、1隻につき100人が乗船した。生還率は、すべての遣唐使を通して計算すると、約6割程度だったという。



↑2 第18回遣唐使の様子
〔弘法大師行状絵詞〕東寺蔵

年代	唐の情勢	遣唐使(数字は回)	日本の出来事
7世紀	建国(→p.40)	①犬上御田鎌ら ②, ③, ④	・遣唐使の派遣を開始
8世紀	領域最大(→p.40)	⑤, ⑥, ⑦	・白鳳文化(唐初期の影響を受けた文化)
	開元の治(→p.45)	⑧山上憶良ら ⑨阿倍仲麻呂ら ⑩	・大宝律令の整備 ・平城京に遷都
	安史の乱 領域縮小 藩鎮の台頭(→p.45)	⑪(中止), ⑫ ⑬, ⑭(中止) ⑮(中止) ⑯, ⑰	・天平文化(国際色豊かな文化、西域の文物も渡来) ・平安京に遷都(→p.44)
9世紀	衰退続く	⑱最澄、空海ら ⑲	・平安京に遷都(→p.44)
10世紀	黄巢の乱 滅亡(→p.45) →民間商人の海上進出	⑳(中止) →以降無し *回数は諸説ある。	・弘仁・貞観文化(唐から帰国した最澄・空海による密教の隆盛) ・遣唐使の停止 →国風文化の発達へ

↑3 7~10世紀の唐と日本に関する年表

- STEP1 読解
- 資料1~3から、日本は遣唐使を重視していたといえるだろうか。
 - 資料3と4から、日本が遣唐使を送ることにどのようなメリットがあったのだろうか。
 - 史料4と5から、唐にとって、日本はどのような国だったといえるだろうか。

STEP2 説明 7~10世紀の日本と唐にとって、お互いはどのような存在だったのだろうか。資料1~5から読みとったことを踏まえて、あなたの考えを説明しよう。

史料4 第9回遣唐使(唐の記録)(717年)

玄宗の開元年間の初め、日本国は再び使者を遣わして来朝させた。その使者はその機会に儒者から経書を教えてもらいたいと願い出た。そこで玄宗は…趙玄黙に…教えさせた。日本の使者はそこで玄黙に広幅の布を贈って入門料とした。その布には「白亀元年の調布」と書きつけてあったが、中国人は、日本で調として布を納める制度があるなどとは嘘だろうと疑った。その使者は、中国でもらった賜り物のすべてを投じて書籍を購入し、海を渡って帰っていった。

その時の副使の阿倍仲麻呂は、中国の国ぶりを慕って…唐朝に仕えて…去ろうとしなかった。

〔藤堂明保 竹田晃 影山輝國訳「倭国伝」(旧唐書)一部改変〕

史料5 第12回遣唐使(日本の記録)(754年)

…正月一日に…朝貢の諸外国の使節は朝貢を行ないました。…唐の朝廷は古麻呂*の席次を、西側にならぶ組の第二番の吐蕃(チベット)の下におき、新羅の使の席次を東側の組の第一番の大食国(ペルシャ)の上におきました。そこで古麻呂は次のように意見を述べました。「昔から今に至るまで、久しく新羅は日本国に朝貢しております。ところが今、新羅は東の組の第一の上座に列なり、我(日本)は逆にそれより下位におかれています。これは義にかなわぬことです」と…

*遣唐使の副使 (宇治谷孟訳「続日本紀」)

↑新羅は三国統一の時期(→p.45)には日本との関係を重視したが、その後は唐に接近して高く扱われており、日本はそれに反発した。

資料2 唐と遊牧国家の関係

史料6 玄宗「紀泰山銘」(726年)

東西南北の異民族が、通訳を重ねて我が朝に来貢するのは、歴代帝王の重なる徳化の賜物であって、朕は何にもまして敬慕する。

〔竹村則行訳〕



↑唐の皇帝玄宗が、725年に泰山で儒教儀礼を行った際に、その経緯や意義を刻んだ碑文である。上記の史料はそのうちの、従来の皇帝の功績が述べられた部分。

それぞれの視点で書かれた史料などを読み解いた上で、唐と周辺諸国の外交関係について考察する。

史料8 突厥(テュルク)の碑文(8世紀前半)

ウテクエン(モンゴル高原にある聖山)の山林よりよいところはない。国を保つべき地はウテクエンの山林である。この地に住んで、我々は唐の民と和睦した。彼らは金・銀・酒・絹を限りなく与える。唐の民の言葉は甘く、その絹は柔らかい。…甘いその言葉、柔らかいその絹に欺かれて、多くのテュルク*の民が死んだ。…その地に行くと、お前たちテュルクの民よ、死ぬぞ! ウテクエンの地に住んで、隊商を送るならば、お前たちにいかなる憂苦もない。

*突厥のこと (護雅夫「古代トルコ民族史研究II」一部改変)

↑オルホン碑文(→p.36)と総称されるトルコ語碑文の一つ。

史料9 安史の乱(唐の記録)

(都落ちした皇帝のもとに)ウイグル・チベットの使者が次々と到着し、和親を請い願って、唐を助けて反乱軍(安祿山・史思明)を討つことを願い出た。

〔旧唐書〕より要約

史料10 安史の乱(ウイグルの碑文)

…(ウイグルのカガンのもとに)「この苦難から救って下さい。援助して下さい」という(唐の天子の)言葉(=請願書)が来た。神である王(ウイグルのカガン)がこの言葉を聞いた時、自ら強力な軍隊とともに天子の居所(中国を指す)にお進みになられた。

〔森安孝夫「シルクロードと唐帝国」一部改変〕

史料11 唐とウイグルの絹馬貿易(唐の記録)

元来ウイグルは功名をたのみ、乾元(安史の乱の時期にあたる元号)の後より、しばしば使節を派遣して、馬をもって絹と交易した。そこで毎年、交易しに来て、馬一頭で絹四十匹を交換し、ややもすると数万頭の馬をもたらしてきた。

〔旧唐書〕より要約

年代	唐の出来事	中央ユーラシアの出来事
7世紀	・唐の建国(→p.40)	
8世紀	・唐の領域最大(→p.40)	・東突厥が唐に服属、皇帝に天可汗の称号を贈る
	・則天武后(→p.45)が、周に国号を変更 ・玄宗、開元の治(→p.45)	・ウイグル、東突厥を滅ぼす ・ウイグル、安史の乱で唐に援軍を送る(→p.36)
9世紀	・安史の乱 ・唐の領域縮小、藩鎮が各地で台頭(→p.45) ・ウイグルとの絹馬貿易が盛んに行われる	・ウイグル、唐と絹馬貿易を盛んに行う(→p.36)
10世紀	・唐蕃会盟碑(→p.45)	・ウイグル帝国の崩壊
	・黄巢の乱起こる ・唐の滅亡(→p.45)	

↑7 7~10世紀の唐と中央ユーラシアに関する年表

STEP1 読解

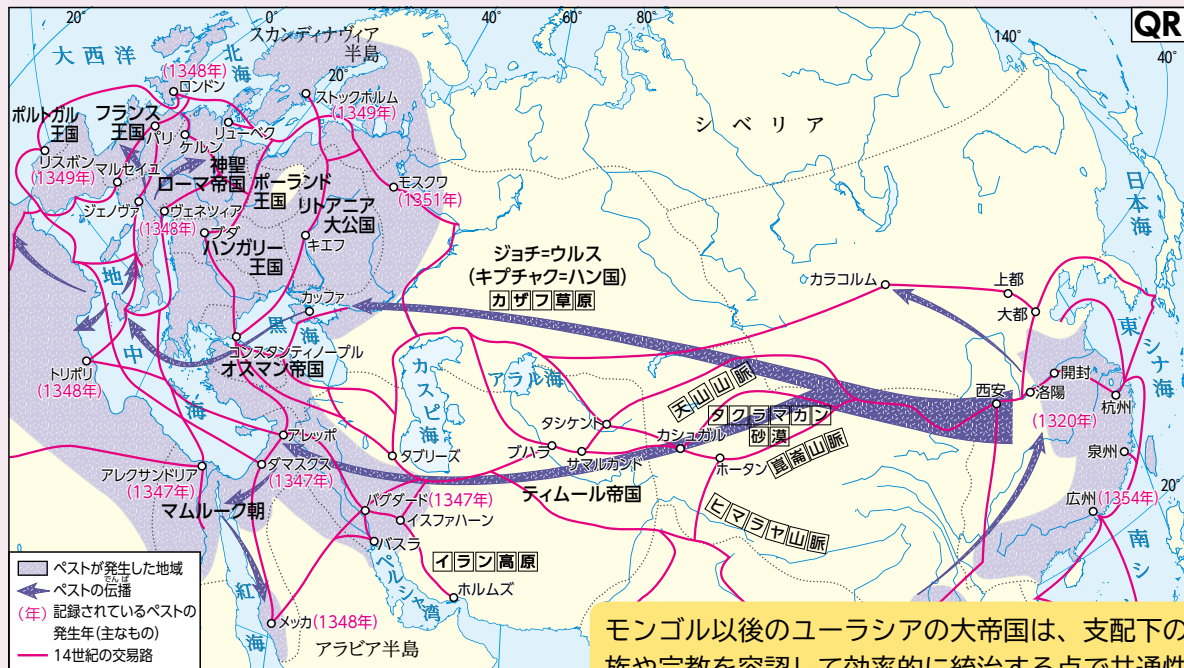
- 史料6と8から、唐と突厥の互いの関係についての認識は、どのように異なるだろうか。
- 史料9と10から、安史の乱についての唐とウイグルの記述は、どのように異なるだろうか。
- 史料9と11から、唐は、ウイグルと自身の立場関係をどのように記しているだろうか。
- 資料7~11から、唐と遊牧国家の経済関係はどのようなものだったと考えられるだろうか。

STEP2 説明

- 絹馬貿易について、ウイグルの側はこの貿易をどのようなものと考えていたと推測できるだろうか。資料6~11から読みとったことを踏まえて、あなたの考えを説明しよう。
- 中国の王朝による、自身を「中華」とする国際関係の説明は、どの程度実態に即していたのだろうか。唐と日本、また唐と遊牧国家の関係を踏まえて、あなたの考えを説明しよう。

STEP3 議論

STEP2の2)でまとめた内容について、グループで発表し合い、議論してみよう。議論を経て、自分の意見が変わった場合は、STEP2でまとめた内容を変更しよう。



↑ 14世紀の交易とペストの広がり

モンゴル以後のユーラシアの大帝国は、支配下の民族や宗教を容認して効率的に統治する点で共通性があったことがわかる。

結びつく世界 13~14世紀 ユーラシア大交流圏の成立と危機

● **モンゴル帝国とユーラシア大交流圏**
 12世紀までに徐々に進んできた各地域の結びつきは、13世紀の**モンゴル帝国**の登場によって一気に加速した。14世紀前半にかけて、ユーラシア・北アフリカにまたがり、陸と海で結ばれた巨大な交流圏が形成され、ユーラシア規模で人・もの・情報の移動・交流が空前の発展を遂げた。

「草原の道」から登場し、早くに「オアシスの道」を押さえたモンゴルは国際商業の重要性をよく認識しており、交通網を整備し貿易の保護・振興に努めた。モンゴルがユーラシアの主要部分を統合したため、通行税などの負担や隊商が襲撃を受ける危険が少なくなったことも、活発な商業活動を後押しした。南宋の征服によって「海の道」も押さえると、交易網は海路とも結びついた。西方に伝わった東方の繁栄の様子は、ヨーロッパ人に豊かなアジアへの憧れを抱かせ、「大航海時代」の原動力にもなった。

● **14世紀の危機**
 1310年ごろから数十年間、北半球では寒冷な気候が続いた。長期の好況で人口が増え、やせた土地の無理な開発や森林破壊が進んでいたこともあり、各地で深刻な不作や飢饉が起こった。それに伴い、

社会不安や感染症がモンゴル帝国の交通網とネットワークを通じて急速に広がった。この時期に**ペスト**(黒死病)が、中国から中央ユーラシアを経て西アジア・ヨーロッパに短期間で伝わり、西ヨーロッパの人口の3分の1を奪ったことは、そのわかりやすい例である。

こうしたなか盗賊や反乱が発生し、モンゴル帝国の諸政権は次々と解体した。日本でも14世紀には南北朝の動乱が続く、朝鮮半島・中国沿岸の人々は**倭寇**の恐怖におびえた。こうしてユーラシア・北アフリカのネットワークは、一時的に寸断された。

モンゴル時代の大規模な交流は、このように強烈な負の側面をもっていた。しかし、「14世紀の危機」を乗り越えた各地域では、モンゴル時代の多くの遺産が活用された。第1に、広域のネットワークが復活して海上でさらに活性化し、15世紀には鄭和の大航海やヨーロッパ人のアメリカ大陸「発見」などの海外進出が実現した。第2に、**モンゴル以後にユーラシア各地を支配した諸帝国は、オスマン・ムガルやロシア、時代は下がるが清朝など、いずれも支配下においた多くの民族や宗教を、独自性を認めながら効率的に統治するシステムにより、広大な領土を長期間、安定的に支配した。**

時代の特徴 **モンゴル帝国の下で、13世紀に全ユーラシアが結びついた。その交流は「14世紀の危機」で一時的に断絶したが、モンゴル時代のシステムは多くの点で後の時代に影響した。**

2章 アジア諸地域の成熟とヨーロッパの進出

章の見通し 交易の拡大は世界の諸地域をどのように変えていったのだろうか。



↑ **1 朱元璋** 異様な風貌だったといわれ、「一人にして聖賢・豪傑・盜賊の性を併せもっていた」と評される。読み解き なぜ印象の異なる肖像画が残っているのだろうか。
 → **2 15世紀の東アジア** モンゴルは依然として強大であり、明は東北に進出するとともに、朝鮮・日本・琉球、東南アジア諸国などと外交関係を結んで対抗した。



1節 明の国際秩序と東・東南アジア

明の成立とユーラシア東方
 江南を基盤に成立した明は、皇帝独裁制を確立し強固な国内支配を打ち立てたが、対外的には、北方に撤退したモンゴルと長城を境界として南北で並存した。

5 「14世紀の危機」とよばれる災害・疫病の続発は、東アジアの社会にも深刻な打撃を与え、各地で政府の支配が揺らいだ。大元ウルス(元朝)の下では、**白蓮教徒**の起こした反乱が広まった(紅巾の乱)。反乱の指導者の一人であった**朱元璋**(太祖、**洪武帝**)は1368年に南京を都として**明**を建て、大元ウルスの朝廷は明軍に大都を奪われてモンゴル高原に退いた(北元)。明は江南からおこって南北を統合した初めての王朝であり、これは江南地方が経済・文化だけでなく政治においても中心地となるほどに成長したことを意味した。

洪武帝は経済の混乱や農村の荒廃に対処するため、銀や貿易に依存せず、農村を立て直してそこから穀物や労働力を直接徴発するしくみを築いた。そのために全国的な検地を行って土地と農民を把握し、**里甲制**をしいて徴税や治安業務にあたらせた。軍制では**衛所制**をしいて、防衛や運輸を担わせた。社会統合にあたっては、さまざまな人々や価値観が共存したモンゴル時代から一変して、**儒教**を重んじ小農民が基盤となった社会に皇帝が君臨する体制を目指し、**官僚・地主・大商人**に対しても、また農民に対しても、厳しい統制を行った。中央では、中書省と宰相職を廃止し、六部などの中央官庁や地方長官を皇帝に直属させて権力を集中した。官僚登用にあっては、秩序を重んじる**朱子学**を公式解釈に定

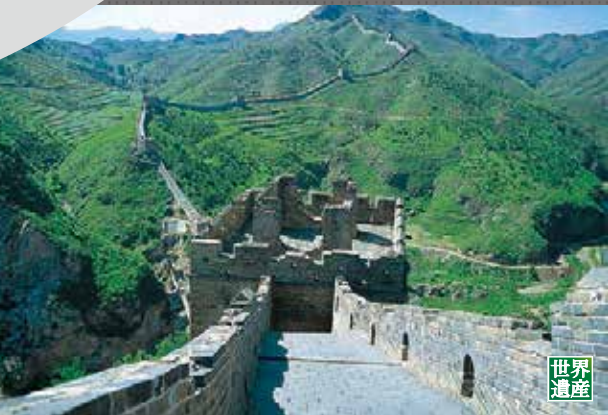
① **白蓮教** 仏教系の宗教結社で、弥勒仏が救世主としてこの世に現れるという信仰をもつ。歴代王朝によって禁じられたが、民間で勢力を伸ばし、しばしば反乱に関わった(→p.236)。

② **一世一元の制の始まり** 明以降、皇帝一代に一元号となり、**洪武帝・永楽帝**など元号で皇帝を通称するようになった。日本では、明治(→p.240)からとり入れられた。

③ **土地と戸籍の把握** 土地は魚鱗図冊とよばれる台帳に記録され、戸籍台帳である賦役黄冊に基づいて税役が課された。

④ **民戸と軍戸** 衛所に属する人々は軍戸、それ以外の大半は民戸とされ、税と労役を負担した。

問い **モンゴルと明の統治の相違点を要約しよう。**



世界遺産

世界史の中の日本 **日本と朝貢・冊封**

日本は、形式とはいえ中国皇帝の臣下になることを嫌い、遣隋使・遣唐使は朝貢のみで冊封は受けず(→p.44)、宋・元時代は朝貢も行わなかった。明による日本国王の冊封は、実に5世紀の倭の五王以来のことである。勘合貿易とは、日本が明と行った朝貢貿易の通称で、正規の貿易船であることを確認するために、割印を押した証明書(勘合)を用いたことからこのようによばれる。

↑1 万里の長城 明が万里の長城を防衛線とした結果、モンゴルの遊牧世界と中国の農耕世界が分離された。長城以北ではしだいに言語・文化・生活様式の共通性が高まり、それまで多種多様な人々の集団であったモンゴル(→p.130)が「民族」としてまとまっていくようになった。

① 明初のモンゴルの制度 民戸・軍戸のように、職業別の戸籍に分類するのはモンゴルの制度だった。百戸所・千戸所・衛からなる衛所制、戸を甲が、甲を里が束ねる里甲制も、千戸制(→p.129)の階層型組織にならったものであった。

② オイラト オイラト部は、モンゴル西部のチンギス家ではない首長が統率する遊牧部族の連合である。15世紀の指導者エセンは明軍を破って皇帝を捕らえ(土木の変)、みずからハーン

明が海禁=朝貢体制をしいた結果、日本は明と交易するために朝貢を行わざるを得なくなったことがわかる。

しい交通・交易管理は陸上で同じで、モンゴルや女真との交易は、朝貢の形式をとらせようえ経路・人数・回数などに制限が課されており、しばしば貿易の拡大を求める勢力との衝突が起こった。朝鮮・ベトナムも陸路での朝貢が指定されていた。

め、民衆に対しても儒教に基づく教化を図った。一方で、洪武帝は息子たちを全国に王として配置するなどモンゴルにならった制度もとり入れており、明初の体制は、モンゴル帝国を継承する側面と、中国の農村社会に基盤をおく側面の両面をもっていた。

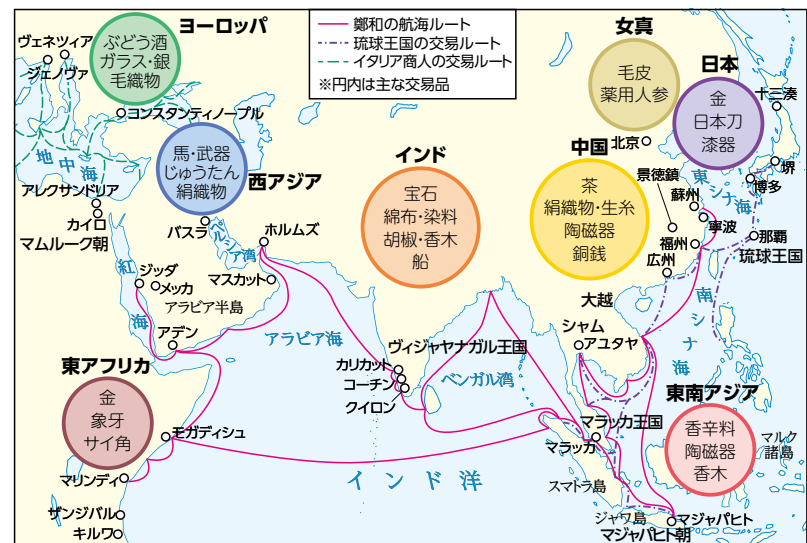
洪武帝の没後、息子の一人である燕王が反乱を起こし(靖難の役)、南京を攻め落として即位した(永楽帝)。彼は自分の本拠地であった北京へ遷都し、積極的な対外政策を展開した。北方ではみずからモンゴル遠征を繰り返し、また黒竜江(アムール川)方面に進出して女真人を従えた。南方では、ベトナムへ出兵して一時占領し、さらにムスリムの宦官鄭和の船団を東南アジア・インド洋に派遣した。船団の一部はアラビア半島や東アフリカにまで達し、一時的に多くの南海諸国が朝貢した。

モンゴルの北元では、14世紀末にクビライ家の直系が断絶してほかのチンギス家の王族が大ハーン位を継いだ。その力は弱く、西方のオイラト部が実権を握って明にも圧力をかけた。守勢に立つようになった明は、長城を堅固に修築して、これを事実上の境界とするようになった。

明の海禁=朝貢体制とアジア海域

明は朝貢・冊封関係と海禁を結合させた厳しい対外関係管理体制をし、沿海部の治安回復を図った。日本もこの秩序を受け入れ、朝貢貿易に踏み切った。宋・元代に海上貿易が発展していた東シナ海では、「14世紀の危機」のなかで日本で鎌倉幕府が倒れ南北朝の動乱が広がると、海商や武士団などの勢力が自立的な活動を強め、朝鮮半島・中国沿海部で襲撃・略奪行為を働くようになった。彼らは倭寇(前期倭寇)とよばれ、高麗・元の沿岸住民や武装勢力も合流して、諸国の政府を苦しめた。

明が成立すると、洪武帝は倭寇を力で抑え込む方針をとり、沿海部の治安維持のために民間の海上貿易を禁止し(海禁)、対外関係を国家間の朝貢・冊封関係に限定するという、厳しい対外関係管理体制をしいた(海禁=朝貢体制)。これにより、明と貿易するには朝貢・冊封を受け入れなければならないようになったため、長い間朝貢を避けていた日本も、室町



↑2 15世紀のアジア交易

幕府の足利義満が朝貢貿易に踏み切った(勘合貿易)。

モンゴルの影響の強かった朝鮮半島でも、倭寇撃退に功績のあった李成桂(太祖)が1392年に高麗を倒して朝鮮を建て、明の冊封を受けた。朝鮮は漢陽(現ソウル)に都をおき、朱子学を導入して科挙を整備するなど明の制度にならった国家建設を進めた。15世紀前半の世宗のとき、表音文字の訓民正音(ハングル)が制定されたが、漢字・漢文の伝統は揺るがず、金属活字や木版印刷による漢籍の出版が盛んに行われた。

一方、明にとってもこれら諸外国の朝貢は、皇帝の権威を高めるうえでも海外物産の入手のうえでも不可欠だった。永楽帝が鄭和を派遣して各地で朝貢を勧誘したのも、海禁を維持しながら貿易を行うためであった。しかし、経費が増大して財政を圧迫したため、明の対外政策はその後消極化した。このように明の海禁=朝貢体制は特異なものだった。

海の王国と陸の王国

明の国際秩序とアジア海上貿易の復興は、琉球・マラッカなどの中継貿易拠点を繁栄させる一方で、東南アジア大陸部に強力な国家を成立させた。明への朝貢には、国ごとに間隔が定められるなど、制限が多かったが、15世紀には、アジア海域の各地で、朝貢貿易のしくみを利用する動きが広がった。琉球は、明の冊封を受けようえにほぼ無制限の朝貢貿易を許され、福建商人などのネットワークを利用しながら、東南アジア・日本などの商品を集めて明に朝貢し、手に入れた中国商品を各国に運んだ。併せて、東南アジアと朝鮮・日本などを結ぶ中継貿易も行った。一方、東南アジアでは15世紀に、マラッカ王国が急成長した。マラッカは、鄭和の船団の寄港地を提供するほか、国王みずから明に赴くことで、明の優遇を勝ちとり、マラッカ海峡を中心とするインド洋・東南ア

世界史の中の日本

室町時代の日朝関係

日本と朝鮮の間でも、貿易のための証明書を交付し、窓口を限定して交流する方式がとられた。室町幕府と朝鮮は対等の関係で、西日本の大名・商人は朝鮮に対し朝貢する形式で、対馬の宗氏を窓口として貿易を行った。人の交流は活発で、15世紀には、朝鮮半島南部の釜山に日本人居留地も設けられていた。

④ 李成桂と李氏朝鮮 朝鮮半島北部の出身の武将で、女真人を率いて台頭した。国号「朝鮮」は明の洪武帝によって命名されたもので、古朝鮮(→p.29)と区別して李氏朝鮮という。

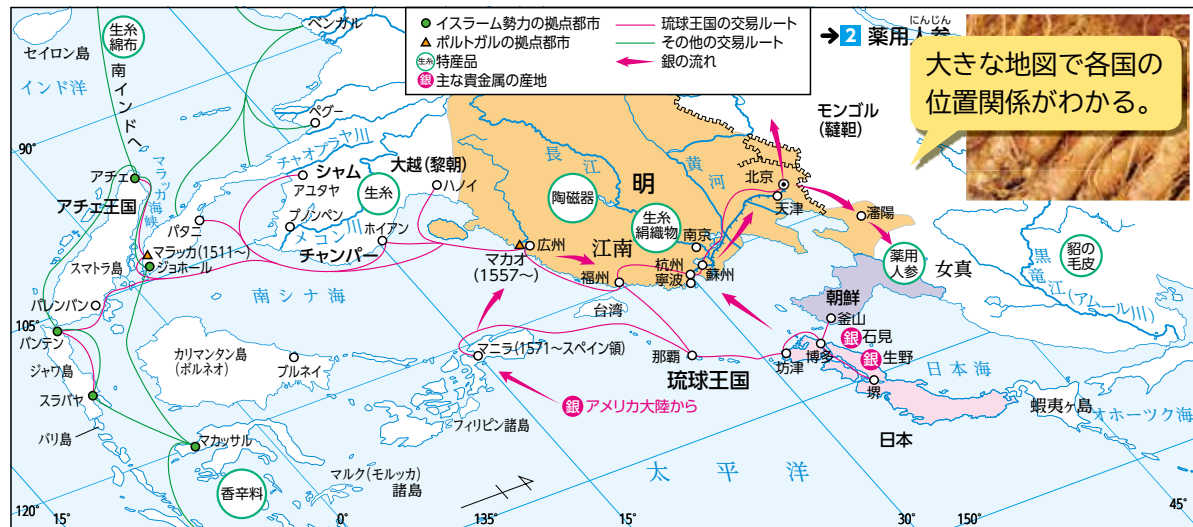
史「訓民正音」序文

国の語音は中国と異なり、漢字と相通じない。それゆえ民は言いたいことがあっても結局その意志を表現できない者が多い。予はこれを憐れみ、新たに28字を作った。人々が習熟しやすく日用に便利であるようにと願うのみである。

読み解き 世宗が訓民正音を制定した理由を説明しよう。また、なぜこの後も漢字・漢文の伝統

明が海禁=朝貢体制をしいた結果、琉球やマラッカ王国が中継貿易で繁栄したことがわかる。

問い 明初の対外政策の特徴とその背景、結果について説明しよう。



↑1 16世紀の東アジア交易 1530年代に日本銀、1570年代にメキシコ銀が流通するようになると、生糸・絹織物・陶磁器などの国際商品を買いつけるために、明に大量の銀が流れ込んでいった。明の富裕層の間では、毛皮や薬用人参などのぜいたく品が流行した。 **読み解き** 何が交易品として取り引きされていたのだろうか。

→3 進貢船が並ぶ那覇港

明は朝貢形式以外の貿易を認めなかったため、朝貢国である琉球王国は独占的に対明貿易を行うことができた。王城の首里城とその外港那覇は、明と東南アジア・日本・朝鮮半島を結ぶ交易センターとして繁栄した。
〔琉球交易港図屏風〕浦添市美術館蔵



① マラッカの貿易ネットワーク

マラッカは、マルク(モルッカ)諸島の香辛料、ジャワの胡椒など東南アジア全域の商品の集散地となり、マラッカ海峡周辺の胡椒など地元の輸出品もあった。このため西はマムルーク朝やオスマン帝国から東は中国・琉球までの商人が集まり、「マラッカの港では84種類もの言葉

明の対外政策が消極化したことで、マラッカ王国は西方とのつながりを深め、その結果、東南アジア諸島部にイスラームが広がったことがわかる。

部から姿を消してゆく。ただし現在でも、諸島部のイスラームには、土着の慣習(アダット)と並び、ヒンドゥー教の要素が混在している。

アジア海域の交易ネットワークと、明や琉球を結びつける役割を果たした。

明の対外政策が消極化した後は、代わりに西方への香辛料輸出を伸ばし、綿布をもたらすインドのムスリム商人などを通じて、イスラームを受け入れた。その結果、マラッカが支配する貿易ネットワークを通じて、諸島部各地にイスラームが広がり始めた。

一方、東南アジア大陸部では、明の軍事圧力に対抗しつつ、内陸から新しい強国が現れた。そこでは明の火器技術も利用された。大陸部北部で13～14世紀に成立したタイ人の諸国家のなかで、チャオプラヤ川デルタに進出したアユタヤ朝(シャム)が特に発展し、明への朝貢貿易や琉球との貿易を活発に行った。南下するタイ人に押されてカンボジアの勢力は後退し、15世紀にはアンコールの都を捨てて、メコン川流域に中心を移した。ビルマ人やタイ人を通じて、ラオス・カンボジアを含む広い範囲に上座仏教が広がり、ヒンドゥー教・大乘仏教は衰退した。一方ベトナム(大越)では、明の支配を撃退した黎朝が、朝鮮と同様に、明の制度や火器技術を取り入れて国家体制を強化し、南進政策をとってチャンパーに大打撃を与えた。大越も、明への朝貢など貿易を盛んに行った。

の成熟とヨーロッパの進出

世界史の中の日本 日本銀と「円」

古来、ユーラシアで国際通貨として通用してきたのは銀であった。銀は、小額で不便な銅銭や信用の維持が難しい紙幣と違って、額面が大きく価値が安定していたので、高額取引や貿易の決済に広く用いられた。東方では重さによって価値が決められて通用し、モンゴル時代にはユーラシア規模で流通した(→p.133)。

モンゴル帝国の解体後いったん下火になった銀の流通は、16世紀に再び拡大した。第一の波は、1530年代を画期とする日本銀の増産である。中心となったのは、現在、世界遺産にも登録されている石見銀山であり(→p.156)、朝鮮からの精錬技術の導入によって、銀の産出量が爆発的に増加した。17世紀初めには世界の銀の約3分の1を産出したといわれ、日本はアジア最大の産銀国となった。第二の波は、スペインのアメリカ植民地から産出されるメキシコ銀であり、1570年代以降、貿易の代価として東アジアにもたらされた。明に流れ込む銀の量は、17世紀初頭の時点で年間75～150トン程度と見積もられ、当時の世界の年間産銀量の20～40%を占めたとみられる。

メキシコ銀は円形の鑄造貨幣だったので、各地で「円」、または漢語で同じ発音の「元」とよばれた。現在、通貨単位として使われている日本の「円」、韓国の「ウォン(元)」、中国の「元」は、いずれも同じ語源に由来している。

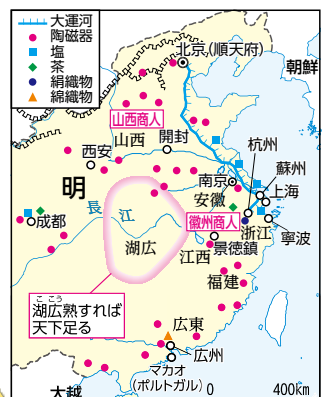
明後期の産業・商業の発展

産業の成長と国際貿易の隆盛を背景に、明の経済は16世紀に江南地方を中心にめざましく発展した。貿易を通じた銀の流入の激増によって、銀の使用が浸透した。

「14世紀の危機」からの復興が課題だった明代前半は農村の保護と現物調達の方策がとられ、人と財貨の移動が少ない時期だった。しかし、15世紀末ごろから世界の気候が温暖化に向かうと、明においても農業生産の向上と手工業・商業の発展がみられ、さらに「大航海時代」の国際的な商業の活発化と結びついて、経済が著しい伸びをみせた。

人口は16世紀には1億を超えたが、その約半分を占める江南地方が経済発展を牽引した。長江下流域の江南デルタの水田地帯はこのころほぼ開発し尽くされ、新品種の導入や技術改良で生産性が高められた。水田に向かない場所では綿花や桑(蚕の飼料)といった商品作物の栽培が広がり、生糸・絹織物・綿織物などの家内制手工業が発達した。代わって稲作の中心地は長江中流域の湖広(湖北・湖南)や江西に移り、商品作物の栽培や商品生産が盛んな江南地方との間で地域間分業が進んだ。一方、農業に限界のある地域では、それを補うため商業に特化する動きが現れた。内陸部出身の山西商人・徽州商人は塩の専売や軍需を担って巨大な富を築き、沿海部の福建の人々は海禁を破って海上交易に乗り出した。彼らは血縁・地縁で強固に結びついており、各地の都市に会館・公所をつくって同郷出身者・同業者などの活動拠点とした。

陶磁器と生糸は、代表的な世界商品として日本や西アジア、ヨーロッパにまで輸出された。アジア海域の貿易では、ヨーロッパ向けの東南アジア産香辛料の輸出と日本向けの中国産生糸の輸出が特に盛んだったが、ヨーロッパや日本には中国に対してめぼしい商品がなかったため、銀が支払いに用いられた。16世紀に日本銀・メキシコ銀の産出・流通が急増すると、貿易を通して大量の銀が明に流れ込んだ。明は当初紙幣を流通させようとしたが失敗しており、海外から多量の銀が流入すると、銀の使用が一般化した。納税でも銀で納める一条鞭法が広まった。



15世紀末の国内経済の回復と、国際商業の活発化の結果として、明は著しく経済発展したことがわかる。



5 赤絵 一度焼いた磁器に多

16世紀に入ると、中国から世界各地に陶磁器や生糸が輸出された結果、その対価として明に大量の銀が流入し、税制が変化したことがわかる。

問い 明から輸出された商品を、輸出先の国とともに抜き出そう。

文化から見る 当時の社会

絵巻・挿絵から読み解く明代の社会

明代は、経済の発展によって社会全体で生活水準が向上し、都市の富裕層だけでなく庶民も文化を享受するようになった。ここでは特に絵巻や本の挿絵に焦点を当て、明代の社会の特徴を見てみよう。

《倭寇図巻》東京大学史料編纂所蔵



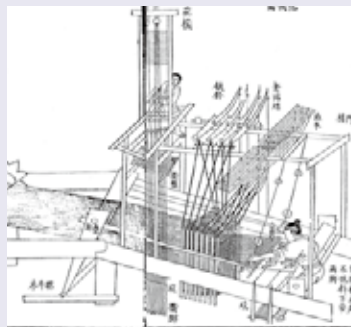
↑1 『倭寇図巻』 1558年の明軍と倭寇の戦いを描いた絵巻。撃退にあつた明の高官が功績を顕彰するためにつくられたもので、合戦の情景が高価な絹布に豊かな色彩で描かれている。江南の都市では、ニュース的な役割をもつ豪華な絵巻や名画の複製品が盛んにつくられ、富裕層の間で流行した。



→3 『天工開物』 花模様を織り出している。挿絵と説明を組み合わせる書物が流行し、さまざまな分野の技術書が木版印刷で商業出版された。
←4 『西遊記』 娯楽として本が読まれるようになり、さまざまなジャンルの作品が出版された。口語で書かれ挿絵の入った小説(読み物)が人気を博し、士大夫から庶民まで多くの読者を得た。

編纂事業	『永樂大典』 古今の文献の集成
実用書	『本草綱目』 李時珍 薬学書
	『天工開物』 宋应星 産業技術書
	『農政全書』 徐光啓 農業書
庶民文学	『崇禎曆書』 徐光啓など イエズス会士の協力を得た曆法書
	『西遊記』 女装の旅が題材の読み物
	『金瓶梅』 社会風俗を描く読み物
	『水滸伝』 宋代の豪傑を描く読み物
	『三国志演義』 歴史をもとにした読み物→四大奇書

↑2 明代の主な書物



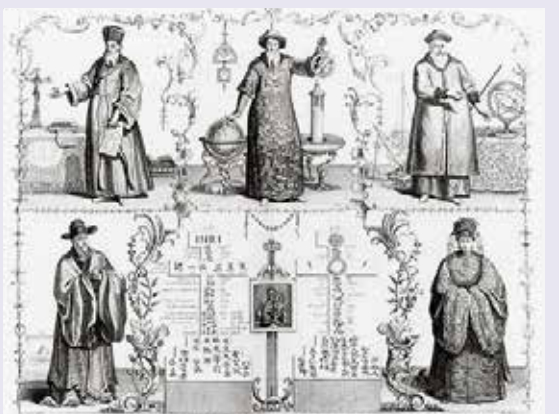
読み解き 図1はどのような人が作成させたのだろうか。図3と図4はどのような人々が読んでいたのだろうか。これら資料から読み取った明代の社会の特徴はどのようなものか、本文も踏まえて考えよう。

イエズス会宣教師が明に伝えた世界

明代には、ヨーロッパのイエズス会宣教師が訪れ、キリスト教の布教のため、西洋の科学知識を広めることを利用した。その知識が明の人々に与えた影響を、資料から読み取ろう。

→5 イエズス会宣教師 16世紀半ばにフランシスコ・ザビエルが布教のために日本・明を訪れた。明末に来訪したマテオ・リッチは、世界地図の『坤輿万国全図』を作製し、またエウクレイデス(→p.71)の幾何学を徐光啓とともに漢訳して『幾何原本』として紹介した。

↓6 『坤輿万国全図』 世界図の伝来は、中国がアジアの一国にすぎないこと、地球が球形であることを教え、衝撃を与えた。一方で、中国に合わせてアジアを中央に描いている。〈宮城県図書館蔵〉



読み解き 図5のなかで、ヨーロッパから中国に伝来したものは何だろうか。また図6では、ヨーロッパのどのような考えが伝わっているといえるだろうか。p.71なども踏まえて考えよう。

明経済の活況の結果、大衆芸能・大衆小説が誕生し、思想面では実践が重視されて多数の実用書が著されたことがわかる。

明学も、人には誰でもあるべき道徳(理)が生来備わっているとする点では共通している。朱子学では学問や修養に励むことでそれに到達できるとするが、陽明学は、人には本来、理が備わっているのだから心のままに実践すること(知行合一)を説いた。

2 倭寇 明の海禁政策を破って私貿易を行う武装海商たちで、後期倭寇は、中国東南沿海部の人々が数多く加わった。本拠地は福建・浙江南部から日本の九州西部にかけて広がっていた。

明後期の社会と文化

経済が活況を呈した明後期、江南地方などの都市部では郷紳ら富裕層の間で華美な文化が栄えた。出版や芸能は民衆にも浸透し、ヨーロッパの知識も伝来した。

宋代以降の中国は、人々が能力や経済力に応じて科挙受験・商業・土地経営や出稼ぎ、小作などを選択する流動的な社会であった。科挙によって官僚の資格を得た名士は明代には郷紳とよばれ、地域社会で勢威をもった。郷紳は、経済的には地主であることが一般的だったが、科挙合格は難しいうえに特権は一代限りだったため、世襲的な領主や地主貴族は生まれず、有力者の顔触れは常に入れ替わった。農業の中心は、小作をしながら副業として手工業を営む小農民の家族経営であり、一か所ですべての労働力や土地を支配する地主の大規模経営は一般的ではなかった。

16世紀から17世紀にかけて、江南地方の都市の富裕層を中心に、華美な文化が栄えた。木版印刷による出版や大衆芸能が盛んになり、「四大奇書」などの小説が人気を博した。民衆の間でも茶の飲用や陶磁器の使用が広まり、衣類も麻から保温性に優れる綿に変わった。思想面では、科挙試験のための学問となって形式化した朱子学への批判の動きが現れ、王守仁(王陽明)が説いた陽明学は、個人の心情を重んじ実践を重視して

人々の心をとらえた。また、科学技術への関心が高まり、農学・産業技術など多くの分野で実用書が著された。イエズス会をはじめとするキリスト教宣教師が来航し、ヨーロッパの天文学・暦学・地理学・数学・砲術などの知識や技術をもたらしたことも、科学技術への関心を刺激した。

16~17世紀の貿易をめぐる動きと政治・社会変動

国際貿易が活発化すると、さまざまな勢力が貿易の利益を求めて衝突した。海禁=朝貢体制が崩れて互市貿易が開かれ、軍事と商業が結びついた新興勢力が成長した。

16世紀に国際貿易が盛になると、明の周縁部では、規制を破って貿易の利益を得ようとする動きが活発化した。北方からはモンゴルのアルタンが侵入を繰り返し、南方では海禁を破って海上での私貿易や海賊活動が再び激化し(後期倭寇)、南北からの圧力は1550年代に頂点に達した。これらは単なる略奪行動ではなく、明の海禁=朝貢体制に対抗して貿易を求める南北共通の動きであり、国際貿易の主導権をめぐる抗争であった。対応を迫られた明は、1570年前後について政策を転換し、南方では海禁を緩めて日本以外との民間貿易(互市)を認め、北方でもアルタンと講和して国境貿易に応じた。

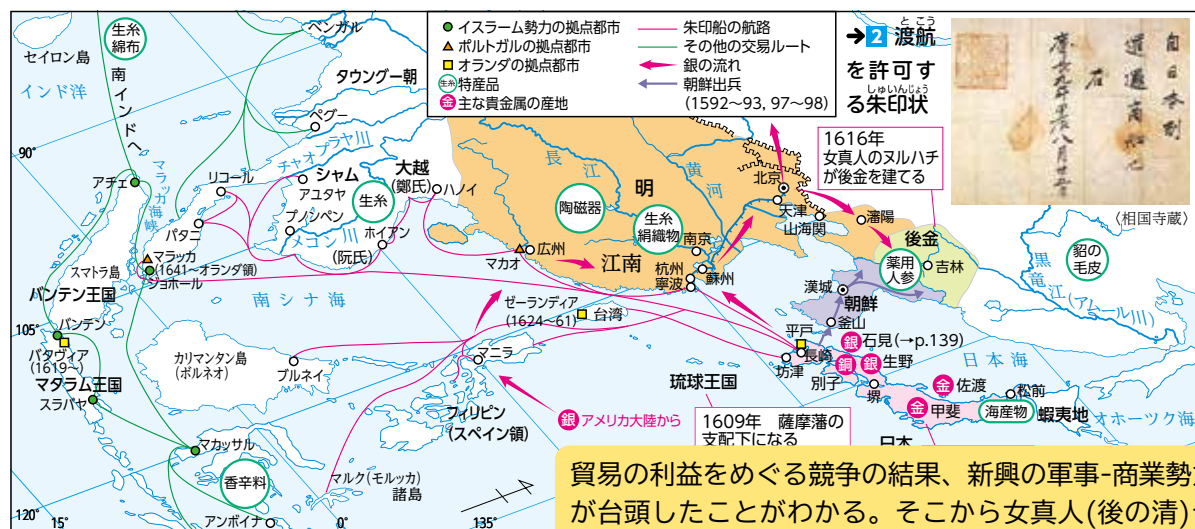
このような貿易の活発化によって政府の統制が崩れると、利益を求め



16世紀に国際商業が盛んになった結果、明の周縁部で、海禁=朝貢体制を破って貿易の利益を得ようとする動きが活発化したことがわかる(北虜南倭)。

16世紀40年代の明の南北の動乱は、海禁=朝貢体制に対して貿易の開放を求める動きだった。貿易で流入した銀は、税として集められて都に送られた。

対応を迫られた明は1570年前後に政策を転換したことがわかる。



貿易の利益をめぐる競争の結果、新興の軍事-商業勢力が台頭したことがわかる。そこから女真人(後の清)や織田信長・豊臣秀吉が登場してきたことがわかる。

世界史の中の日本

東南アジアの日本人

朱印船貿易の時代には、マニラ(フィリピン)・ホイアン(ベトナム)・アユタヤ(シャム)などの日本町が栄え、商人だけでなく浪人や日本を追われたカトリック教徒が活躍した。アユタヤ日本町の長であった山田長政は、貿易のかたわら日本人部隊を率いて戦い、王を助けて活躍したが、政争で殺された。

1 **朝鮮出兵** 日本では文禄・慶長の役、朝鮮では壬辰・丁酉の倭乱という。日本軍は当初快進撃を続けたが、李舜臣の朝鮮水軍や明の援軍の反撃で苦戦し、秀吉の死によって撤兵した。

2 **朱印船** 中国・ベトナム・インド産の生糸などを買い入れ、銀・銅を輸出した。貿易拠点の港市には居留地ができ、東南アジアでは日本町が、九州では唐人町が栄えた。

問い 豊臣秀吉と徳川家康の対外政策について、それぞれ要約しよう。

17世紀初めの豊臣・徳川政権が勢力を確立し、海上では氏一族とポルトガル・オランダなどが貿易を競った。明と直接貿易できない日本は、朱印船を派遣して中継貿易を行った。

競争も激化し、そのなかから軍事と商業が結びついた強力な新興勢力が台頭した。北方では、アルタン王家に加えて東北の女真人の間でも統合が進み、また東シナ海でも海上勢力が再編されていった。日本では、強固な家臣団を編制し領域支配を広げた戦国大名が登場し、織田信長・豊臣秀吉が鉄砲をとり入れて貿易港・銀山を掌握し全国制覇を進めた。

統一を果たした秀吉は、倭寇を禁止する一方で、海外への直接進出を図って朝鮮出兵を行った。このため明との関係が決定的に悪化し、公式貿易の再開は困難になった。豊臣氏に代わって政権を握った徳川家康は、認可を与えた朱印船を台湾・マカオや東南アジアに渡航させて現地

のような変動に対し、明では張居正が政治の立て直しに努め、検地と一条鞭法の全国的施行や官僚の統制強化を進めた。しかし、中央集権的な改革は地方の郷紳層の反発を買い、とりわけ政治活動が盛んだった江南は、政府批判の中心地となった。地方から税として吸い上げられた銀は官僚・軍隊の維持や北方防衛に投じられたため、貿易の活況や都市の繁栄にもかかわらず、農村の窮乏が進んだ。1620年代以降、地球規模の寒冷化で災害が多発し、農村は疲弊したが、政争のため有効な手は打たれず、暴動・反乱が続発した。1644年、その一つである李自成の乱によって北京が攻略され、明は滅亡した。

の成熟とヨーロッパの進出



3 整列して乾隆帝の謁見を受ける八旗 八旗は八つの軍団からなる軍事・行政組織で、各軍団は満洲・蒙古・漢軍の3軍で構成される。色分けした旗印で区別したので八旗とよばれ、すべての家臣・領民はいずれかの旗に所属して兵役・労役・納税などの義務を負った。

清の形成とチベット仏教世界

明との貿易による利益で台頭した女真(満洲)人の後金は清へ発展し、明に代わって中国を支配するとともに、モンゴルを抑えてチベット仏教圏の盟主となった。

16世紀、明の富裕層の間で中国東北の特産品である毛皮や薬用人参の需要が高まると、それまで明の間接支配下にあった女真人の間で、貿易の利益をめぐる競争が激化した。女真の統合に成功したヌルハチ(太祖)は、八旗を基盤とした強固な支配体制を打ち立て、1616年に後金を建てて明に挑戦した。跡を継いだホンタイジ(太宗)は内モンゴルに進出し、北元のハーン家を従えた。これを機に、彼は民族名を女真から満洲に改め、1636年に国号を大清(清)と定めて皇帝を称した。ここにチンギス・クビライ以来のモンゴル大ハーン(高祖)の地位は満洲人に引き継がれることになった。1644年に李自成の乱で明が倒れると、清は長城を越えて北京に遷都し、李自成や明の残存勢力を次々に平定した。こうして清皇帝は中華皇帝の地位も受け継いだ。

このころ中央ユーラシア東方では、チベット仏教が急速に拡大した。16世紀後半にアルタンが帰依したことをきっかけに、モンゴル人が広く信奉するようになり、次いで西方のオイラト部や東北の満洲人にも広がった。このため、チベット仏教の指導者であるダライ=ラマの宗教的権威は、パミール高原以東の内陸地域の大半を覆うことになった。パミール高原以西ではイスラームが優勢だったため、17世紀以降、中央ユーラシアは東のチベット仏教と西のイスラームという二つの宗教文化圏に分かれることとなった。ダライ=ラマ政権は軍勢力や寄進の提供を受けるために世俗勢力と提携したことから、モンゴル・オイラト諸部族や清はダライ=ラマの提携相手になろうとして競い合った。17世紀後半、オイラト部の一部族ジュンガルが勢力を広げると、清はジュンガルとチベット仏教の保護者の座を争うこととなった。



4 **ポタラ宮** チベットのラサにある歴代ダライ=ラマの宮殿で、名前は観音菩薩の聖地「補陀落」に由来する。17世紀にダライ=ラマ5世が造営した。

3 **満洲(満州)** マンジュという語の発音を写したもので、それまでの女真に代わって民族名とされた。後に彼らの居住地である中国東北部を指す地域名としても用いられるようになった。

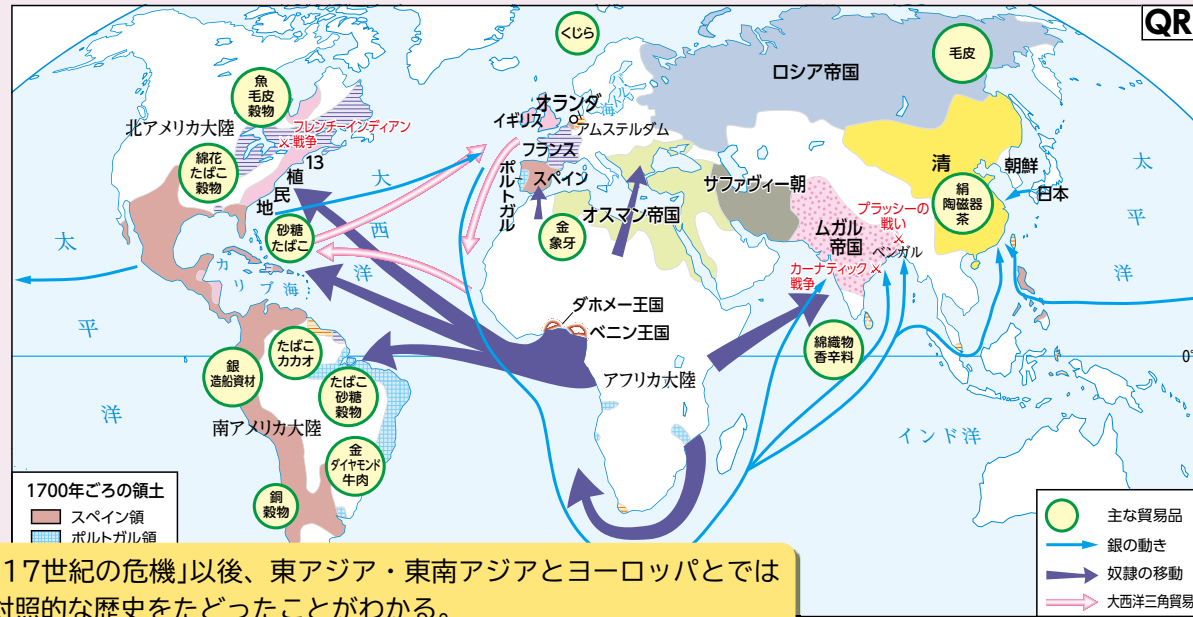
4 **パミール高原以東のイスラーム** 東トルキスタンは16世紀までにはほぼイスラーム化したが、17世紀以降、チベット仏教勢力のジュンガル、次いで清に支配された中国内地でも、清皇帝がモンゴルの大ハーンと中華皇帝の地位を受け継いだことがわかり、清が広大な版図をもつに至った理由の一端がわかる。

チベット仏教(→p.36)では、高德の僧は菩薩の化身とされ(化身僧)、死去すると、生まれ変わりとして養育して継承させる転生相統制度がとられた。多数いる化身僧の頂点が最大宗派のゲルク派のダライ=ラマであり、17世紀にはチベット仏教の最高指導者となった。

1節のまとめ
明と世界各地の結びつきにはどのような特徴があるか、あなたの考えを説明しよう。

結びつく世界 17~18世紀 「17世紀の危機」とその後の諸地域の発展

発展



「17世紀の危機」以後、東アジア・東南アジアとヨーロッパとは対照的な歴史をたどったことがわかる。

↑ 17~18世紀の世界

結びつく世界 17~18世紀 「17世紀の危機」とその後の諸地域の発展

●「17世紀の危機」とアジア・オランダ

17世紀半ばから世界の多くの地域で、経済不振や人口の停滞、物価の下落が明らかになった。「大航海時代」に発展した遠距離貿易も一時的に停滞した。地球全体の寒冷化も影響したといわれるこの現象は「17世紀の危機」とよばれる。

東アジアや東南アジア大陸部では、「17世紀の危機」の結果、ヨーロッパとの結びつきが弱まった。しかし、多くの国で外交・貿易と出入国の統制や、通貨管理などの政策が強化されたことにより、社会は安定に向かった。日本の村と家や、中国の一族による相互扶助、それに中国や東南アジア大陸部での大規模な移民が、アジア域内のネットワークを支えたことも、社会変動のショックを和らげた。

一方、ヨーロッパでは、対外的な拡大が止まったことで、有力国間で互いに貿易の利益を奪い合う抗争が生じた。そのなかでオランダは、優れた造船技術を生かしてバルト海貿易を支配した。バルト海に面する東ヨーロッパからは、穀物や造船資材を安価に入手できたため、オランダの造船業、海運業の優位はますます強固になった。それを基盤として蓄積した資金によって銀行などの金融制度も整った。アムステルダムは国際商業・金融の中心として情報の集積地となり、オランダは繁栄を極めて、ヨーロッパの最富裕国となった。

●イギリス・フランスの覇権争いと大西洋三角貿易

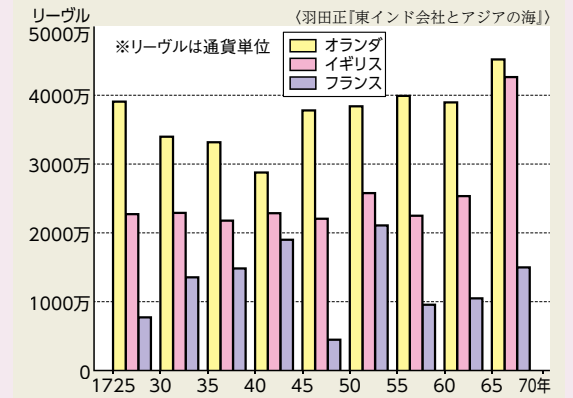
しかし賃金や生活水準が上昇すると、オランダの製造業はしだいに競争力を失い、特に毛織物工業などではイギリスに追いつかれた。オランダの国力が衰えると、替わってイギリスとフランスが勢力を伸ばし、植民地と国際貿易の支配権をめぐる17世紀末から1世紀以上にわたる抗争を繰り広げた(第2次英仏百年戦争)。特にイギリスは大西洋三角貿易を通じて、アメリカ大陸とカリブ海の開発を進め、大きな利益を得た。

奴隷貿易は、以前から西アフリカに進出していたポルトガル人が盛んに行っていたが、イギリスもまた、西アフリカで奴隷を購入し、カリブ海に渡って現地の生産物と奴隷とを交換して、元の港に帰った。南北アメリカ大陸やカリブ海では、ヨーロッパから移住した白人が先住民や奴隷を使って、プランテーションや鉱山を経営した。ダホメー王国のように、アフリカ国家が武器を購入するために奴隷の輸出に関与することもあった。しかし長期的には、奴隷貿易はアフリカから重要な労働力を奪い、アフリカの経済発展の可能性を大きく損ねることとなった。

イギリス・フランスの抗争はヨーロッパにおける紛争と連動しつつ、大規模な植民地戦争を繰り返し引き起こした。そのクライマックスは七年戦争(1756~63年)であった。この戦争でイギリスは、



↑ 18世紀の広州 清朝下でのヨーロッパ商船の貿易港は広州に限定されていたため、広州の港は多くのヨーロッパ船でにぎわった(→p.144)。ヨーロッパ諸国は、東アジアの交易の枠組みのなかで取り引きを行っていた。



↑ 各国の東インド会社のヨーロッパにおける販売額

垂直的な分業と低開発

16世紀から不平等な分業体制が成立したが、その体制の下層に位置付けられた地域では、単一の食料や原材料を、強制的な労働によって生産させられた。ヨーロッパでカフェやコーヒーハウスが流行し、砂糖の人気が高まると、カリブ海の島々では原生林を切り開いて、さとうきびプランテーションが広がった。労働力として、アフリカから奴隷が大量に輸入され、先住民のインディオは消滅し、黒人奴隷が住民の大半を占めるようになった。このように、格差を生み出す分業体制に組み込まれることで、社会から豊かさが奪われていくことを低開発とよぶ。

→ 4 プランテーションで覆われたバルバドス島の地図



日本・中国と、イギリスなどヨーロッパとは、経済発展の型が資源消費や労働の面で対照的だったことがわかる。

北米とインドという東西の二大植民地でフランスに対する優越を確かなものにして、重商主義帝国を完成させた。一方、敗れたフランスでは財政難が深刻化し、フランス革命の遠因となった。

七年戦争に至る長期の抗争は、イギリス・フランスだけでなく、戦争に関わった全ての国の財政を圧迫した。そのなかで財政革命を成し遂げたイギリスは戦費の調達で優位に立っただけではなく、豊富な資金力によって、その後の産業革命(工業化)も先行することとなった。

●ヨーロッパの再拡大 アジアの発展と行き詰まり

18世紀半ばの七年戦争を画期として、ヨーロッパは再び非ヨーロッパ地域への拡大を始めた。南アジア(インド)・東南アジア諸島部・オスマン帝国・サファヴィー朝・ロシアなどの地域は、それぞれに固有の文明的背景の下で発展を遂げていたが、ヨーロッパ人との関係が深まるとともに、国際分業体制に組み込まれ、既存の産業が破壊されて経済構造をゆがめられたり、政治的な支配を受けたりした。他方でヨーロッパの側でもこうした文明的他者との接

触を通じて「文明としてのヨーロッパ」を強く意識するようになった。

一方、東アジアや東南アジア大陸部では、農業や手工業の発展、それに中国人(華僑)のネットワークや日本の江戸時代の市場経済など、多くの面で独自の発展がみられた。特に、日本・中国などでは先進地域において、多くの安価な労働力を用いる一方で、資源は節約しながら、生産性を伸ばし富を蓄積することに成功し、それが19世紀末から20世紀後半の驚異的な経済成長につながった。イギリスで始まった、資源を大量消費しながら労働力を節約する産業革命(Industrial Revolution)とは対照的なこの発展は、勤勉革命(Industrious Revolution)ともよばれる。ただし、人口増加を上回る生産性の上昇が起こらず、生産量は増えたが富が蓄積しない地域も出現した。格差が広がれば下層の人々が生きていくのは難しくなるため、貧しいなかで平等を重んじる「貧困の共有」が進んだ。それは20世紀の中国・北朝鮮やベトナムで社会主義が広がる背景となった。

↑ p.155 p.211

時代の 17世紀は気候変動などにより、世界の経済活動は一時的に停滞した。18世紀になると再び 特徴 活性化し、繁栄する地域が生じた一方で、ヨーロッパの植民地となる地域も広がっていった。

1章

環大西洋革命~工業文明と国民国家の誕生

章の見通し 大西洋の沿岸で起こった複数の「革命」にはどのような関係があっただろうか。



↑1 中世の機織りと糸つむぎ 手前右と中央の女性が羊毛をくしけずり、石臼の女性は糸をつむいでいる。

↑2 紡績工場の内部 糸をつむぐ紡績工場で労働者が働いている。賃金の安い女性や子どもが数多く雇われた。工場には窓も少なく、労働環境は悪かったため、「暗く、みじめな工場」などと批判されることもあった。また労働時間も長かった。

読み解き 図1と図2の共通点と相違点を挙げよう。

1節 世界で最初の工業化

節の課題 イギリスの産業革命はどのように展開し、社会はどう変化していっただろうか。

イギリスから始まる産業革命

18世紀末のイギリスでは、農業社会から工業社会への急激な移行がみられた。産業革命(工業化)の動きは、アジアの物産であった綿織物の生産から始まった。

イギリスの産業革命は、マンチェスターを中心とするランカシャー地方の綿工業の技術革新から始まった。綿織物は毛織物に比べて、洗濯が容易で清潔なうえ軽く、鮮やかに染めることが可能で、17世紀以降、東インド会社によりインドから大量に輸入され、爆発的な人気を得ていた。

この人気を背景に、綿織物の国産化が図られた。すでに18世紀初め

には、国内で麻などに綿を混ぜた織物が生産され始めていたが、毛織物工業のために発明された飛び梭が綿工業に転用されると、織機や紡績機の改良が相次いだ。18世紀後半には、ほぼ現代の紡績機の原型が完成した。織布の工程でも、蒸気機関を利用した力織機が発明されたことで、飛躍的に生産力が高まった。その一方で手織工もまだ多数存在した。

こうして18世紀後半以降のイギリスでは、機械と新しい動力が導入され、大規模な工場制度が普及し、生産力が上昇した。生産の中心が農業から工業に移り、各地に商工業都市が生まれた。また、工場を経営する産業資本家たちが台頭し、工場労働者が多くなった。このような「農業社会」から「工業社会」への移行は産業革命(工業化)とよばれる。

イギリス綿織物工業では、原料の綿花は、初めカリブ海から次いでア

綿織物が毛織物に比べて人気があったため、産業革命は綿織物の輸入代替工業化(国産化)から始まったことがわかる。

する織布部門の機械化は遅れた。そのため多数の手織工が必要になった。彼らは、後に労働運動の中心にもなった。

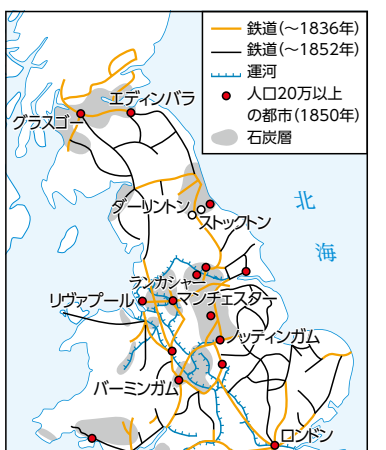
② 第2次囲い込み(農業革命) 16世紀の囲い込み(→p.174)が、耕地を囲い込んで、牧場化を目指したのとは違って、17世紀以降の囲い込みは、改良された農法(ノーフォーク農法)を採用して穀物栽培の効率を上げることを目標にした。これを第2次囲い込み(農業革命)という。農民の多くは賃金労働による農業労働者にならざるをえなかった。囲い込みにより共有地もなくなったため、土地をもたない農民は家畜の放牧や燃料を得ることもできなくなった。

(British Economic Growth 1688-1959)

1801	農業・漁業 35.9%	鉱工業 29.7	商業 11.2	家内奉公 11.5	その他 11.7
1821	28.4	38.4	12.1	12.7	8.4
1841	22.2	40.5	14.2	14.5	8.6
1861年	18.7	43.6	16.6	14.3	6.8

↑3 イギリスの職業構成

→4 鉄道の普及 蒸気機関車はトレヴィシックによって発明されていたが、実用的なものではなかった。1825年にストックトン・アンド・ダーリントン鉄道のためにステイヴンソンが製作したロコモーション号によって実用化に向かった。1830年に開通したリヴァプール〜マンチェスター間の鉄道が、最初の本格的な営業運転とされている。



産業革命は大西洋三角貿易と関連しており、国内的な要因だけではなく、世界的な分業体制にも起因する動きであったことがわかる。

5 メリカ南部の奴隷制プランテーションからもたらされた。やがて世界最大の綿織物生産地であったインドも、織物生産を抑制され、綿花の供給地となった。綿織物は、アフリカへ輸出して奴隷と交換もされたため、初期の綿織物業は、綿花の入手と製品を売る市場の両面

鉄・石炭の産業革命と交通革命

5 繊維産業などの軽工業から始まった産業革命は、鉄鋼業など重工業にも広がり、交通手段の改善なども進んだ。また産業革命は世界に広がっていった。

産業革命の初期に発達したのは、綿織物や陶器のような日用品をつくる軽工業であった。しかし、社会的な影響がより大きかったのは、鉄鋼業などの重工業や交通手段の革命であった。

18世紀初めに、ダービーによって石炭を加工したコークスを燃料に用いた製鉄法が開発され、木炭から石炭へと工業用燃料が転換した。さらに強度の強い鋼鉄もコークスによって製造されるようになると、鉄の生産量は急速に増え、鉄製の機械が普及していった。鉄や石炭の運搬のために、交通手段の改善が不可欠となり、有料道路や運河が建設された。

また炭坑の排水用に使用されていた蒸気機関が、ワットによって改良され、多方面に利用された。なかでも、ステイヴンソンが1825年に実用化した蒸気機関車は急速に普及し、1850年前後には、ほぼ全国的な鉄道網が完成した(交通革命)。交通革命は、人と物の動きを活発にし、新たな都市を生み出した。また、鉄道は最も重要な輸出品として、世界中に広がった。1807年、アメリカ人フルトンが実用化した蒸気船は、燃料の石炭補給が遠隔地では困難なこともあって、急速には普及しなかった。その一方で、帆船の改良は進んだ。

イギリスに起こった産業革命は、1830年代にはフランスやベルギーに、次いでドイツ西部や南北戦争後のアメリカにも波及した。19世紀

↑5 産業革命期の主な発明

1709	ダービー	コークス製鉄法を発明
12	ニューコメン	蒸気機関を実用化
33	ジョン=ケイ	飛び梭を発明
64	ハーグリーブス	ジェニー紡績機を発明
65	ワット	蒸気機関の改良(〜69)
68	アーグライト	水力紡績機を発明
79	クロムプトン	ミュール紡績機を発明
85	カートライト	力織機を発明
93	ホイットニー(米)	綿織機を発明
1807	フルトン(米)	蒸気船実用化
14	ステイヴンソン	蒸気機関車試運転
25	ステイヴンソン	蒸気機関車実用化
30	リヴァプール〜マンチェスター間	鉄道開通

③ 木炭から石炭へ イギリスでは16世紀にもかなりの鉄がつくられたが、燃料は木炭だった。木炭の火力は弱いため、膨大な量が必要となり、イギリスの森は次々と伐採されて、歴史上「森林の枯渇」として知られる環境破壊が起こった。一方、石炭をそのまま燃料にしても良質の鉄をつくることはできなかった。そこでダービーは、石炭を加工した火力の強いコークスを燃料とし、強度が増した鉄をつくることのできる製鉄法を発明した。

問い イギリスの産業革命の展開と国外への波及について要約しよう。



産業革命の結果、出来高払いから時間給へ、労働のあり方が大きく転換したことがわかる。

工業化で変わる社会

毎日決まった時刻に出勤し、決まった時間働く、といった今日では当たり前の労働のあり方は、産業革命によって生み出された。中世には、時間は神のものと考えられ、利子のように時間が生み出す利益は不当なものと考えられていた。職人は、注文品を納品することで報酬を受け、農民の働く時間と内容も、季節や天候によって大きく左右されていた。

こうした労働のあり方は、産業革命によって大きく変化した。工場で大勢の労働者が共同して働くようになったため、時間や規則に縛られ、報酬も職人のような出来高ではなく、働いた時間に応じた「時間給」となったのである。

産業革命以前、職人の間では、週末は酒を飲み、二日酔いで月曜は働かないといったことが各地でみられたが、そういった慣習は、産業革命の進展とともにしだいに消えていった。アメリカのフランクリンはこうした新しい価値観を好ましいものと評価して「時は金なり」と表現した。

Key Word 資本・資本家

資本とは、利潤追求のための生産に用いる財とサービスのこと。資本家は、その資本を所有する人のこと。資本には、商業資本・産業資本・金融資本など、さまざまな形態がある(→p.243)。

① 産業革命の資本 綿織物工業のような軽工業の創業には、大きな資金を必要としなかったため、数人の共同出資で起業することができた。

② 工業社会への批判 経営者のなかには、ロバート・オーウェンのように、労働者の生活の改善を図るために、社会主義による理想社会を構想し、その考えを実行する人も現れた。彼らは、後にマルクスによって「空想的社会主義者」とよばれた(→p.216)。文学でも、工業化社会や進歩の思想に批判的な雰囲気が強くなり、イギリスのワーズワースやブレイクなど、ロマン主義(→p.215)の文学者が、工業化以前の社会への憧れを表明した。

1節のまとめ

産業革命は現代にどのような影響を与えているだろうか、あなたの考えを説明してみよう。

末には、日本やロシア、イタリアなどでも工業化が起こり、人々の生活や社会の構造を大きく変化させた。他方、産業革命が始まったこれらの国は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカを原料や食料の供給源としたため、国々の間で格差も広がった。

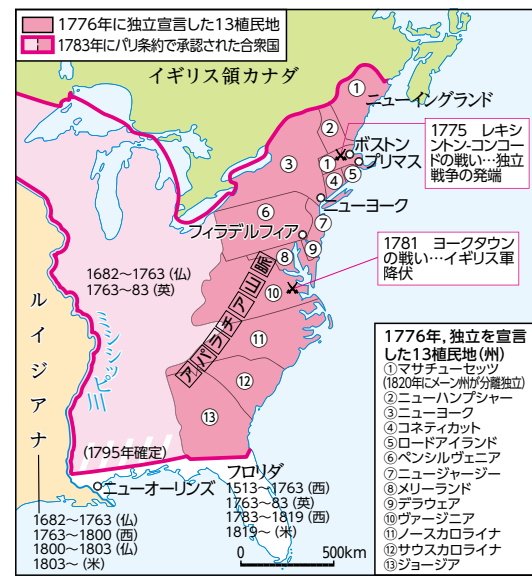
資本主義の強化

産業革命は、工場経営者などの新しい資本家を生み、社会に資本家と労働者の対立が生じた。

産業革命によって、生産の能率が急速に高まり、工場を経営する産業資本家の階級が台頭した。他方、その工場などで賃金をもらって働く金労働者の階級も明確に形づくられた。この二つの階級によって、主な生産活動が展開する制度を産業資本主義という。

産業革命によって、工場制機械工業による大量生産が定着すると、熟練技術の意味が薄れ、多くの職人が職を失った。彼らは、「困り込み」のために自立した農民として生活を続けられなくなった人々と同じように、賃金労働者として生きていくほかなくなった。また、機械や動力が使われるようになった工場や炭坑では、安い賃金で多くの女性や子どもが雇われた。こうした状況から、工場法がしばしば出されて、労働時間の短縮、児童や女性の労働条件の改善が図られた。

労働者は、団結して労働組合を結成し、労働条件の改善を求めた。不安を抱いたイギリス政府は、1799年に団結(結社)禁止法を制定してこれを弾圧した。機械化で職を失った職人たちは、古くからの「打ちこわし」の習慣に従って、ラダイト(機械打ちこわし)運動を展開したが、これは1810年代を頂点として衰えた。しかし、こうした運動のなかから、資本主義そのものを批判し、理想の社会の実現を目指す社会主義思想も生まれた。



② ボストン茶会事件 先住民に変装した入植者たちの一団が、茶法に反対して、東インド会社の船を襲い、積み荷の茶を投棄した。この事件で、本国との決裂は決定的となった。

① 13植民地とその独立

2節

アメリカの独立

なぜ、13植民地はイギリスからの独立を求めたのだろうか。

植民地の経済状態とイギリスへの不満

北アメリカのイギリス領植民地では、七年戦争後の植民地への課税をきっかけに反英感情が高まった。

イギリス領北アメリカに成立した13植民地では、南北で経済的な違いがあった。ヴァージニアなど南部の植民地は、たばこなどを奴隷制プランテーションで生産し、イギリスに輸出していた。これらの地域は、イギリスとの結びつきが強かった。

一方、世界市場に売り出す商品作物がなく、主に自営農民によって構成されていた北部のニューイングランドでは、地域の自立性が高まっていた。したがってこの地域では、航海法などの本国の重商主義政策によって植民地の商工業が抑圧され、本国からの製品や茶などのアジアの商品が大量にもち込まれることに不満が強かった。

ところが、七年戦争で大きな財政赤字を背負った本国政府は、戦後の軍事費を植民地に負担させようとして、1765年、植民地での商取引や新聞などに課税する印紙法を制定した。植民地側は、「代表なくして課税なし」を合い言葉として抵抗し、この法を撤回させた。しかし本国は、1767年から、再び植民地の茶などに課税する法律を強制した。植民地側は、これにもイギリス商品の不買運動をもって対抗した。

本国政府はまた、財政難にあった東インド会社に、植民地への茶輸出の独占権を与えた(茶法)。これに憤慨した植民地の人々は、東インド会社の船を襲撃して積み荷の茶を投棄した(ボストン茶会事件)。1774年には、フィラデルフィアで第1回大陸会議が開かれ、本国との通商断絶が決議された。

① 北米13植民地 イギリス領北米植民地には、総督と植民地議会の議員を住民が選挙する自治植民地のほか、領主植民地や王領植民地など、さまざまな政治形態があった。イギリスから移住した人々のなかには、自由を求めたピューリタン(→p.180)もいたが、多くは、よりよい生活を求めた貧しい人々であった。

13植民地のなかでも北部は自立性が高く、本国の重商主義政策への不満が強かったことが、独立の背景となったことがわかる。



③ イギリスが課税に使用した収入印紙 イギリスは北米植民地で作られた公文書や印刷物に、このような印を施した紙を貼ることを義務付けて、課税した。

問い 13植民地の反発を誘引したイギリスの植民地政策を抜き出そう。



史料】アメリカ独立宣言
(Declaration of Independence)

われわれは、次のような真理をごく当たり前のことだと考えている。つまり、すべての人間は神によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利をあたえられており、その権利のなかには生命、自由、幸福の追求が含まれている。またこれらの権利を確保するために、人びとの間に政府を作り、その政府には被治者の合意の下で正当な権力が授けられる。そして、いかなる政府といえどもその目的を踏みにじるときには、政府を改廃して新たな政府を設立し、人民の安全と幸福を実現するのにもっともふさわしい原理にもとづいて政府の依って立つ基礎盤を作り直し、またもっともふさわしい形に権力のありかを作り変えるのは、人民の権利である。

(五十嵐武士訳)

1 独立宣言の採択 フィラデルフィアで開催された大陸会議で、独立宣言の最終案を提案している委員たち。

読み解き ロックの『統治二論』は、アメリカ独立宣言に影響を与えたといわれている。p.186の史料を読み、『統治二論』のどのような主張が独立宣言に影響を与えているのか確認してみよう。

1 独立宣言と啓蒙思想 合衆国の独立宣言には、ロックの流れを引く自然権としての人権や革命権といった思想をみることが出来る。また、国の制度には三権分立といった啓蒙思想が説いた原理が反映されている。

2 植民地側への国際的支援 フランスのラファイエット(→p.200)やポーランドのコシュシコ(→p.184)が義勇軍に参加した。またロシアのエカチェリーナ2世(→p.183)の提唱で、スウェーデン・デンマーク・プロイセン・ポルトガルが武装中立同盟を結んで、中立を守った。

3 パリ条約(1783年) イギリスは、アメリカの独立を公式に認め、フロリダを除くミシシッピ川以東のルイジアナをアメリカ

アメリカの独立、フランス革命、ラテンアメリカ諸国の独立までを一連の環大西洋革命としてとらえることで、各地の動きをつなげて理解できる。

2節のまとめ
アメリカの独立革命は成功したと言えるだろうか、あなたの考えを説明しよう。

アメリカの独立

13植民地の本国政府への不満は、ついに独立戦争を引き起こし、アメリカ合衆国が成立した。

1775年4月、ボストン郊外のレキシントンとコンコードで起こったイギリス軍と植民地軍の武力衝突によって、**アメリカ独立戦争**が始まった。

第2回大陸会議で、植民地軍の最高司令官には、**ワシントン**が任命された。また、君主制度の弊害を説いたトマス=ペインの『**コモンセンス**』は、当時最大のベストセラーとなり、植民地の独立の動きに強い影響を与えた。1776年7月4日、大陸会議は**ジェファソン**らが起草した『**独立宣言**』を採択した。この宣言では、自然法と人民主権の考え方から、独立の正当性が主張された。翌77年には国名を**アメリカ合衆国**とした。

独立戦争では、イギリスと対立していたフランスやスペインも植民地側に立って参戦した。1781年のヨークタウンの戦いで独立派が勝利し、国際世論も植民地側を支持し、大勢が決まった。1783年の**パリ条約**で13植民地の独立が承認され、イギリス重商主義帝国は破綻した。

1787年、フィラデルフィアで開かれた憲法制定会議は**合衆国憲法**を制定し、1789年にワシントン(1789~97)を初代大統領として新政府が成立した。この憲法は人民主権を認め、共和政に基づき、各州に自治権をもたせた連邦主義を採用した。アメリカの独立は、フランス革命に大きな影響を与え、その後、ラテンアメリカ諸国の独立も続いた。貿易や人の移動などで結びつきが強まった、大西洋を取り巻く地域の一連の諸革命は、**環大西洋革命**として、一つの大きな出来事としてとらえることができる。

一方、アメリカの独立では、白人の入植者たちの権利が保障されたにすぎず、黒人奴隷や先住民の立場はほとんど改善されなかった。また、独立後も、アメリカの産業や経済はイギリスに深く依存していた。



1 「昔は、最も有用な人々が踏みにじられていた」と題された風刺画 第三身分の上にある岩には対人・対物税、税金、賦役と刻まれている。風刺画は世論形成に大きな役割を果たすが、作者の考えが反映されるために事実の一部が誇張されたり隠蔽されたりもする。この図は、三つの身分のなかの多様性までは描かれていない。

読み解き 岩は何を意味しているだろうか。洋梨はフランスではおひとよし(でだまされやすい人)という意味があるが、どの身分の人を指しているだろうか。堅くて大木になることから正義を意味するナラはなぜ切られているのだろうか。

3節 フランス革命と国民国家の誕生

財政の危機から絶対王政の危機へ

身分制社会としてのフランス社会はさまざまな問題を抱えており、特に課税をめぐる問題が深刻であった。財政改革も試みられるが、成功しなかった。

5 七年戦争でイギリスに敗れたフランスは、イギリスに対抗してアメリカの独立戦争を支援した。しかし、イギリスのような財政制度の整備は遅れ、多額の戦費はますます財政状況を悪化させる結果となり、財政を立て直しが急務となった。

当時のフランス社会は「旧体制(アンシャン=レジーム)」とよばれ、聖職者(第一身分)と貴族(第二身分)が特権身分として絶対王政を支えていた。彼らは官職を独占し、土地の大半を所有しているながら、免税特権を与えられていた。一方、人口の9割以上を占めた**第三身分**(農民や都市の民衆)は重税を課され、特に農民は領主への重い貢租に苦しんでいた。また徴税を行う役人は主に貴族で、税の大部分が彼らの取り分となり、国家収入の減少を招いていた。

国家財政の悪化は、**ルイ16世**の時代には、危機的な状況になった。国王は、農業を経済の基礎とする重農主義者**テュルゴ**や銀行家**ネッケル**を登用して、特権身分に対する課税などの財政改革を目指したが、貴族や聖職者の抵抗にあって失敗に終わった。

18世紀になると第三身分のなかから、資本家的な活動をする富裕な**工商業者**や**大農場経営者**などの市民(**ブルジョワジー**)が勃興してきた。自由な商工業活動を求める彼らは、貴族の特権や領主制、絶対王政への反発を強めていった。

革命の展開とその意義

25 課税問題から始まった革命は、初め立憲君主政を目指したが急進化し、王政廃止と国王処刑、恐怖政治へと進んだ。基本的人権など今日に至る理念も提唱された。財政難に苦しむ国王は、課税の承認を求めて、1615年以来招集して

七年戦争やアメリカ独立戦争支援の結果、フランスでは財政再建が急務となり、それが革命の引き金になったことがわかる。

化など、自由な経済活動を主張した。

Key Word **ブルジョワジー**
語源は「ブルク(城塞都市)の住民」。フランス革命の時代は、財産をもつ市民(有産市民)の意味で用いられることが多かったが、資本主義社会の確立後は、無産の労働者に対する「資本家」の意味を帯びるようになった。

2 **ブルジョワジーとフランス革命** フランスでも18世紀には繊維産業などの発展があったが、アンシャン=レジームの下ではブルジョワジーの成長に限界があった。フランス革命によってアンシャン=レジームが崩壊するとうした制約がなくなった。

3 **啓蒙思想とフランス革命** 特権身分からも、1789年に『第三身分とは何か』を書いたシェイエスのように、啓蒙思想の立場からアンシャン=レジームを批判する者が現れた。



◀1 **バスティーユ牢獄の襲撃**
 ネットケルの解任に憤慨した民衆が立ち上がり、革命のきっかけとなった。今日でもこの日(7月14日)は、革命記念日として祝休日になっている。

→2 **サンキュロット** キュロットとよばれた、貴族が着用していた半ズボンを持たない階層という意味で、フランス革命時代の都市民衆を指して使われた。



1 **封建的特権の廃止** 領主裁判権や教会の十分の一税は、無償で廃止された。一方、農民から地代・年貢を徴収する権利(封建地代)は農民自身に買いとらせることとされたが、貧しい農民が買いとることができる額ではなかった。

2 **『人権宣言』** フランス革命の人権宣言は、歴史上、画期的な宣言であったが、そこでは女性や奴隷の解放などへの言及はなかった。それらが実現するには、かなりの時間を必要とした。



3 **度量衡の統一** 革命期に統一されていった単位を人々に知らせるために、こうした版画がつけられた。

3 **ヴァレンヌ逃亡事件** 1791年6月、ルイ16世の一家が、オーストリア領ネーデルランド(→p.182)に逃亡しようとして失敗に終わった事件。

4 **ラ=マルセイーズ** マルセイユからの義勇兵たちの国歌。1795年にフランス国歌となった。王政復古(→p.214)により国歌ではなくなったが、第三共和政下で再び国歌となり現在に至っている。

いかなかった三部会を、1789年5月にヴェルサイユで開いた。しかし、議決の方法をめぐる対立し、第三身分の議員を中心に、**国民議会**が形成され、憲法制定まで解散しないことを誓った(球戯場の誓い)。

国民議会が憲法の起草を求めると、貴族と国王はこれを弾圧しようとした。このため、食料危機とネットケルの解任に不満を抱いていたパリの民衆は、7月14日、武器弾薬を求めて圧政の象徴とされた**バスティーユ牢獄を襲撃し、フランス革命が始まった**。8月、国民議会は封建的特権の廃止を宣言し、**ラ=ファイエット**らが起草した『**人権宣言**』を採択した。この宣言には、**自然法に基づく基本的人権・国民主権・私有財産権の不可侵**などが盛り込まれた。1790年には議会在が教会財産の没収・ギルドの廃止・度量衡の統一を進め、ブルジョワジーの経済活動を容易にした。

議会内では、**ミラボー**や**ラ=ファイエット**などの立憲君主派(ファイヤン派)が主導権を握り、1791年9月、有産市民のみに選挙権を与える立憲君主政の憲法を發布した。しかし、すでに国王は、**ヴァレンヌ逃亡事件**などで信頼を失っていた。1791年の憲法の下で新たに成立した**立法議会**では、王政廃止を主張する**ジロンド派**が翌年春に政権についた。彼らは、革命に圧力をかけていたオーストリアに対して宣戦した。革命の波及をおそれたオーストリア・プロイセン連合軍がフランス国内に侵入すると、フランス人は愛国心をかきたてられ、革命の防衛のために全国各地から義勇兵がパリに集まった。8月、外国勢力と通じたとして国王が逮捕され、王権が停止された(8月10日事件)。翌月には、男子普通選挙による**国民公会**が成立し、共和政(第一共和政)の成立が宣言された。国民公会では、下層市民や農民に支持された急進的な**ジャコバン派**(山岳派)が台頭し、1793年1月、ルイ16世を処刑した。

革命の影響が自国に及ぶをおそれたイギリス首相**ピット**が、大陸の諸国と**対仏大同盟**を結成したため、フランスはヨーロッパ諸国との戦い

史料 **人間および市民の権利の宣言(フランス人権宣言)**

第1条 人間は自由で権利において平等なものとして生まれ、かつ生きつづける。社会的区別は共同の利益にもとづいてのみ設けることができる。

第2条 あらゆる政治的結合の目的は、人間のもつ絶対に取り消し不可能な自然権を保全することにある。これらの権利とは、自由、所有権、安全、および圧政への抵抗である。

第3条 すべての主権の根源は、本質的に国民のうち存する。いかなる団体も、またいかなる個人も、明示的にその根源から発してはならない権限を行使することはできない。

第10条 いかなる者も、その主義主張について、たとえそれが宗教的なものであっても、その表明が法によって確立された公共の秩序を乱さないのであれば、その表明を妨げられてはならない。

第11条 思想および主義主張の自由な伝達は、人間のもっとも貴重な権利の一つである。それゆえいかなる市民も、法によって定められた場合にはこの自由の濫用について責任を負うという留保付きで、自由に発言し、著作し、出版することができる。

第17条 所有権は、神聖かつ不可侵の権利であり、したがって、合法的に確認された公的必要性からそれが明白に要求されるときであって、かつ予め正当な補償金が払われるという条件でなければ、いかなる者もその権利を剥奪されえない。(田中正人訳)

史料 **女性および女性市民の権利の宣言(女性宣言)**

第1条 女性は、自由なものとして生まれ、かつ、権利において男性と平等なものとして存在する。…

第10条 何人も、自分の意見について、たとえそれが根源的なものであっても、不安をもたらし、それがあってはならない。女性は、処刑台にのぼる権利をもつ。同時に、女性は、その意見の表明が法律の定める公の秩序を乱さない限りにおいて、演壇にのぼる権利をもたなければならない。

第11条 思想および意見の自由な伝達は、女性の最も貴重な権利の一つである。それは、この自由が、子どもと父親の嫡出関係を確保するからである。したがって、すべての女性市民は、法律が定める場合に、その自由の濫用に責任を負うほかは、野蛮な偏見が真実を偽らせることのないように、自由に自分が貴方の子の母親であると言うことができる。

第13条 公的強制力の維持および行政の支出のための、女性と男性の租税の負担は平等である。女性は、すべて賦役と役務に貢献する。したがって、女性は、(男性と)同等に、地位・雇用・負担・位階・産業に参加しなければならない。(辻村みよ子監訳)

4 『フランス人権宣言』

読み解き 『フランス人権宣言』のそれぞれの条文はどのような権利について言及しているのだろうか。また、『女性宣言』には『フランス人権宣言』に書かれていない、女性の権利が明記されている。その部分はどこだろうか。

(フランス革命戦争)を続けることとなった。国民公会は、男子普通選挙制をとる1793年憲法を發布し、最高価格令による物価統制や封建地代の無償廃止などの経済改革を行った。さらに、徴兵制や共和暦(革命暦)を採用し、神の代わりに人間理性の崇拜を強制した。

5 革命派内では、**ロベスピエール**らをリーダーとする**ジャコバン派**が、職人や小店主を中心とする都市民衆の支持を得て政権を握り、強大な権限をもつ独裁機関の公安委員会を使って恐怖政治を展開した。この政治は人々に不安を与え、ブルジョワジーは経済統制政策に不満を感じ、土地を得た農民たちもそれ以上の変化を望まなかった。ジャコバン派の内

10 部では対立が激しくなり、**ロベスピエール**が政敵を失脚させ独裁を強化した。しかし1794年に、彼自身が失脚し処刑されて、恐怖政治は終わった(テルミドールの反動)。

フランス革命は、身分制社会の枠組みを壊し、市民(ブルジョワジー)の政治的・社会的な活動への制約をなくした。経済活動の自由も大幅に認められるようになった。革命派の提唱した**自由・平等・基本的人権**などの理念は、近代世界の根底をなす思想として今日まで引き継がれている。貴族の免税特権を廃止したフランスは国家財政の基盤を強め、また、外国の干渉を排除する必要から国民軍を設けた。この過程で国民として

5 女性活動家グージュが記した『女性宣言』

5 **ジャコバン派** 本来は、ジャコバンクラブという穏健派も含む幅広い革命団体であったが、穏健なファイヤン派やジロンド派が離脱し、急進的な山岳派が主導権を握ったため、山岳派をジャコバン派とよぶことが多い。

本文とともに、フランス人権宣言を読むことで、自由権など現代につながる理念がフランス革命から引き継がれていることを理解できる。当時の女性の権利についても考察を深めることができる。

問い 1789年から1795年の総裁政府の設立までの政治体制や社会構造の変化を要約しよう。



↑1 **ダヴィド作『ナポレオンの戴冠式』** ナポレオンが、皇帝の称号を使用したのは、フランスだけでなく、ヨーロッパ世界全体を支配する意思を示したものであった。ナポレオンはみずから帝冠をかぶり、妻にも皇后の冠をかぶせようとしている。
(ルーヴル美術館蔵)

読み解き ダヴィドとゴヤはそれぞれのどのような効果をねらって、図1, 2を描いたのだろうか



↑2 **ゴヤ作『1808年5月3日マドリッド市民の処刑』** この日、ナポレオンの支配に抵抗したマドリッドの多数の市民を、フランスの軍隊が銃殺した。この事件に憤慨したゴヤは抗議の意味を込めて描いた。(プラド美術館蔵)

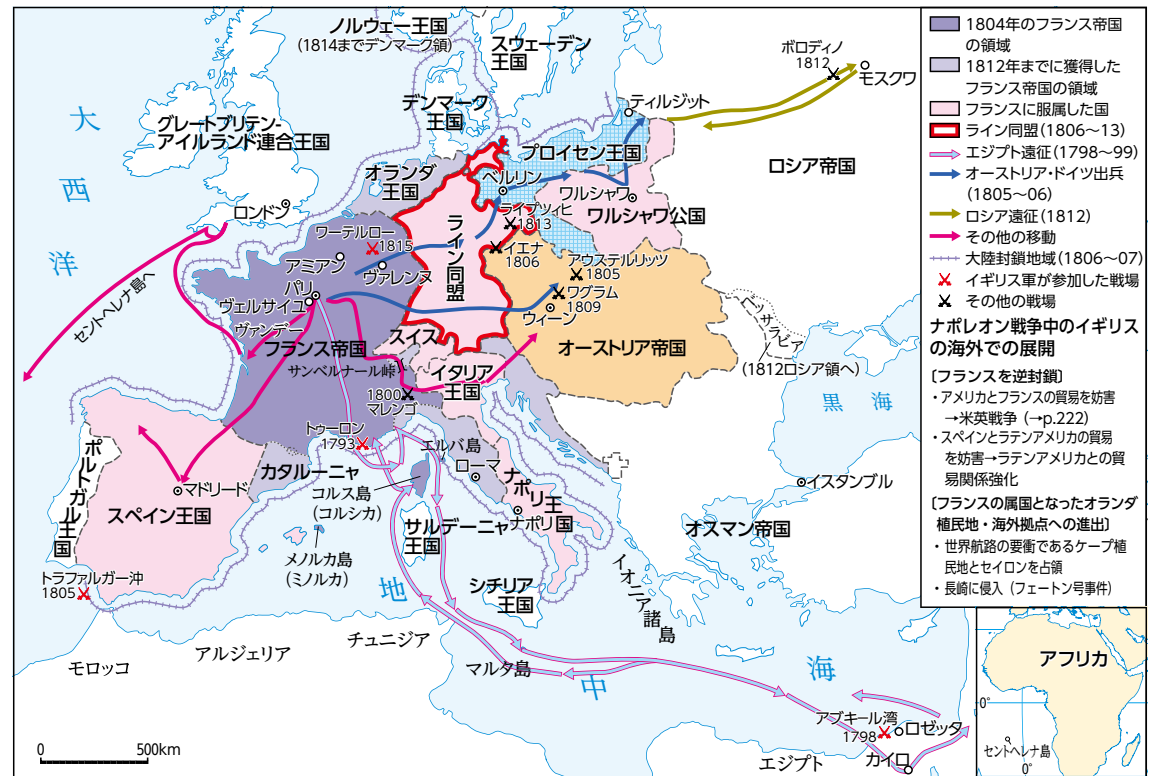
の意識も強まり、「国民国家」の形成へと向かった。

ナポレオンの帝政樹立

フランスの救世主として国民の期待を担った軍人ナポレオンは、独裁権を確立し、帝位に就いた。

1795年、穏健共和派によって新たな憲法(1795年憲法)が制定され、選挙権は再び財産額によって制限されて、5人から成る**総裁政府**が成立した。しかし、対外戦争や王党派の反乱で政権は安定しなかった。**1** 1795~99
1796年、ナポレオンはイタリア遠征で勝利し、対仏大同盟を崩壊させた。次いで、イギリス経済にとって重要な存在になっていたインドとの連絡路を断つため、エジプトに遠征した。しかし、イギリスがロシア・オーストリアなどと再び対仏大同盟を結成し、フランスが危機にひんすると、**2** 1798~99
1799年、ナポレオンは急ぎ帰国し、総裁政府を倒して、みずからを第一統領とする**統領政府**を樹立した(ブリュメール18日のクーデタ)。ナポレオンは、1801年に、それまで対立していたローマ教皇と宗教協約(コンコルダート)を結んで和解決し、翌年にはイギリスとアミアンの和約を結んだ。1802年に終身統領となって権力を手にしたナポレオンは、1804年には『**ナポレオン法典**』を制定してフランス革命の成果を定着させ、同年、国民投票により**3** 1804~14.15
1804年、ナポレオン1世として帝位についた(第一帝政)。

2 **内政の変化** 革命の終結を宣言したほか、フランス銀行を創設するなど、経済や行政、また教育の制度改革に努めた。
3 **『ナポレオン法典』** 私有財産の不可侵、法の下での平等、経済活動の自由などを規定し、近代市民社会の民法の基本となった。1804年に『フランス人の民法典』という名称で制定されたが、ナポレオンが独裁傾向を強めるにしたがい、1807年に『ナポレオン法典』と改称された。
4 **ライン同盟の成立** これによって神聖ローマ帝国は完全に消滅することになった(→p.178)。



↑3 **ナポレオン戦争**

覇権への挑戦と挫折

ナポレオンはヨーロッパを覆う大帝国を成立させ、イギリスに挑戦した。しかしその試みは失敗し、英仏の覇権争いはイギリスの勝利で決着がついた。

第一帝政に対抗して、イギリス海軍が1805年にトラファルガー沖の海戦でフランス・スペイン海軍を破った。しかしナポレオンは、大陸ではアウステルリッツの戦いでオーストリア・ロシア連合軍を破り、1806年には、ドイツ西部にみずからを盟主とする**ライン同盟**を組織した。さらにプロイセンとロシアの連合軍を破り、オランダ・スペインなどには、自分の兄弟を元首として配置し、フランス帝国を核とする、ロシア以外のヨーロッパ全域に及ぶ帝国をつくり上げた。イギリスが海軍力に支えられた海洋帝国を築いたのに対して、ナポレオンは大陸帝国を建設してイギリスに対抗した。ナポレオンは、イギリスを経済的に追い詰め、フランス産業のための市場を確保しようとして**大陸封鎖令**を発布し、大陸諸国にイギリスとの通商を禁じた。しかし、フランスの製品は品質が劣っていたうえ、大陸諸国はイギリスとの通商に深く依存していたので、経済封鎖はイギリスよりも大陸諸国に打撃を与えた。

1808年のスペインの反乱からナポレオンの大陸支配は動揺し、やがてロシアが大陸封鎖令を無視して、イギリスへの穀物輸出を再開した。ナポレオンはロシア遠征を試みたが、厳しい寒さなどのため、敗走した。これをきっかけに、各地で反フランス闘争が起こった。諸国は諸国民の

5 **ワルシャワ公国** ナポレオンは、1807年のティルジット条約で、プロイセンの領土の大半を奪い、ポーランドにワルシャワ公国を設立し、これを実質的に支配下においた。
6 **イギリスの植民地獲得** フランスがオランダを占領すると、イギリスはオランダ領であったケープ植民地やスリランカなどを占領し、海外領土を拡大した。
7 **米英(アメリカ-イギリス)戦争** アメリカがフランス側にフランスの大陸封鎖令は、イギリスとの通商に依存する大陸諸国にはかえって打撃となったことがわかる。

8 **大陸諸国とイギリスとの結びつき** ロシアや東欧の農業はイギリスへの穀物輸出に支えられており、輸出が止まると、貴族など地主層に大きな打撃となった。イギリスの工業製品もヨーロッパ諸国での必需品で、当時のフランスの生産能力では代替できなかった。



ナポレオン

視点を 変えて 国民意識と文化遺産~ブランデンブルク門

ブランデンブルク門は、ドイツの代表的文化遺産の一つである。1806年にベルリンを占領したナポレオンは、ブランデンブルク門の屋上にある4頭立て馬車に乗る勝利の女神像をパリのルーヴル美術館に運び込み、フランスの軍事的栄光を国民に宣伝した。左の絵はナポレオンが描かせたもので、パリに持ち帰った像がまだ門の屋上に置かれている様子はベルリン占領の軍事的栄光を示すのに格好の素材となった。

1815年にナポレオンが失脚すると、パリを占領したプロイセン軍が像を持ち帰り、もとの場所に据えた。さらに、門に面する広場は、パリ占領を記念して「パリ広場」と改名された。

ブランデンブルク門という文化遺産は、独仏それぞれの国民意識の強化に関与したのである。

↑1 『ナポレオン皇帝のベルリン入城 1806年 10月27日』(ヴェルサイユ宮殿蔵)

① **ナポレオンの百日天下** 退位したナポレオンは、イタリア半島沖のエルバ島にいったん追放されたが脱出し、帝位に復帰した。しかしわずかの期間のうちにワーテルローの戦いで敗れ、捕虜として南大西洋の孤島のイギリス領セントヘレナ島で軟禁され、死亡した。

戦い(ライプツィヒの戦い)でナポレオン軍を破り、パリを占領した。帝位を退いたナポレオンは、その後一時復帰したが、ワーテルローの戦いで再び敗れ、その帝国は完全に崩壊した。ナポレオンの敗退によって、長期にわたるイギリスとフランスの抗争はイギリスの勝利に終わった。

ヨーロッパに広がる国民意識

ナポレオンに支配されたヨーロッパ各地では、政治と社会の改革を行い国民意識の高揚を目指す人々が現れた。

ヨーロッパ大陸の制覇を目指したナポレオンの支配は、『ナポレオン法典』などを通じて、フランス革命の原理を、ヨーロッパ各地に浸透させた。しかし同時にフランスの支配に対する反対運動を引き起こし、各地の国民意識を目覚めさせることにもなった。

1807年からフランス軍が駐留したプロイセンでは、哲学者**フィヒテ**が講演「ドイツ国民に告ぐ」を行って国民意識の形成をよびかけ、政府内でも改革を進める者が現れた。1807年、宰相**シュタイン**が農奴制を廃止し、後を継いだ**ハルデンベルク**もギルドの特権を廃し、営業の自由を認めるなどの行政改革に努めた。これらの改革で、農場経営を行うユンカー層の勢力が強まり、ユンカー出身者が官僚や将校として、プロイセンの政治や経済の中核を担うようになった。こうして、プロイセンはその後のドイツ統一の中心となっていった。

プロイセンに限らず、国際的な分業体制のなかでより有利な地位を占めようとした地域は、イギリスやフランスなどの強国に対抗するため、みずからも強力な国家をつくり上げる必要に迫られた。そのため、貴族などの特権階級だけが国家を支配するのではなく、国民意識を高揚させて、「国民」が国家を支えるという「**国民国家**」をつくり、国力を高めようとした(**ナショナリズム**)。幅広い人々に「国民」としての意識をもたせるためには、自由と平等というフランス革命の基本となった考え方をとり入れて、社会と政治の改革を進めることが不可欠であった。

Key Word 国民国家

一つの「国民」が一つの「国家」をつくるべきだという理念。革命で身分制議会が廃止され、国民意識の高まったフランスなどが最も典型的とされる。近代のヨーロッパでは、「国民」や「国民国家」が理想と考えられた。しかし、「国民」とみなされる要素は、民族、理念、歴史など多様で、国に

強国に対抗するため「国民国家」が生まれ、それを支えるため「ナショナリズム」が唱えられたことがわかる。また、国民意識高揚のため、フランス革命の理念である自由・平等のもとで「国民」を統合しようとしたことが、この時代の特徴だとわかる。

3節のまとめ

フランス革命はヨーロッパにどのような影響を与えただろうか、あなたの考えを説明しよう。



←1 シモン=ボリバルとサン=マルティンの会合 彼らは1822年、エクアドルの港グアヤキルで、ペルーの未来について話し合った。



4節 ラテンアメリカへの革命の波及

ラテンアメリカの独立はどのような人々が担ったのだろうか。

ラテンアメリカの独立

革命の波はラテンアメリカにも及んだ。植民地は定住白人の指揮下に次々と独立し、ほぼ現代の国境が画定した。

19世紀初頭のラテンアメリカは、ほとんどがスペイン植民地とポルトガル領ブラジルで構成され、カリブ海の島々にはイギリス・フランスなどの奴隷制砂糖プランテーションが広がっていた。

フランス革命で本国が混乱すると、まず、仏領サン=ドマングで黒人奴隷たちが、**トゥサン=ルーヴェルテュール**を指導者として蜂起した。彼自身はナポレオン軍に逮捕され獄死したが、1804年に、最初の黒人国家であるハイチ共和国が独立した(**ハイチ革命**)。アメリカの独立は、定住した自由な白人たちの本国からの独立にすぎなかったが、ハイチでは奴隷の黒人たちによって独立が成し遂げられた。植民地に重税を課していたヨーロッパ諸国は、このような動きがほかの植民地に広がることをおそれ、独立を目指す現地の白人支配者と妥協するに至った。

植民地生まれの白人(**クリオーリョ**)たちは、先住民や黒人奴隷に対しては支配者であったが、本国からは抑圧されていたため、各地で解放運動が始まった。**シモン=ボリバル**や**サン=マルティン**の活動によって、1830年までに、カリブ海を除くラテンアメリカの大半が独立国となった。

イギリス外相**カニング**やアメリカ大統領**モンロー**は、この動きを事実上容認した。スペイン領の植民地が独立すれば、イギリスらは自由に貿易ができ、自国に有利な市場になると考えたためである。このため独立後も、ラテンアメリカではプランテーション経営が続き、単一作物をつくる**モノカルチャー**に依存する基盤がつくられた。イギリスがこれらの作物の重要な輸出先となったため、ラテンアメリカ諸国は政治的には独立していても、事実上イギリスの経済的支配の下におかれていった。

1章の振り返り 大西洋を取り巻く地域で起こった革命は、それぞれの地域の社会構造をどのように変えただろうか、あなたの考えを説明しよう。

↑2 ラテンアメリカの独立

① ラテンアメリカ独立の動き

メキシコも聖職者イダルゴの影響。ラテンアメリカ諸国の独立の背景には、ハイチ革命の波及をおそれた、ヨーロッパ本国と植民地の白人支配者との妥協の面もあったことがわかる。

の問題に「関与すべきでない」と宣言した。この考え方は、アメリカ外交の底流となつた(→p.222)。

イギリスがラテンアメリカ諸国の独立の動きを容認した背景には、植民地の独立により自由貿易ができるようになる面があったことがわかる。

域の経済的支配を拒むイギリスの反対により、成功しなかった。

独立後、ラテンアメリカ諸国はイギリスの経済的な従属下に置かれたことがわかる。

授業や自学自習ですぐに活用できる！ 教科書に関連したデジタルコンテンツ



演習問題

- 教科書に準拠した演習問題をWeb上に用意。
- 学校法人河合塾と共同作成。全93問の問題を掲載。
- テスト前や受験前の演習にも活用できる。

↓演習問題 2部1章 問6

2部1章 問6

Q.

中国に続いて、高句麗・新羅・百済の三国が並立していた朝鮮半島でも、7世紀に統一に向かう動きが起こった。7世紀における、朝鮮半島がほぼ統一されるまでの諸国の動向を、周辺諸国との関係にも留意しながら120字以内で説明せよ（句読点も字数に含めること）。解答にあたっては、下記の二つの語句を適切な箇所です必ず用い、用いた箇所には下線を施せ。

煬帝 白村江の戦い



重要用語

- 教科書執筆者による用語解説をWeb上に用意。
- 全493語の解説を収録。
- 歴史用語をより深く理解できる。

↓重要用語「産業革命」

← 重要用語 家

産業革命

18世紀のイギリスで始まった、それまでの農業主体の社会から工業主体の社会への変換のこと。自然科学の研究が進んだことで、その成果を活かした技術革新が相次ぎ、製造業が飛躍的に成長した。先んじた農業分野における技術革新（農業革命）によって食糧供給が安定したことでもたらされた人口増が工場での労働力を支えた。近年、「革命」といえるほど急激な変化であったかについては異論もあるが、世界史的に考えた場合、さまざまな領域に大きな変化をもたらしたことは間違いない。【教p.194】

教科書p.3「QRコードについて」や教科書の裏表紙に掲載しているQRコードを読み取ることでアクセス可能。

*QRコードを読み取り、表示されたウェブサイトへアクセスした際には、通信料がかかる場合があります。
*QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です。



▲QRコンテンツはこちらから



一問一答

- 教科書に準拠した一問一答に取り組める。
- 全760問掲載。
- 取り組む際には、部ごと、章ごと、節ごとのいずれかを選択できる。

↓一問一答 2部2章2節(解答画面)

単元選択へ

Q. 8世紀半ば、シャイレーンドラ朝によって築かれたジャワ島中部の仏教遺跡を何というか。

A.

ポロブドゥール寺院



動画

- 本文や図版に関連した動画を見ることができる。
- 全20点の動画を掲載。
- *教科書に「QR動画」マークがある図版や、本文の「動画」アイコンが付いた用語に関する動画を掲載。

ページ	タイトル	ページ	タイトル
193	ローズヴェルト大統領のラジオ演説	307	ベルリン空輸
271	第一次世界大戦中に工場働く女性(アメリカ)	310	サンフランシスコ平和条約調印
272	民衆に向かって演説するレーニン	323	マルタ会談
286	フォードの自動車工場(1928年)	323	「ベルリンの壁」の開放
291	混乱するニューヨーク証券取引所	325	湾岸戦争
294	昭和天皇と面会する溥儀(1935年)	331	ニクソン大統領による金・ドル交換停止発表
299	真珠湾攻撃の被害	332	イラン=イスラム革命
300	原爆で破壊された広島市街	333	天安門事件
301	ヤルタ会談	334	東海道新幹線の開通
302	ナチ党支配下のドイツ	343	アポロ11号の打ち上げ



地図

- 特設「結びつく世界」に掲載された世界地図の画像データを掲載。



外部リンク

- 学習に役立つウェブサイトへのリンク集を掲載。
- 海外の博物館へのリンクも掲載。

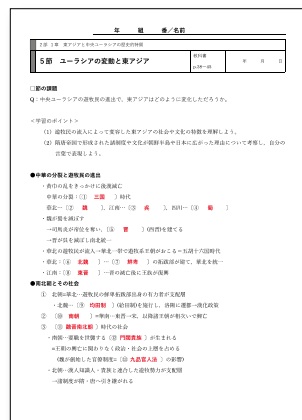
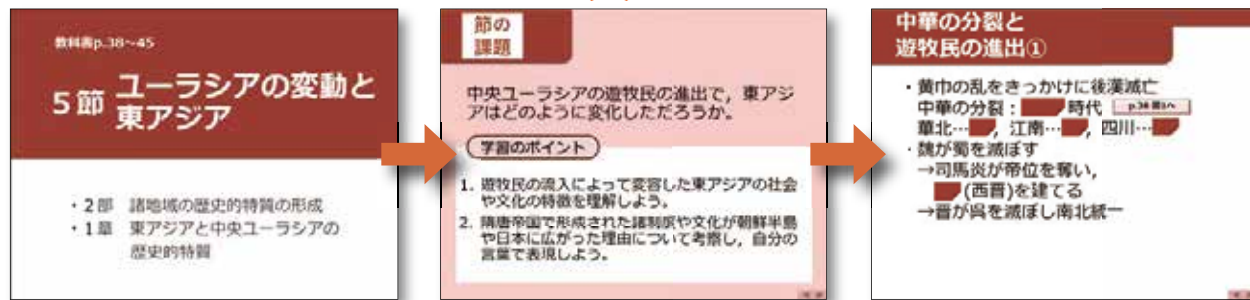
1 指導資料

書名	収録内容
新詳 世界史探究 指導資料 Webサポート コンテンツ付 定価：28,600円(税込)	①指導資料 <ul style="list-style-type: none"> 通常ページについては、単元のねらい、指導内容の整理、指導上のポイント、問い・読み解きの解答例、写真・図版の解説、本文の解説、参考文献などを掲載。 その他、「問いを表現しよう」や特設「探究 TRY」「結びつく世界」の解説、また指導書オリジナルの特設ページ「論点」「論点現代」も掲載。
	②指導書 Web サポート* <ul style="list-style-type: none"> 授業スライド (.pptx/Google スライド) 授業プリント (.docx) 見通し・振り返りシート (.xlsx) 特設ページワークシート (.docx) 評価問題例〈テスト例〉 (.docx) 年間指導計画案・評価規準例 (.xlsx) 指導内容の整理 (.txt) 教科書紙面 (.pdf) 教科書本文 (.txt) 教科書掲載図版〈カラー・モノクロ〉 (.jpg) <ul style="list-style-type: none"> 問い・まとめ・振り返りの解答例・ポイント (.txt) 『新詳 世界史探究 演習ノート』データ (.docx) 教科書 QR コンテンツ〈一問一答〉 (.xlsx) 教科書 QR コンテンツ〈重要用語〉 (.xlsx) 教科書 QR コンテンツ〈映像資料〉へのリンク QR コンテンツの素材へのリンク 白地図集 (.jpg) 参考文献 (.docx) <p>* Web サポートは、帝国書院ウェブサイトからデジタルコンテンツをダウンロードいただけるサービスです。</p>

指導書 Web サポートの例

2023年6月より
Googleスライドも
ご利用いただけます

▼授業スライドのイメージ



◀授業プリントのイメージ

授業スライドの付せんの部分を穴埋めしているのので、スライドと連携して活用できる。



◀教科書紙面のイメージ

教科書紙面の PDF データをダウンロードすることができる。電子黒板に投影して授業することができる。

2 教科書準拠ノート

書名	収録内容
新詳 世界史探究 演習ノート 定価：700円(税込)	<ul style="list-style-type: none"> 教科書に完全準拠した、書籍版のノート。 学習事項を着実に習得できる。 資料読解の問題も収録。資料を読み解く技能が身につく。
デジタル準拠ノート 新詳 世界史探究 定価：980円(税込)	<ul style="list-style-type: none"> 「新詳 世界史探究 演習ノート」を、タブレット用に再構成。 タブレットに入力した解答は、自動で正誤判定される。 先生用管理ページで、生徒の学習進捗状況を確認できる。 作問ツールで、新たな問題を作成し、配信できる。
セット版 (書籍+デジタル) 定価：1,480円(税込)	<ul style="list-style-type: none"> 書籍版とデジタル版の両方を使用できる。

3 資料集

書名 / 特色	* 価格は2023年度版のもので。	販売形態
	最新世界史図説 タペストリー 二十一訂版 <ul style="list-style-type: none"> 世界史のタテ（時間軸）とヨコ（空間軸）を整理できる全体構成。通史ページでタテの流れを、世紀別「世界全図」でヨコのつながりを確認できる。 入試頻出の時事問題と関連づけた問題やテーマ史問題、資料読み解き問題などに対応できるよう、グラフ資料や年表資料、絵画資料などを豊富に掲載。 	書籍版 定価 957円(税込)
	明解世界史図説 エスカリエ 十五訂版 <ul style="list-style-type: none"> 導入の「クイズ」とまとめの「ポイントチェック」で、楽しく世界史学習に取り組める。 歴史上の人物を身近にとらえる「チャートで診断 あなたと気が合う!? 世界史上の人物」や、文化の特色や社会背景を眺める「アートに TRIP」など、世界史に興味を持てる仕掛けが充実。 	書籍版 価格 887円(税込)

特色一覧

* 下記の表は、帝国書院ウェブサイトでご覧・ダウンロードできます。

項目	内容
総合的な特色	<ul style="list-style-type: none">因果関係を重視して書かれた本文や、「文化から見る当時の社会」、また特設「結びつく世界」により、世界史の流れや社会構造、文化の背景、世界のつながりが理解できる。特設「探究TRY」をはじめとする資料読解や問いにより、思考力・判断力・表現力を育成できる。要約文・本文・側注の三段構成や、豊富な資料により、世界史を整理して学習することができる。
内容	<ul style="list-style-type: none">本文は全時代において、因果関係が重視され、歴史の流れや社会構造が理解できる記述となっている。多様な世界の成り立ちとそこに暮らす人々との共生、国際協力の重要性を理解できるよう、2部では諸地域の歴史的特質の形成が、3部では諸地域の交流やつながりの歴史が、4部では世界の結びつきのなかで起こった戦争と平和への取り組みが、5部では現代世界の課題と解決に向けた取り組みが丁寧に取り上げられている。随所に「文化から見る当時の社会」が設けられ、絵画や史料などの文化資料を読み解くことで、当時の社会の様相や、社会と文化が相互に与えた影響、当時の文化が現在に与えた影響を理解できるようになっている。随所に特設「結びつく世界」が設けられ、同時代的におこった社会構造の変化や、現代に至る世界の一体化の過程、諸地域の相互関係が理解できるようになっている。コラムは、多様な立場を踏まえて歴史事象を多面的・多角的に考える「視点を変えて」、当時の日本と世界の結びつきや相互の影響を紹介する「世界史の中の日本」、持続可能な開発目標に関する歴史事象を紹介する「SDGsを考える世界史」、現代のさまざまな諸課題の歴史的経緯を理解できる「ケーススタディ 現代の諸課題を考える」など、さまざまな視点から内容を深められるよう設置されている。特設「探究TRY」は、これまで学習した内容を踏まえて複数の資料を読み解くことで、学習上重要な概念についての理解を深めながら、思考力・判断力を育成できるようになっている。
構成・分量	<ul style="list-style-type: none">補足的な事項や詳細な内容は側注に書き分けられており、学習内容のポイントを端的に押さえることができる小見出しごとの要約文も設置されているため、歴史の大枠から詳細な事項までを整理して学習できるようになっている。図表や絵画資料、史料が充実しているとともに、資料読解を促す「読み解き」が随所に設けられ、資料の比較や関連づけなど、資料の活用を通して思考力・判断力を育成できるよう配慮されている。思考力・判断力・表現力を育成することができるよう、学習を見通す「章の見通し」「節の課題」、学習内容を振り返る「問い」「節のまとめ」「章の振り返り」などが随所に設置されている。教科書全体を通して、QRコンテンツが充実し、教科書紙面を超えたさまざまな学びに対応できるようになっている。特に、「一問一答」「演習問題」は学習内容の定着を図ることができるよう、「重要用語」「地図」は学習事項に対する理解を深めることができるよう、「動画」「外部リンク」は学習意欲を高めることができるよう配慮されている。
表記・表現及び使用上の便宜	<ul style="list-style-type: none">学習指導要領に合わせて、重要事項がもれなく丁寧に解説されている。ふりがなや重要語句へのゴシック(太字)が効果的にほどこされている。本文には関連図版・写真の図番号が示されており、資料の活用を促す工夫がなされている。本文行間には関連する事項が扱われている箇所への参照ページが割り当てられている。
ユニバーサルデザインへの対応	<ul style="list-style-type: none">本文や側注、キャプションなどの文字は、はっきり読み取ることができるユニバーサルデザインフォント(UDフォント)が使用され、読み取りやすい配慮がなされている。カラーユニバーサルデザインに配慮されており、色覚特性をもつ生徒にも読み取りやすい表現になっている。
その他	<ul style="list-style-type: none">紙は環境に配慮した森林認証紙が使用されているほか、裏写りがしない用紙が使用されている。インキには、再生産が可能な植物由来の油などを原料とするインキが使用されている。使用期間の間、破損することがないように、堅牢なつくりになっている。指導資料や準拠ノート、デジタル教材など、充実した関連教材が用意されている。

著作者

桃木 至朗 (大阪大学 名誉教授)	●	吉澤 誠一郎 (東京大学 教授)	●	加藤 健司 (愛知県立天白高等学校 教諭)
杉本 淑彦 (京都大学 名誉教授)	●	山下 範久 (立命館大学 教授)	●	川島 啓一 (同志社中学校・高等学校 教諭)
指 昭博 (神戸市外国語大学 名誉教授)	●	杉山 清彦 (東京大学 教授)	●	後藤 誠司 (京都市立高等学校 元教諭)
青野 公彦 (早稲田大学高等学院 教諭)	●	末近 浩太 (立命館大学 教授)	●	野々山 新 (愛知県立大府高等学校 教諭)
三田 昌彦 (名古屋大学 助教)	●	青木 一真 (東京都立国際高等学校 指導教諭)	●	美那川 雄一 (静岡県立小山高等学校 教諭)
清水 和裕 (九州大学 教授)	●	大橋 康一 (滋賀県立高等学校 元教諭)	●	株式会社帝国書院

編集協力者

笹川 裕史 (大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎 教諭)

矢部 正明 (関西大学中等部・高等部 教諭)

学校法人 河合塾

特別支援教育に関する監修・校閲者

丹治 達義 (筑波大学附属視覚特別支援学校 教諭)



◀ 帝国書院特設ウェブサイトはこちらから